

山形県立博物館研究報告

第 37 号

BULLETIN
OF
THE YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM
NO. 37

山形県立博物館
YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM
March 29, 2019

はじめに

山形県では平成 30 年 2 月、「山形県文化基本条例」を公布・施行し、それに基づく文化に関する基本的施策の策定を進めています。このことにより、「文化に親しむ環境づくり」や「文化をはぐくむ人づくり」、「文化を活用した社会づくり」が一層進むことが期待されます。そうした中、4 月には「山寺が支えた紅花文化」が本県 4 件目となる日本遺産に認定、11 月には「遊佐の小正月行事（あまはげ）」を含む「来訪神：仮面・仮装の神々」が世界無形文化遺産に登録されるなど、今年も県内の有形無形の文化財が注目を集めました。これらは、本県の歴史と文化、自然の豊かさを物語る県民全体の財産であり、郷土に対する県民の愛着や誇りの醸成に欠くことのできないものであります。

本館では、国宝土偶「縄文の女神」や県指定天然記念物「ヤマガタダイカイギュウ化石」をはじめとする「やまがたの宝」を中心に、各分野の貴重な資料を保存・整理し、調査・研究を進めながら県民の皆様はその価値を知っていただき、また広く活用していただくための展示や講座、さまざまな形での情報発信をおこなってまいりました。

このたび「山形県立博物館研究報告」第 37 号を刊行いたしました。

本号には、博物館職員が行っている研究の成果や教育普及活動の一端を紹介する 7 部門 8 編の論文を掲載しております。様々な業務を遂行している中での研究報告ですので不十分なところもあろうかと思いますが、今後ともより質の高い調査研究をめざしてまいりますので、忌憚のないご意見、ご感想を賜れば幸いです。

最後になりましたが、ご協力いただきました関係各位に心よりお礼申し上げ、研究報告刊行のあいさつといたします。

平成 31 年 3 月

山形県立博物館

館長 小松 幸樹

目 次

<地学部門>

- 石黒宏治 「カイギュウ化石の3Dプリンターによるレプリカの製作」
..... 1～4

<植物部門>

- 山口 真 「紅花色素抽出における化学的アプローチによる
簡易抽出方法の検討」 5～6

<動物部門>

- 羽角正人・本間正明 「山形県立博物館動物資料データベースと
S-Net/GBIF への登録」 7～56

<考古部門>

- 原田俊彦 「館長・学芸員講座「鎌倉の浜辺を掘ってみたら・・・」
を振り返る」 57～58

<歴史部門>

- 岩崎 靖 「^{ターニングポイント}「明治150年」記念特別展「転換点」をふりかえって」
..... 59～60

- 佐藤佳美 「資料紹介『庄司家絵画資料』について」
..... 61～64

<教育部門>

- 青木章二 「明治初期の教員養成事業と山形県師範学校の建設」
..... 65～68

<教育普及>

- 須田真由美 「博物館まつりの実施及び今後の課題について」
..... 69～72

カイギュウ化石の3Dプリンターによるレプリカの製作

石黒 宏治 *

Kouji Ishiguro

1 はじめに

平成27年度に、山形大学工学部古川研究室の協力を得て、ヤマガタダイカイギュウの頭骨やアンモナイトやデスモスチルスの歯などの3Dデータを取得し、3Dプリンタでそのレプリカを製作した。その年の化石展でこのレプリカがハンズオン展示され、実物大で手に持った子供たちに与えるインパクトは大きかった。また、このレプリカは裏側からも観察できる標本として教育普及の様々なイベントでも活用されている。

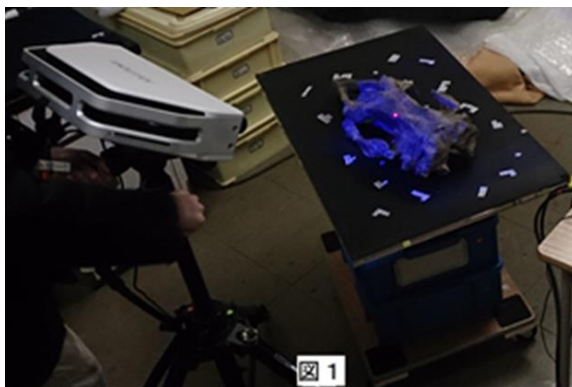
平成30年9月からのプライム企画展「ヤマガタダイカイギュウと人魚たち」で展示するために、山形大学工学部の協力を得て石膏の3Dプリンターでヤマガタダイカイギュウとアイヅタカサトカイギュウと妙見町産カイギュウ化石のレプリカを作製した。本稿では、このレプリカ製作の過程と展示会での様子、そしてレプリカ製作の今後について紹介する。

2 カイギュウ化石のレプリカ製作

(1) 化石の3Dデータ取得

山形県立博物館研究報告35にあるように、平成28年12月から平成29年2月まで山形県立産業技術短期大学校庄司研究室の卒業研究で、学生と共に高精度3Dスキャナー Solutionix 社 Rexcan cs+ (図1) でヤマガタダイカイギュウの全105点の詳細な3Dデータを取得した。また、平成30年3月には山形県立産業技術短期大学校の技術支援を受け、同じスキャナーでアイヅタカ

サトカイギュウの頭骨、肩甲骨、尺骨・橈骨の詳細な3Dデータを取得した。この3Dスキャナーは精度が非常に高く表面の細かな部分まで再現されている。ただし、頭骨など非常にファイルサイズが大きくなるので、使う用途に応じて間引き処理をして数段階の粗さのデータを作った。



(2) 3Dプリンターによる化石レプリカの製作

以下それぞれのレプリカの製作意図と製作過程を記す。

①ヤマガタダイカイギュウ頭骨

平成27年にもヤマガタダイカイギュウ頭骨を製作したが、内部形状のスキャンができず不完全の物だったので再度製作した。

3Dデータの取得に関しては、頭骨は形が複雑で中空になっているので、内側の形状が2つのカメラから死角になる部分が多く、測定できない大きな穴ができてしまう。自動穴埋めでは形状が不自然になってしまうので、光が届かない部分は粘土で型どりをして、その粘土をスキャンしそのデータと本体のデータを位置合わせした。2つのデータに若干のずれやゆがみが生じてしまうが、マ

* 山形県立博物館 研究員

ージして一つのデータとし、スムーズ化などの機能を使い3Dデータを完成させた。山形大学工学部古川研究室の石膏を材料とした粉末積層方式の3Dプリンター3Dsystems社のProjet460(図2)で造形した。石膏製なので質感や重量感も化石に



近い。プリントエリアは20cm×20cm×25cmで、頭骨は長さ52cmあるので3Dデータを5分割して造形し、それを接着した。どうしても継ぎ目が目立ってしまうので、そこをパテ埋めして内部まで十分乾いてから紙やすりで仕上げる。Projet460はインクジェットでフルカラー造形ができるが、より質感を出すためにヤマガタダイカイギュウの発見者の母校である県立左沢高校美術部に依頼しアクリル絵の具で着色した。(図3)



②ヤマガタダイカイギュウ肩甲骨、上腕骨、尺骨・橈骨

アイヅタカサトカイギュウと長岡市妙見町産ヒドロダマリス属カイギュウ化石(ミョウシー)の肩甲骨の3Dデータが得られたので、大きさや形状を比較するため製作した。また、上腕骨と尺骨・橈骨も製作し、腕の関節の繋がりや可動域を示す

ことができた。この3点も大きいので2分割して製作し接着し、パテ埋めして着色した。(図4)



③ヤマガタダイカイギュウ歯

ヤマガタダイカイギュウの新種の決め手となった歯は上下で10個産出している。ダイカイギュウは歯が消失していく進化をするが、この歯はヤマガタダイカイギュウ頭骨の歯槽には入るが、アイヅタカサトカイギュウ頭骨の歯槽には入らない大きさになっている。この2つの頭骨を裏返しにし、歯を一緒に置くことで、違いがわかりやすくなった。歯をProjet460で造形する際、歯は小さいので他の化石の造形時にそのすき間に配置して10個×2セット作った。(図5)



④アイヅタカサトカイギュウ頭骨

ヤマガタダイカイギュウの頭骨と大きさや形状を比較し、特に新種の決め手となった歯槽の形状がしっかりわかるように、山形県立産業技術短期大学の3DスキャナーSolutionix社Rexcan cs+で計測し詳細な3Dデータを得た。

①とほぼ同じ大きさなのでこれも5分割しProjet460で造形し、接着してパテ埋めしアクリル絵の具で着色した。(図6)



通常頭骨は上部を上にして展示するが、今回は下部を上にして、歯槽が見えるようにした。ヤマガタダイカイギュウのレプリカを脇に置いて比較すると、体が大きくなりながら歯が小さくなっていくダイカイギュウの進化の流れがわかる。



(図7 左アイヅタカサトカイギュウ
右ヤマガタダイカイギュウ)

⑤長岡市妙見町産ヒドロダリス属カイギュウ化石（ミョウシー）の肩甲骨

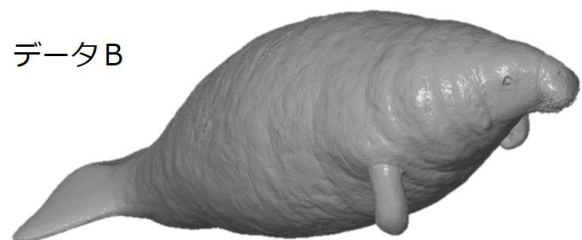
低価格で小型の3Dスキャナー3Dsystems社のSenseで計測を行った。Senseによるスキャンでは表面の細かい形状の計測は難しいが、カイギュウの肩甲骨などの大きさのあるものであれば、形態の比較をするのに十分なデータを取得することができる。62cmと大きいので6分割して石膏のProjet460で造形した。この肩甲骨は非常に大きく小さな子供がやっと手に持つことができるもので、展示ではヒドロダリス属カイギュウとドシシーレン属カイギュウの大きさの違いがよく分かるものとなった。



(図8 左ミョウシー 右ヤマガタダイカイギュウ)

⑥ヤマガタダイカイギュウスケルトンモデルとシリコーンモデル

山形県立産業技術短期大学校庄司研究室の卒業研究で学生と共に3Dスキャナー Solutionix 社 Rexcan cs+で1/10の生体復元模型をスキャンした。また、発掘された全105点をモデリングソフトで組み立てたデータAを、生体復元模型の3DスキャンデータBを半分に切って内部に配置し、それを結合し光硬化樹脂で造形し1/10のスケルトンモデルを製作した。(図9)





また、山形大学工学部の齊藤梓氏に技術指導を受け、Bの内部にAを配置し、光硬化樹脂でAを製作し、それを石膏で作ったBの鋳型の中にシリコンを充填した。柔らかい肉付き模型のシリコンモデルを製作した。(図10) どちらも化石の部位と体の位置がよくわかるモデルとなった。3Dデータがあることで様々な活用の可能性が広がる。



3 おわりに

平成30年9月から12月までのプライム企画展「ヤマガタダイカイギュウと人魚たち」で上記のレプリカをハンズオン展示として公開した。(図11) 今回のハンズオン展示のねらいに、手に持って裏側も観察し、間近で大きさを実感するということがあった。来館者のアンケートから「触れることで理解できる情報がかなり多く、学べるのが普通の展示より多い気がした。」「大きさを実感できてよかった。」「骨の組み合わせが面白かった」「化石の裏側まで見ることでよかった」などの感想がありねらいが達成できた。



平成30年11月にヤマガタメイカーズネットワークから博物館に3Dプリンターが寄贈された。(図12) ヤマガタダイカイギュウ、アイヅタカサトカイギュウなどのカイギュウ化石の3Dデータがあるので、博物館内でのレプリカ製作が可能になった。化石関連の教育普及のイベント等に活用していきたい。



最後に、今までの3Dスキャンと化石のレプリカ製作にあたっては、山形大学工学部の古川英光教授、川上勝准教授、齊藤梓氏、山形県立産業技術短期大学校の庄司英明教授、阿部雄斗氏、舟越優善氏から多大な協力を頂いたことに感謝を申し上げます。

紅花色素抽出における化学的アプローチによる簡易抽出方法の検討

山口 真 *

Shin Yamaguchi

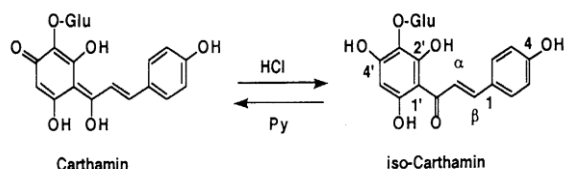
はじめに

山形県の花き産業についての調査を進める上で、紅花の紅色色素についての調査研究を行った。紅花の伝統的な紅色色素抽出方法を参考にしながら、小中学校の学校現場の設備で化学的かつ簡易に抽出する方法を模索し、実験を行った内容について報告する。

【1】紅花の色素研究の歴史について

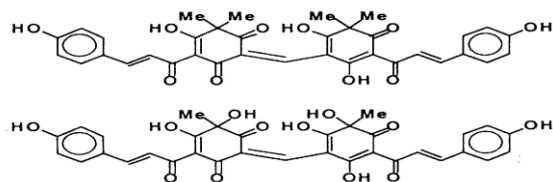
紅花色素の研究は 1800 年代に Preisser に始まり、1910 年に Perkin, 亀高らにより「カルタミン」として結晶化、分離された。

1930 年、黒田チカはキノイド型にカルタミン、その互変異性体にイソカルタミンと命名し、論文を提出した。



なお、黒田は戦後女性として国内で 2 人目の理学博士を取得した人物として知られている。

その後 1970 年代以降に、山形大学の小原平太郎・小野寺準一・佐藤慎吾らの研究により、その構造が有機合成化学的に検証され、現在では以下のような 2 次元構造をもつものが紅色色素「カルタミン」として同定されている。



【2】紅色色素抽出の方法論

紅花の紅色色素は、花卉中にわずかしがなく、この色素成分をいかに効率よく抽出することができるかが生地染色や紅の精製には問題となる。伝統的な方法では摘み取った花卉を「紅餅」の状態に発酵させ、ここから色素を抽出していた。今回の検証でも、この「紅餅」の状態のものを使用し、ここから紅色色素の抽出を試みた。

化学的なアプローチとして、山形大学・小野寺準一教授による論文、および山形大学・佐藤慎吾教授のアドバイスを心得て実験の工程を構築し、山形大学地域教育学部の協力の下、実際の抽出を行った。

伝統的な方法としては諸処の資料により記述されているが、基本的に①紅花の花卉を水洗いして黄色色素（サフロールイエロー：化学的には 3 種類あるとされる）を大まかに抜いて、残った花卉をまとめて紅餅を作る②紅餅を水で溶いたものに灰水（アルカリ）を加えて紅汁を絞る③紅汁に烏梅（酸）を加えて、生じた紅を「ゾク（青芋）」に染みこませる④ゾクに染みこませた紅を灰水に浸して再度取り出し、これに烏梅を加えて本紅とするという行程をたどることになる。

化学的な観点からいえば、紅色色素「カルタミン」は水に溶けにくい性質であるが、アルカリで置換処理することによって水溶性となり花卉から抽出することができるという原理が用いられている。黄色色素（サフロールイエロー）については水溶性のため、アルカリ処理においても赤色色素と同時に析出していると考えられるが、伝統的な

* 山形県立博物館 研究員

製法では繊維に赤色色素（カルタミン）を吸着させることによってこれを取り出している。化学的な抽出ではセファデックスカラムなどを用いることによって分画抽出を行っている（1999年・山形大学工学部・佐藤慎吾論文）。これらを念頭に、化学的に簡易な方法でなるべく純粋な紅を取り出す方法について実験を行った。

【3】紅色色素の化学的な抽出方法の実際

実際に行った方法は、以下の通りである。

- （1）紅餅を水（純水：イオン交換水）に浸し、これを濾過する。



- （2）濾紙上に残った花弁を「20%エタノール：1%NaOH 溶液」に浸し、これをガーゼ布で濾す。
- （3）濾した濾液を低濃度酢酸で中性し、これを再度濾過し、濾紙上に残った抽出物を1%NaOH 溶液に浸して液を得る。
- （4）（3）の液を再度低濃度酢酸で中和することにより、低濃度の紅液を得た。



- （5）（4）の液をエバポレーターにより低温濃縮することにより、濃縮された紅液を得た。

この方法での抽出により、ある程度簡素に紅を抽出することができるという結論に達した。しかし、セファデックスカラムなどを用いずに、単純

に濾紙上に吸着させるという方法をとったために、紅の精製度が低くなったことは否めない。最終生成物は非水溶性の沈殿も生じていたので、この部分が本紅に当たる部分であると推測された。

【4】成果と課題

学校現場での活用および簡易的な抽出という面では、（4）までの紅液でも十分に利用が可能であると思われた（実際には、紅液は中性状態では不安定であると考えられるので、保存性を考慮すれば、酸性の状態で保存することの方がよいと思われる）。実際に抽出した色素（4）の状態でも、ガーゼなどを染色することが可能であった。今後はこの方法でえられる紅を用い、染色や色素成分としての実験などに活用できるかどうかを検討したい。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、論文及びアドバイスをいただいた山形大学工学部・佐藤慎吾教授、実験器具の提供をいただいた山形大学地域教育学部・加藤良一教授および石井実教授に深く感謝申し上げます。

山形県立博物館動物資料データベースと S-Net/GBIF への登録

羽角 正人*・本間 正明**

Database of animal specimens and materials deposited in the Yamagata Prefectural Museum
and their registration to the S-Net/GBIF

Masato Hasumi & Masaaki Homma

1 初めに

山形県立博物館(以後、県博と略す)への 2018 年 4 月 1 日の初出勤日に、本稿の第 1 著者が 2018 年度の主な仕事として業務命令を下されたのが、2019 年 2 月末日までに動物部門の資料 15,000 点を国立科学博物館が主催する S-Net/GBIF に登録することであった(その後、登録を希望する地方博物館の増加で、2018 年度の登録資料数は 12,000 点に減らされていたが、国立科学博物館と「既に県博の予算に組み込まれている」という理由で交渉し、当初の 15,000 点に戻してもらった)。調べてみて分かったのは「県博の収蔵資料データベース(以後、DB と略す)に登録されている 40,000 点余りの動物資料の学名の多くで、命名者名の後に書くべき年号(命名年)が欠けている」という現状であった。それらの総てで、信頼できる複数の DB を基に、ひとつひとつの種の学名[属名・種小名(亜種小名)・命名者名・命名年]をチェックしたところ「収蔵資料 DB 登録以降、学名・和名が変更されている種や亜種に細分化されている種、綱・目・科レベルで変更されている種が少なくない。亜種から種へと変更されているものも少なくない。学名が存在するのに和名がなくなっている種がある」といった不具合が多かった。それら以外にも「学名の一部が全角入力されているので、正しい学名で検索をかけてもヒットしない種が多い。学名の取り違えや誤入力が少なくない。学名が同じで、和名が異なる種

が少なからず入力されている。学名と和名が種間で入れ替わったり、ズレて入力されたりしているケースが少なくない。同じ種なのに目名や科名が異なるケースが少なくない。目名と属名が同じなのに、科名が異なっている。種小名と亜種小名が連続して入力されているため、ひとつの種小名として取り扱われている」といった、明らかな誤入力と思われる箇所が数多く見られた。そのため、こういった細かな間違いに気付く能力や、何が正しいのかを見極める能力が試される状況がほとんどで、間違いを容易に比較できる調査手法の確立が急務であった。

収蔵資料 DB に登録されている動物資料 40,000 点余りは、エクセルで作成されている。作成に当たっては、入力専門の職員を数年にわたって半年間ずつ雇い、入力されたデータを当時の担当者がチェックするという方法論が採られている。これらのオリジナルデータの中から、2014 年度には昆虫綱チョウ目 17,313 点中の 14,923 点と爬虫綱 83 点の 77 点を合わせた 15,000 点が、S-Net/GBIF に登録されている(登録後は国立科学博物館から 1 点あたり 40 円の報酬が支払われ、消費税を含めた 648,000 円が山形県に支払われている。チョウ目で未登録の 2,000 点余りを調べたところ、和名や学名、採集地の入力がなかった)。本稿の著者 2 名は、この登録の後に着任しているので、エクセルで作成された動物資料のオリジナルデータを検討するのは今回が初めてであった。

*山形県立博物館 嘱託 **山形県立博物館 学芸員

オリジナルデータは、新旧の通し番号は入っているものの、門・綱・目・科・属・種の並びはバラバラで、あちこちに入力されていた。第1著者は、これらのデータから分類群ごとに門や綱を抜粋し、門・綱・目・科・属・種の順にシートを作成してから、ソートをおこなった(学名で1種ごとにグループ化した)。次に、それぞれの分類群で信頼できるDBを探し出し、門・綱・目・科・属・種の学名・和名が間違っていないか、あるいは最新のものかどうかをチェックした。その過程で、間違いと思われる数多くの箇所の中から看過できない間違いを第2著者に報告し、第2著者が動物所蔵庫の標本に当たって調べるという方法論を採った。採集地情報の多くは、第2著者がチェックした。訂正した記述は履歴を記録し、一目で分かるように色付けした。

著者らが学名・和名のチェックをおこなった順番は、両生綱、哺乳綱、鳥綱、棘皮動物門、甲殻亜門(節足動物門からの分離)、少数派(ホヤ綱、腕足動物門、苔虫動物門、ムカデ綱・ヤスデ綱、環形動物門、星口動物門、刺胞動物門、海綿動物門、その他)、昆虫綱(チョウ目を除く)、旧魚綱、軟体動物門である。動物資料1点の中には、たった1個体のオスやメス、または幼体や卵だけが含まれるケースもあれば、100個体以上のオスやメス、または幼体や卵が含まれるケースもある。鳥綱では、卵が入った巣そのものも資料として扱われている(1点とは、ある場所である時期に採集され、動物所蔵庫や他の保管庫の1ヶ所に保管されている資料の総数を示す)。学術用語の *original combination* は、本来「原結合」という意味だが、ここでは「原記載」という用語を使用した。

2 両生綱

県博が所有する両生類の資料数は244点と少なく、日本に生息する両生類の種数自体も多くない(2018年7月の時点で有尾目35種、無尾目48種)。第1著者が両生類の専門家ということもあって、特定のDB

を利用するというよりは、日本爬虫両棲類学会が発行する日本産爬虫両生類標準和名2017年12月9日改訂版、及び2018年7月19日改訂版を参考にした。

学名は、命名年が入っていないものが244点中5点と少なく、一見すると問題はなさそうに思われたが、種小名の誤入力(e.g., クロサンショウウオの *nigrescens* が *nigresens* に)、命名者名の間違い(e.g., モリアオガエルの Okada & Kawano が Okuda & Kawano に; カスミサンショウウオの Temminck & Schlegel が Schlegel に)、命名年の間違い (e.g., トウホクサンショウウオの 1883 が 1887 に; ニホンアマガエルの 1859 が 1858 に)が見られた。不完全な和名も少なかつた(e.g., アカハライモリがイモリに; アズマヒキガエルがヒキガエルに)。収蔵資料DB登録前後に、分類体系の見直しや新種記載で、学名が変遷している種が少なからず見られた。山形県内で、かつてハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn, 1782)とされていた種は、最上川流域と蔵王山を境に北側個体群がキタオウシュウサンショウウオ *Onychodactylus nipponoborealis* Kuro-o, Poyarkov & Vieites, 2012 に、南側個体群がバンダイハコネサンショウウオ *Onychodactylus intermedius* Yoshikawa & Matsui, 2014 に分けられた(Yoshikawa & Matsui, 2014)。著者らは、ハコネサンショウウオとされていた種の採集地情報を基に、県博所有の資料13点をキタオウシュウサンショウウオ7点、バンダイハコネサンショウウオ6点に分けた[羽角(2018)で、7点とされていた資料数は途中経過]。

収蔵資料DBの登録から大きく変わったところでは、スマガエル *Fejervarya limnocharis* (Grabenhorst, 1829)がある(Grabenhorst は誤入力)。この種の属名は *Rana limnocharis* (Gravenhorst, 1829)からの変更で、現在は *Fejervarya kawamurai* Djong, Matsui, Kuramoto, Nishioka & Sumida, 2011 が適用されていた。カジカガエル *Polypedales buergeri* (Temminck & Schlegel, 1838) は、かなり以前に属名が変更されていて、*Buergeria*

buergeri (Temminck & Schlegel, 1838)が使われている。
ヘリグロヒキガエル *Bufo melanoseictus* Schneider は、
属名と種小名が異なる *Duttaphrynus melanostictus*
(Schneider, 1799)が有効学名であった。

Rana 属は、軒並み属名が変更されていた。トノサ
マガエル *Rana nigromaculata* Hallowell, 1861 は、属名
変更と種小名の語尾変化で *Pelophylax nigromaculatus*
(Hallowell, 1861)になっていた。プランシーガエル
Rana plancyi Lataste には、*Pelophylax plancyi* (Lataste,
1880)が適用されていた。ツチガエル *Rana rugosa*
Temminck & Schlegel, 1838 も属名が変更されて、
Glandirana rugosa (Temminck & Schlegel, 1838)になっ
ていた。クールガエル *Rana kuhlii* Tschudi, 1838 も属
名の変更で *Limnonectes kuhlii* (Tschudi, 1838)になっ
ていた。トラフガエル *Rana tigrina rugulosa* Weigmann
は属名が変更され、亜種から種へと昇格した結果、
種小名が語尾変化した *Hoplobatrachus rugulosus*
(Wiegmann, 1834)が適用されていた。

3 哺乳綱

哺乳類の DB は調査時に適切なものがなく、
Wikipedia を参考にしたが、2018 年 6 月に世界哺乳類
標準和名目録(川田ら, 2018)が出版されたので、これ
を使用して一部の和名・学名を追認した。

哺乳類の資料数 408 点に目名や科名の変更はなか
ったが、不完全な和名が少なくなかった[e.g., イタチ
(ニホンイタチ); ノウサギ(ニホンノウサギ); オット
セイ(キタオットセイ); カモシカ(ニホンカモシカ)]。
キツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)は和名が変更さ
れ、種から亜種へと降格したホンドギツネ *Vulpes*
vulpes japonica J. E. Gray, 1868 が有効な和名・学名で
あった(キタキツネ *Vulpes vulpes schrencki* Kishida,
1924 と亜種の関係)。イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus,
1758 も和名が変更され、種から亜種へと降格したニ
ホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax* Temminck, 1842
が適用されていた(リュウキュウイノシシ *Sus scrofa*

riukiuanus Kuroda, 1924 と亜種の関係)。

学名は、入力されている種の多くで訂正すべき箇
所が見当たらなかったが、種小名の誤入力が見られ
た[e.g., ヤチネズミ *Eothenomys andersoni* (Thomas,
1905)が *andersori* に]。アズマモグラ *Mogera wogura*
(Temminck, 1842)は種小名が異なる *Mogera imaizumii*
(Kuroda, 1957)が有効学名であった。イヌ *Canis*
familiaris (Linnaeus, 1758)には、種から亜種へと格下
げされた *Canis lupus familiaris* (Linnaeus, 1758)が適用
されていた。アナグマ *Meles meles* (Linnaeus, 1758)と
入力されている種の学名はヨーロッパアナグマの学
名に適用されていて、ニホンアナグマ *Meles anakuma*
(Temminck, 1844)を最新の和名・学名と判断した。

4 鳥綱

鳥類の DB は、現時点で最も信頼できる World Bird
Database (Avibase)を使用した(Avibase では、和名も表
示されるという利点がある)。

県博が所有する鳥類の資料数は 3,261 点で、ヒタ
キ科 *Muscicapidae* と入力されている種の大部分をツ
グミ科 *Turdidae* に変更した。属名の誤入力が多く、
サメビタキ *Muscicapa sibirica sibirica* Gmelin, 1789 や
エゾビタキ *Muscicapa griseisticta* (Swinhoe, 1861)は
Muscicapa が正確な綴りであった。ミヤマホオジロ
Emberiz elegans elegans Temminck, 1836 の属名は
Emberiza が正しかったが、現在は *Schoeniclus* が適用
されている。ズアオアトリ *Fringillia coelebs coelebs*
Linnaeus, 1758 の属名は *Fringilla* が正しかった。

命名年が入力されている種が多かったが、間違い
も少なくなかった。ルリビタキ *Tarsiger cyanurus*
cyanurus (Pallas, 1773)の 6 点以外に、命名年が 1774,
1775, 1776 と入力されている亜種が 1 点ずつ存在し
た。ムギマギ *Ficedula mugimaki* (Temminck, 1835)の 7
点以外に、1836, 1837, 1838, 1839, 1840 が 1 点ずつ入
力されていた。コサメビタキ *Muscicapa dauurica*
dauurica Pallas, 1811 の 23 点以外に、1812, 1813, 1814,

1815 が 1 点ずつ入力されていた(Wikipedia では 1881 と誤記載)。コベニヒワ *Carduelis hornemanni exilipes* (Coues, 1862)は *Acanthis hornemanni exilipes* (Coues, 1861)が、クロジ *Emberiza variabilis* Temminck, 1835 は *Schoeniclus variabilis variabilis* Temminck, 1836 が、ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* (Temminck, 1835)は *Ardenna tenuirostris* (Temminck, 1836)が有効学名で、属名と命名年が異なっていた。ダイシャクシギ *Numenius arquata orientalis* Brehm, 831 は、明確な命名年の誤入力であった(1831)。

命名者名の誤入力が少なくなかった。クロガモ *Melanitta americana* (Swainson, 1832)は Swainson が、エゾライチョウ *Tetrastes bonasia vicinitas* Riley, 1915 は Riley が、イイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* (Stejneger, 1892)は Stejneger が、オーストンヤマガラ *Poecile varius owstoni* (Iijima, 1893)は Iijima が正確な命名者名であった。和名の間違いも見られ、コノハクズ *Otus scops japonicus* Temminck & Schlegel, 1844 は *Otus sunia japonicus* Temminck & Schlegel, 1844 が有効学名で、和名はコノハズクとすべきであった。オオコノハクズ *Otus lempiji semitorques* Temminck & Schlegel, 1844 もオオコノハズクが正しく、リュウキュウコノハクズ *Otus elegans elegans* (Cassin, 1852)もリュウキュウコノハズクとすべきであった。

メジロチメドリ *Alcippe abyssinica* (Rüppel, 1840)には、種小名が異なる *Alcippe morrisonia* Swinhoe, 1863 が適用されていた。ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* Swinhoe, 1871 にも、種小名が異なる *Anser serrirostris serrirostris* Gould, 1852 が適用されていた。ツグミ *Turdus naumanni eunomus* Temminck, 1831 には、亜種から種へと昇格した *Turdus eunomus* Temminck, 1831 が適用されていた。カイツブリ *Tachybaptus ruficollis poggei* (Reichenow, 1902) は *Tachybaptus ruficollis japonicus* Hartert, 1920 が有効学名であった。ムネアカヒワ *Carduelis cannabina* (Linnaeus, 1758)は *Linaria cannabina* (Linnaeus, 1758)へ、マヒワ *Carduelis spinus*

(Linnaeus, 1758)は *Spinus spinus* (Linnaeus, 1758)へ移行していた。キジ *Phasianus colchicus robustipes* Kuroda, 1919や *Phasianus colchicus tohkaidi* Momiyama, 1922 と入力されている亜種は種へと昇格し、種小名が異なる *Phasianus versicolor* Vieillot, 1825 が有効学名であった。ダチョウ *Struthio camelus* Linnaeus, 1758 には、種から亜種へと格下げされた *Struthio camelus australis* Gurney, 1868 が適用されていた。イヌワシ *Aquila chrysaetos* (Linnaeus, 1758)も、*Aquila chrysaetos daphanea* Severtzov, 1888 と亜種になっていた。ヒメメジロ *Oculocincta squamifrons* (Sharpe, 1892)は属名と種小名が異なり、種から亜種へと格下げされた *Zosterops japonicus simplex* Swinhoe, 1861 が有効学名であった。ノジコ *Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel, 1848 には、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Schoeniclus sulphuratus* Temminck & Schlegel, 1848 が適用されていた。ダルマエナガ *Paradoxornis webbiana* (Gould, 1852)には、*Sinosuthora webbiana bulomacha* (Swinhoe, 1866)が適用されていた。

アカハラ *Turdus chrysolaus chrysolaus* Temminck, 1831 の 40 点中、採集地が北海道南千島エトロフ島、及びロシア中部千島と入力されている 3 点をオオアカハラ *Turdus chrysolaus orii* Yamashina, 1929 に変更した。カササギ *Pica pica serica* Gould, 1845 の 5 点中、韓国で採集された 1 点と北朝鮮で採集された 3 点は同じ学名だが、イギリスで採集された 1 点を *Pica pica pica* (Linnaeus, 1758)に変更した。学名の正誤とは無関係だが、有名な話なので専門外の方にも分かるように記述すると、コマドリの学名は *Luscinia akahige akahige* (Temminck, 1835)で、アカヒゲの学名は *Luscinia komadori komadori* (Temminck, 1835)である。

5 棘皮動物門

棘皮動物門(資料数 110 点)の DB は、国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)が運営する、和名検索が可能な Biological Information System for Marine

Life (BISMaL)を使用した。ヒットしないケースや学名が有効かどうか不確かなケースは、World Register of Marine Species (WoRMS)で学名検索をおこない、World Echinoidea Database でも検索をおこなった。

クモヒトデ綱 Ophiuroidea をヒトデ綱 Asteroidea とした誤入力があった。目名変更は多く、顕帯目 Phanerozonia から一部がモミジガイ目 Paxillosida やアカヒトデ目 Valvatida へ変更されていた。叉棘目 Forcipulata からマヒトデ目 Forcipulatida へ、唇蛇尾目 Chiloophiurida からクモヒトデ目 Ophiurida へ、革蛇尾目 Phrynophiurida からツルクモヒトデ目 Euryalida へ変更されていた。フトザオウニ目 Cidaroida は、和名がオウサマウニ目になっていた。科名は、和名だけ変更されているものが多かった(e.g., ハスノハカシパン科 Scutellidae はヨウミヤクカシパン科へ; マナマコ科 Stichopodidae はシカクナマコ科へ)。ラッパウニ科 Taxopneustidae はオオバフンウニ科 Strongylocentrotidae へ、ツガルウニ科 Glyptocidaridae はホンウニモドキ科 Phymosomatidae へ移行していた。

110 点中、どの種にも命名年の入力がなかった。モミジガイ *Astropecten scoparius* (Valeciennes)には、命名者名が異なる *Astropecten scoparius* Müller & Troschel, 1842 が適用されていた。和名変更されている種も多く、ホソザオウニ *Stereociliaris japonica* (Döderlein)にはボウズウニ *Stereociliaris japonica* (Döderlein, 1885)が適用されていた(*Stereociliaris* の *ol* は *d* の誤入力)。ホシヒトデ *Stellaster equestris* (Retzius)には、和名・属名・種小名が異なる、ヤマトホシヒトデ *Hippasteria imperialis* Goto, 1914 が適用されていた。マナマコ *Stichopus japonicus* (Selenka)は和名と属名が異なり、アカナマコ *Apostichopus japonicus* (Selenka, 1867)になっていた。

属名だけの変更も見られた[e.g., ヌノメイトマキヒトデ *Asterina batheri* Goto は *Aquilonastra batheri* (Goto, 1914)へ; メナシクモヒトデ *Pectinura anchista* Clark は *Ophiopsammus anchista* (H. L. Clark, 1911)へ;

オキナマコ *Parastichopus nigripunctatus* (Augustin)は *Apostichopus nigripunctatus* (Augustin, 1908)へ]。ニッポンヒトデ *Distolasterias nippon* (Döderlein)は種小名の誤入力で、*Distolasterias nipon* (Döderlein, 1902)が適用されていた(*nippon* ではなく *nipon* が正しい)。トゲクモヒトデ *Ophiothrix koreana* Duncan は *Ophiothrix panchyendyta* H. L. Clark, 1911 へ、ナガトゲクモヒトデ *Ophiothrix marenzelleri* Koehler は *Ophiothrix exigua* Lyman, 1874 へ、種小名が変更されていた。シロナマコ *Paracaudina chilensis ransonneti* (Von Marenzeller)は亜種から種に吸収され[*Paracaudina chilensis* (Müller, 1850)]、ジュズクモヒトデ *Ophiopholis aculeata* var. *japonica* (Lyman)は変種から種に格上げされていた(*Ophiopholis japonica* Lyman, 1879)。

6 甲殻亜門

節足動物門から分離した甲殻亜門(資料数 248 点)の DB も BISMaL を使用した。BISMaL 検索でヒットしないケースや、学名が有効かどうか不確かな場合は WoRMS で学名を検索し直し、陸水の種は主に Wikipedia を参考にした。

目名変更は少なかったが、完胸目 Thoracica は和名が無柄目へ変更され、一部が Scalpelliformes 目や Lepadiformes 目へ移行していた。科名変更が多かった(e.g., ウチワエビ科 Scyllaridae は和名がセミエビ科へ; ヒゲガニ科 Cancridae は和名がイチョウガニ科へ; カクレガニ科 Pinnotheridae は Macrophthalmidae 科へ; クリガニ科 Atelecyclidae は Cheiragonidae 科へ; エビジャコ科 Crangonidae は一部がクルマエビ科 Penaeidae へ)。

248 点中 245 点で命名年の入力がなかった。イバラエビ *Lebbeus gloenlandica* (Fabricius)は種小名の誤入力で、イバラモエビ *Lebbeus groenlandicus* (Fabricius, 1775)になっていた。ホソツノモエビ *Heptacarpus propugnatrix* (De Man)は属名の先頭文字が全角入力され、和名と種小名が異なるツノモエビ *Heptacarpus*

pandaloides (Stimpson, 1860)になっていた。ゴトウホンヤドカリ *Pagurus cavimanus* (Miers)は和名と属名が異なり、ゴトウヤドカリ *Elassochirus cavimanus* (Miers, 1879)が有効な和名・学名であった。コウダカキタフジツボ *Octomeris sulcata* Nilsson-Cantell は和名の誤入力で、コウダカキフジツボ *Pseudoctomeris sulcata* (Nilsson-Cantell, 1932)が適用されていた。属名だけ異なる種が多かった[e.g., ヘイケガニ *Dorippe japonica* Von Siebold は *Heikeopsis japonica* (von Siebold, 1824)へ; ヒシガニ *Lambrus validus* (De Haan) は *Enoplolambrus validus* (De Haan, 1837)へ; スナモグリ *Callianassa petalura* (Stimpson) は *Nihonotrypaea petalura* (Stimpson, 1860) へ]。タカアシガニ *Macrocheira kaempferi* De Haan には、*Macrocheira kaempferi* (Temminck, 1836)が適用されていた。

クルマエビ *Penaeus japonicus* (Bate)は属名の変更と命名者名の明確化がおこなわれ、*Marsupenaeus japonicus* (Spence Bate, 1888)になっていた。クロエビ *Sclerocrangon communis* Rathbun は、属名と種小名が異なる *Metapenaeopsis coniger* (Wood-Mason in Wood-Mason & Alcock, 1891)が有効学名であった。シワガザミ *Macropipus corrugatus* (Pennant)は、属名と種小名が異なる *Liocarcinus strigilis* (Stimpson, 1858)が有効学名であった。ケブカエンコウガニ *Carcinoplax vestitus* (De Haan)は属名が異なり、種小名が語尾変化した *Entricoplax vestita* (De Haan, 1833)が有効学名であった。ケブカアワツブガニ *Actaea rüppellii orientalis* (Odhner)は、本来ならラテン語であるはずの種小名 *rüppellii*に違和感を覚えた。WoRMSで*Actaea rüppellii*を検索すると、*Actaea rueppellii* (Krauss, 1843)がシノニム(同物異名)として出て来た。BISMaLでは*Actaea ruepelli orientalis* Odhner, 1925 がシノニムで、属名が異なり、亜種から種へと昇格した *Gaillardiellus orientalis* (Odhner, 1925)が適用されていた。ミツカドヒシガニ *Tutankahamen pteramerus* (Ortmann)には、属名種小名が異なる *Garthambrus pteromerus* (Ortmann,

1893)が適用されていた。アカフジツボ *Balanus tintinnabulum rosa* Pilsbry には、属名が異なり、亜種から種へと昇格した *Megabalanus rosa* (Pilsbry, 1916)が適用されていた。

種小名が変更されている種も見られた[e.g., キメンガニ *Dorippe dorsipes* (Linnaeus)は *Dorippe sinica* Chen, 1980 へ; ツノナガコブシ *Leucosia longifrons* (De Haan)は *Leucosia anatum* (Herbst, 1783)へ; ゴカクイボオウギガニ *Halimede ochtodes* (Herbst)は *Halimede fragifer* (De Haan, 1835)へ]。クロフジツボ *Tetracrita squamosa japonica* Pilsbry には、亜種から種へと昇格した *Tetracrita japonica* Pilsbry, 1916が適用されていた。種小名の語尾変化間違いや[e.g., モクズガニ *Eriocheir japonicus* (De Haan)は *Eriocheir japonica* (De Haan, 1835)へ]、誤入力も見られた[e.g., ジャノメガザミ *Portunus sansuinolentus* (Herbst) は *Portunus sanguinolentus* (Herbst, 1783)へ]。

7 少数派(ホヤ綱、腕足動物門、苔虫動物門、ムカデ綱・ヤスデ綱、環形動物門、星口動物門、刺胞動物門、海綿動物門、その他)

日本近海に生息する種の多くは BISMaL で検索し、足りない情報を WoRMS で補った。陸に生息する種は、主に Wikipedia を参考にした。

少数派 141 点(ホヤ綱 7 点、腕足動物門 23 点、苔虫動物門 1 点、ムカデ綱・ヤスデ綱 1 点、環形動物門 2 点、星口動物門 1 点、刺胞動物門 20 点、海綿動物門 1 点、その他 85 点)では、綱・目・科の大分類レベルで変更されている種が大多数であった(e.g., 無関節綱 *Inarticulata* が舌殻綱 *Lingulata* に; 有関節綱 *Articulata* が嘴殻綱 *Rhynchonellata* に; 普通海綿綱 *Demospongiae* の和名が尋常海綿綱に; マンジュウボヤ目 *Aplousobranchia* がマメボヤ目 *Enterogona* に; 遊在目 *Errantia* がイソメ目 *Eunicida* に; リングラ科 *Lingulidae* の和名がシャミセンガイ科に; ウルマリス科 *Ulmaridae* の和名がミズクラゲ科に; ハネガヤ

科 Plumulariidae がアカガヤ科 Aglaopheniidae に; リンコネラ科 Rhynchonellidae がテレブラツラ科 Terebratulidae に)。オオマリコケムシ *Pectinatella magnifica* (Leidy, 1851) は、BISMaL や WoRMS では綱・目・科の変更はないが、門名が外肛動物門 Ectoprocta から苔虫動物門 Bryozoa に移行していた。

ほとんどの種で命名年の入力があった。和名が同じなのに学名が異なる種や、学名が同じなのに和名が異なる種が随所で見られた。カメホウズキチョウチン *Laqueus rubellus* (Sowerby) は和名の誤入力で、ホウズキチョウチン *Laqueus rubellus* (Sowerby, 1846) が有効な和名・学名であった。イガボヤ *Halocynthia higendorfi* f. *igaboja* Oka と入力されている品種 forma (または型 form) は、種へと昇格し、種小名が異なる *Halocynthia hispida* (Herdman, 1881) が有効学名であった。オオシャミセンガイ *Lingula shantungensis* K. Hatai には、種小名が異なる *Lingula adamsi* Dall, 1873 が適用されていた。ミドリシャミセンガイ *Lingula unguis* (Linnaeus) にも、種小名が異なる *Lingula anatina* Lamarck, 1801 が適用されていた。イバライソメ *Onuphis willenmoesi* (McIntosh) は、*Paradiopatra willemoesii* (McIntosh, 1885) が有効学名であった (*willenmoesi* と McIntosh は誤入力)。ウミエラ *Leiopterus fimbriatus* (Herklots) は和名と属名が異なり、種小名が語尾変化したフトウミエラ *Pennatula fimbriata* Herklots, 1858 が有効学名であった。シロガヤ *Plumularia setacea* (Ellis) には、属名と種小名が異なる *Aglaophenia whiteleggei* Bale, 1888 が適用されていた。ミズクラゲ *Aurelia aurita* Lamarck は命名者名が異なっていた [*Aurelia aurita* (Linnaeus, 1758)]。

8 昆虫綱

昆虫類の DB は、九州大学大学院農学研究院昆虫学教室の昆虫学データベース (KONCHU) を使用した。この DB を使用した感想としては「9 割 5 分以上の正確性がある (クサカゲロウ科に関しては使用しない

ほうが良い)」という印象であった。

チョウ目を除く、昆虫類の資料数 8,447 点の中のほとんどの種で命名年が欠けていた。コガタスズメバチ *Vespa analis* Fabricius は、コガタスズメバチ本土亜種 *Vespa analis insularis* Dalla Torre, 1894 に変更された。学名の一部に全角が使われている種が少なかった。和名が変更されている種や科も幾つか見られた (e.g., ムナクボカミキリからムネツヤサビカミキリへ; ジガバチ科からアナバチ科へ)。和名の誤入力も少なかった (e.g., ゴマダラオトシブミがゴマダラオトシブミに; ジガバチがジカバチに)。命名者名の誤入力も見られた (e.g., Westwood が Westeood に; MacLachlan が McLachlan に)。大きな科名変更として、コオロギ科に分類されていたものがクサヒバリ科・スズムシ科・マツムシ科へ、ヨコバイ科に分類されていたものがヨコバイ科・オオヨコバイ科・ミミズク科へ移行している。

学名が同じなのに、和名が異なる種が随所で見られた。セマダラコガネの学名 *Blitopertha orientalis* でヒメアシナガコガネとアカビロウドコガネの和名が入っているケースでは、いずれも和名が正しいことを確認した。ウンモンヒロバカゲロウの学名 *Osmylus tessellatus* でスカシシリアゲモドキの和名が入っているケースでは、ウンモンヒロバカゲロウの和名が正しいことを確認した。ミドリカミキリの学名 *Chloridolum viride* でスギカミキリの和名が入っているケースでは、ミドリカミキリの和名が正しいことを確認した。キイロモモトハバチの旧学名 *Cimbex connatus taikushi* でツマグロアカハバチの和名が入っているケースでは、キイロモモトハバチ *Cimbex taikushi* Marlatt, 1898 が正しいことを確認した。ヒガシカワトンボの学名 *Mnais pruinosa costalis* でニシカワトンボの和名が入っているケースでは、採集地情報からヒガシカワトンボの和名が正しいことを確認した (最新の学名には、ヒガシカワトンボとオオカワトンボを含めて、ニホンカワトンボ *Mnais costalis*

Selys, 1869 という別種が適用されている)。

9 旧魚綱

旧魚綱(資料数 1,292 点)の DB も基本的に BISMAL を使用し、淡水産の種やシノニムの変遷(現在、使われていない学名)などの足りない部分を Catalog of Fishes で補った(California Academy of Sciences, USA が運営する DB。古今東西の文献を網羅していて、他のどの DB よりも信頼性が高いと判断された)。また、第 2 著者が魚類の専門家ということもあって、種小名が sp. 1 や sp. 2 など記載されている種の最新の学名は常に押さえてある。

旧魚綱 Pisces は廃止され、条鰭綱 Actinopterygii／軟骨魚綱 Chondrichthyes／頭甲綱 Cephalaspidomorphi に分けられている。ほとんどの種で命名年が入力されていなかった。命名者名の誤入力が多く(e.g., Schlegel が Sclegel に; Valenciennes が Valennciennes に; McClelland が McClelland に)、目名や科名の誤入力も多かった(e.g., アシロ目 Ophidiiformes が Ophidiformes に; ニギス科 Argentinidae が Argentinoidei に; ドチザメ科 Triakidae が Triakidedae に)。トクビレ科 Agonidae の学名 Agonidae はテンジクダイ科に、マナガツオ科 Stromateidae の学名はイボダイ科に適用されるべきものであった(これは誤入力で Stromateoide が正しい)。アカエイ *Dasyatis akajeri* (Müller & Henle) は、属名と種小名の語尾が異なる *Hemitrygon akajei* (Müller & Henle, 1841) が有効学名であった。科名変更が多く、アユ科 Plecoglossidae がキュウリウオ科 Osmeridae へ、フサカサゴ科 Scorpaenidae がメバル科 Sebastidae へ、ドジョウ科 Cobitidae がタニノボリ科 Bolitoridae へ移行している。サケ目 Salmoniformes はニギス目 Argentiniformes やキュウリウオ目 Osmeriformes へ、エイ目と入力されているガンギエイ目 Rajiformes はトビエイ目 Myliobatiformes へ移行している。

属名や種小名が異なる種が多く、ゴテンアナゴとハナアナゴのように和名が交替してしまっている種

もある。ゴテンアナゴ *Anago anago* (Temminck & Schlegel) には命名年の 1846 を入れ、次に属名変更をおこなって *Ariosoma anago* (Temminck & Schlegel, 1846) とした。もし *anago* という種小名が生きていれば、この学名はハナアナゴに適用されるべきものである。しかし、ハナアナゴの分布域は神奈川県以南とされていて、問題の種の採集地が山形県鶴岡市加茂沖となっていることから、この種は和名優先と考え、ゴテンアナゴの和名を適用した。それから、ゴテンアナゴの学名を最新の *Ariosoma meeki* (Jordan & Snyder, 1900) に変更した。ゴンズイ *Plotosus lineatus* (Thunberg) には、BISMAL では命名年の 1787 が入ったミナミゴンズイの学名が適用され、ゴンズイの学名には *Plotosus japonicus* Yoshino & Kishimoto, 2008 が適用されていた。

カワヤツメ *Lethenteron japonicum* (Martens) は、命名年の 1868 を入れた学名が BISMAL では有効とされている。Catalog of Fishes では、この学名はシノニムになっていて、*Lethenteron camtschaticum* (Tilesius, 1811) が適用されていた。このような学名の混乱は、これらの学名が与えられているタイプ標本に、正基準標本(holotype)が見つからないのが理由である。カワヤツメとされている種は、未だ分類学的地位の決着が付かず、再検討を必要とする性質のものであった。ギンブナには、*Carassius auratus langsdorfi* Temminck & Schlegel の学名を持つ亜種 32 点と *Carassius auratus* subsp. 1 の学名を持つ亜種 1 点が入力されていた。前者は命名年を欠き、亜種小名 *langsdorfi* の誤入力をしていて、Catalog of Fishes では、亜種から種へと昇格した *Carassius langsdorfii* Temminck & Schlegel, 1846 が適用されている。

Oncorhynchus masou masou (Brevoort) には、サクラマスとヤマメの 2 つの和名が入力されていた。この学名には 1856 の命名年を入れ、採集地情報を考慮した上で、それぞれサクラマス降海型、ヤマメ河川残留型(陸封型)に変更した。 *Salvelinus leucomaenis*

leucomaenis (Pallas)には、アメマスとエゾイワナの2つの和名が入力されていた。この学名から亜種小名を取り、1814の命名年を入れて、アメマス降海型、エゾイワナ河川残留型(陸封型)に変更した。山形県鶴岡市加茂沖で採集した種にエゾイワナの和名が入力されていたケースに関しては、明らかな降海型のため和名間違いと判断し、アメマス降海型に変更した。

イトヨ *Gasterosteus aculeatus* Linnaeus、またはイトヨ(降海型) *Gasterosteus aculeatus* Linnaeus の和名・学名は、現在は使用されていない(命名年は1758)。この種は、日本海に流入する河川に生息するイトヨとして新種記載され、ニホンイトヨ *Gasterosteus nipponicus* Higuchi, Sakai & Goto, 2014 の和名・学名が与えられている。イバラトミヨ(トミヨ・淡水型) *Pungitius pungitius* (Linnaeus)には旧トミヨの学名が適用され、トミヨ属淡水型 *Pungitius sinensis* (Guichenot, 1869)に変更されている。日本海側は新潟県以北に、太平洋側は青森県以北に生息する。イバラトミヨ(特殊型) *Pungitius pungitius* (Linnaeus)には、絶滅種であるミナミトミヨの学名が適用され、トミヨ属雄物型 *Pungitius kaibarae* (Tanaka, 1915)に変更されている(山形県では最上川水系に生息する)。イバラトミヨ(トミヨ・淡水型)やイバラトミヨ(特殊型)として入力されていた種の学名 *Pungitius pungitius* (Linnaeus, 1758)は、トミヨ属汽水型に適用されている(北海道東部太平洋側に生息する)。以上3種にエゾトミヨ *Pungitius tymensis* (Nikolskii, 1889)とムサントミヨ *Pungitius* sp.を含めた5種が、現在のトミヨ属に分類されている。ハリヨ *Gasterosteus microcephalus* (Girard)は、*Gasterosteus microcephalus* Girard, 1854 がシノニムで、イトヨの亜種 *Gasterosteus aculeatus* subsp. 2 が適用されている。

ヒメ *Aulopus japonicus* Günther に関しては、採集地情報(山形県鶴岡市加茂沖・鼠ヶ関、酒田沖)、及び *Aulopus* 属の分布域(大西洋)から、太平洋に生息する *Hime* 属への属名変更を適用した [*Hime japonica*

(Günther, 1877): この変更に伴い、種小名の語尾も変化している]。マエソ *Saurida* sp. 2 は、BISMaL によると、*Saurida macrolepis* Tanaka, 1917 が有効学名であった。シノニムの変遷を Catalog of Fishes で調べたところ、種小名 *macrolepis* は、sp.より前の *undosquamis* からの変更であった(sp. 2 は間違い)。シロヒレタビラ *Acheilognathus tabira* sp.は、分布域が東海・近畿・山陽・四国であることと採集地が福島県耶麻郡北塩原村裏磐梯五色沼柳沼であることから、アカヒレタビラ *Acheilognathus tabira erythropterus* Arai, Fujikawa & Nagata, 2007 と判断した。一方で、アカヒレタビラ *Acheilognathus tabira* (Jordan & Thompson)は、亜種キタノアカヒレタビラ *Acheilognathus tabira tohokuensis* Arai, Fujikawa & Nagata, 2007 として記載されている。カズナギの学名(*Zoarchias veneficus* Jordan & Snyder)でコモンイトギンボの和名が入力されているケースでは、和名のほうが正しいことを確認した。これは明らかな学名の誤入力で、県博が出している動物目録には、命名年の1902を除いた和名・学名が正確に記載されていた。

10 軟体動物門

軟体動物門(資料数9,761点)の多くはBISMaLで検索し、和名が出て来ないケースでは、学名でも検索をおこなった。日本近海産の種以外の海産貝類や、シノニムなどの足りない情報は、WoRMSで補った。両方で学名に相違点があるケースでは、より信頼性の高いWoRMSに従った(WoRMSの場合、Editor Reviewで学名の最終チェックをしている点と、学名の原記載を明示している点大きい)。陸・淡水産貝類では、主にWorldwide Mollusc Species Data Base (WMSDB)を参考にしたが、基本的に海産種を取り扱うWoRMSで検索可能な種もあった[e.g., *Planorbis planorbis* (Linnaeus, 1758)]。淡水産二枚貝には、専門的DBのMUSSELp (MUSSEL Project Database)を使用した。和名に異論があるケースや移入種の可能性が

あるケースでは、陸・淡水産腹足類日本固有種目録(亀田, 2018)を参考にした。入力されている命名年が BISMAL で検索された学名の命名年と異なるケースでは、原記載が明示される WoRMS で再確認をおこなった。収蔵資料 DB に入力されている種や亜種の学名に誤入力があるケースでは、WMSDB で検索可能なことが多かった[曖昧(fuzzy)検索のアルゴリズムが他の DB より優れている]。貝類の場合、収集が世界中の多岐にわたっているため、他の門・綱とは異なって 1 種 1 点のケースが多く、また和名のない種も多く、ひとつひとつの種の学名を確定するのに困難を極めた(グループ化するだけで 1 ヶ月以上を要した)。軟体動物門に関しては、他の分類群とは異なり、当時の担当者による学名への再チェックが入っている。BISMAL は 2018 年 12 月 27 日を境に新バージョンへと移行したので、それ以前に著者らがアクセスしたものとは異なる可能性がある。

大きく変更されたところでは、古腹足目の目名変更がある。古腹足目 Vetigastropoda と入力されている 742 点の目名を WoRMS に従って Trochida へ変更した(Vetigastropoda は、WoRMS では亜綱で使用され、BISMAL では上目で使用されている)。一部の目名は Trochida ではなく Seguenziida に変更した。イトカケガイ科 Epitoniidae が属する翼舌目 Ptenoglossa は、WoRMS では下目 Infraorder になっていて、目名は Caenogastropoda が採用されていた(BISMAL では吸腔目 Sorbeoconcha)。タニシ科 Vivipariidae の目名を中腹足目 Mesogastropoda から原始紐舌目 Architaenioglossa へ変更した。科名変更されている種も少なくなかった[e.g., ミミガイ科 Haliotidae がクチキレエビスガイ科 Scissurellidae に; カノコキセワタガイ科 Aglajidae が Philinorbidae 科に(Philinorbidae Oskars, Bouchet & Malaquias, 2015); ミドリガイ科 Smaragdinellidae がブドウガイ科 Haminoeidae ・ヘコミツララガイ科 Retusidae ・Rhizoridae 科に; クダマキガイ科 Turridae が 12 の科に(クダマキガイ/クダボラ科 Turridae ・コ

シボソクチキレツブ科 Clathurellidae ・マンジ科 Mangeliidae ・フデシヤジク科 Raphitomidae ・Borsoniidae 科・Clavatulidae 科・Cochlespiridae 科・Drilliidae 科・Fusiturridae 科(Fusiturridae Abdelkrim, Aznar-Cormano, Fedosov, Kantor, Lozouet, Phuong, Zaharias & Puillandre, 2018) ・Horaiclavidae 科・Mitromorphidae 科・Pseudomelatomidae 科)]。

アオイガイ *Argonauta argo* Linnaeus, 1758 には、アオイガイ科 Argonautidae の 1 点とカイダコ科 Argonautidae の 3 点の 2 つの科名が入力されていた。BISMAL ではアオイガイ科は消えて、カイダコ科が有効科名であった。Octopoda はタコ目になっていて、八腕形目は八腕形上目 Octopodiformes になっていた。Aporrhais という属名を持つ種には、中腹足目 Mesogastropoda モミジボラ科 Aporrhaidae の 2 点と、新腹足目 Neogastropoda クダマキガイ科 Turridae の 2 点の 2 つの目名と科名が入力されていた。WoRMS では、Littorinimorpha と Aporrhaidae が正しい目名と科名とされていた。BISMAL では Littorinimorpha を下目としていて、吸腔目 Sorbeoconcha を目名としていたが、モミジボラ科 Aporrhaidae は存在しなかった。佐々木(2002)によると、Aporrhaidae に相当する和名は、モミジボラ科でもクダマキガイ科でもなく、モミジソデガイ科である。モミジボラの仲間がモミジボラ科には属さず、クダマキガイ科に属することから、モミジソデガイ科への科名変更がおこなわれたと推測される。

アシヤガイ *Granata lyrata* (Pilsbry, 1890) は、WoRMS ではニシキウズガイ科 Trochidae から Chilodontidae に変更されていた。この科は BISMAL では Chilodontidae 科と記載されていて、a という文字の有無が気になったので調べたところ、WoRMS に「Chilodontidae Wenz, 1938 (invalid: homonym of the fish family Chilodontidae Eigenmann, 1912; emended to Chilodontidae by ICZN)」という記述を見つけた。Chilodontidae は既に魚類の科名として使われている

ので無効(同物異名)という判断であった。*Tibatrochus incertus* (Schepman, 1907)は、BISMaL でも WoRMS でも命名年が 1908 になっていて、WoRMS ではニシキウズガイ科 Trochidae から Eucyclidae に変更されていた。この科は BISMaL では Chilodontidae 科と記載されている(Chilodontidae が正しい)が、WoRMS では Eucyclidae Koken, 1896 という科名のシノニムに Chilodontidae は記載されていない。*Semisulcospira* 属を含むカワニナ科 Pleuroceridae は、WMSDB では Semisulcospiridae へ移行している(Pleuroceridae という科は別に存在する)。

Bullinidae という科 5 点には、ベニシボリガイ科 3 点とインドヒラマキガイ科 2 点の 2 つの和名が入力されていて、この 2 つは目名も異なって入力されていた(頭楯目 Cephalaspidea と基眼目 Basommatophora)。BISMaL では、ベニシボリガイ科は Bullinidae Gray, 1850 と記載されていたが、インドヒラマキガイ科には和名がなかった(ヒラマキガイは淡水産貝類で、WMSDB では Hygrophila 目/Planorbidae 科)。ベニシボリガイ科の目名は「(unranked): 低位異鰓目 Lower Heterobranchia」で、目名として取り扱って良いのかどうか、判断が難しかった(上科名は、オオシノミガイ上科 Acteonoidea d'Orbigny, 1843)。WoRMS で Bullinidae を検索するとシノニムになっていて、有効科名は Aplustridae Gray, 1847、有効目名はなかった(上科名は BISMaL と同じ)。WMSDB では Bullinidae も Aplustridae も存在したが、どちらの科にも有効目名はなく、上科名は BISMaL と同じであった。どの DB でも上科名が同じであることから、現在の有効目名を低位異鰓目 Lower Heterobranchia、有効科名を Aplustridae 科と結論付けた。

Leucozonia 属の 2 種にはアッキガイ科 Muricidae (シマツノグチ *Leucozonia peseudodon* と入力されていて、採集地はパナマ共和国パシフィックコースト)とイトマキボラ科 Fascioliariidae [マルニシ *Leucozonia smaragdula* (Linnaeus, 1758)と入力]の別々の科名が使

用されていた。どちらの和名も学名も BISMaL になかったが、種の記載がない *Leucozonia* Gray, 1847 という属名があり、イトマキボラ科 Fascioliariidae になっていた。WoRMS では *Leucozonia smaragdula* [sic] と出て来て(sic はラテン語で「原文のまま」を意味し、綴りの間違いをそのまま引用した場合などに用いられる)、属名と種小名の語尾が異なる *Latirolagena smaragdulus* (Linnaeus, 1758)が現在の有効学名であった。目名は、BISMaL では吸腔目 Sorbeoconcha だが、WoRMS では Neogastropoda になっていて、後者を採用した(収蔵資料 DB では新腹足目 Neogastropoda)。WoRMS や WMSDB では *Leucozonia* 属に *peseudodon* という種小名に似た種はなく、Google で *Leucozonia peseudodon* を引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。*peseudodon* の綴りに違和感を覚え(偽物を意味する *pseudo* か?)、*Leucozonia pseudodon* で再検索すると、*Opeatostoma pseudodon* (E. J. Burrow, 1815)という別属の種が WMSDB に見つかった(この学名は WoRMS でも有効)。収蔵資料 DB は、属名の間違いと種小名の誤入力で、どの検索にも引っ掛かって来なかったことになる。この種のシノニムに *Leucozonia* 属は含まれていなかったが、分布域は中米で、パナマ共和国が最大の産地であった。シマツノグチ *Opeatostoma pseudodon* (Burrow, 1815)を有効な和名・学名と判断し、アッキガイ科 Muricidae をイトマキボラ科 Fascioliariidae に変更した。

Mitropifex 属 4 種 5 点中の 1 種 1 点(ベニオトメフデガイ *Mitropifex subguabrafus*)と、*Vexillum* 属 13 種 25 点中の 1 種 2 点(カノコミノムシガイ *Vexillum sanguisugum*)にはフデガイ科 Mitridae と入力されていて、カノコシボリミノムシ *Vexillum sanguisuga* (Linnaeus, 1758)という種 1 点は、ツクシガイ科 Costellariidae になっていた。BISMaL に *Mitropifex* 属はなかったが、フデガイ科 Mitridae Swainson, 1829 は存在し、*Vexillum* 属はツクシガイ/ミノムシガイ科 Costellariidae MacDonald, 1860 になっていた(どちら

の科名も WoRMS では有効)。 *Mitropifex* Iredale, 1929 は WoRMS でシノニムとされ、有効属名は *Vexillum* Röding, 1798 であった(Mitridae 科のシノニムに *Mitropifex* 属はない)。以上の結果から、*Mitropifex* 属を *Vexillum* 属に変更し、この属の有効科名をツクシガイ/ミノムシガイ科 Costellariidae と結論付けた。

シロガネシタダミ *Machaeroplax nyssonus* (Dall, 1919)は、BISMaL では *Solariella nyssonus* Dall, 1919 に戻っていたが(未成員と成員の違いと推測される)、WoRMS では属名が異なる *Minolia nyssonus* (Dall, 1919)が適用されていた。マキアゲエビス *Turcica corensis* Pease, 1860 は BISMaL と一致したが、WoRMS ではシノニムになっていて、現在は *Turcica monilifera* A. Adams, 1854 が有効学名であった(この種でニシキウズガイ科 Trochidae と入力されている科は、BISMaL では Calliotropidae 科に変更されていたが、WoRMS では Eucyclidae が有効科名とされている)。エゾシタダミ *Margarites helycinus pilsbryi* (Kuroda & Habe, 1952)は肥後・後藤(1993)や奥谷(2000)と一致したが、BISMaL や WoRMS では亜種から種へと昇格し、有効学名は *Margarites helycinus* (Phipps, 1774)であった。命名者名と命名年に関しては疑義が出ていたが[肥後・後藤(1993)では *Margarites helycinus* (Philippi, 1846)と記述されているが、WoRMS の原記載は *Turbo helycinus* Phipps, 1774]、現在の有効学名に関しては問題なしと考えて良いと思う。問題は、ニシキウズガイ科 Trochidae と入力されている科が、BISMaL ではサザエ/リュウテン科 Turbinidae になっていて、WoRMS では Margaritidae になっていることであった。著者協議の結果、Margaritidae 科を適用することにした。

Pecten という属名を持つ種には2つの科名が入力されていて、イタヤガイ科 Pectinidae として4種が、ウミギク科 Spondyliidae として1種(トゲナガシヨウウカズラ *Pecten gibbus* Linnaeus, 1758)が入力されていた。*Pecten* という属名からすれば、イタヤガ

イ科が正しい科名と考えられ、トゲナガシヨウウカズラの和名が間違っていると考えるのが妥当である。しかし、この和名が正しければ、学名のほうが間違っているとも考えられた。WoRMS でトゲナガシヨウウカズラという和名に相当する有効学名は、*Spondylus victoriae* G. B. Sowerby II, 1860 と考えられた(分布域はオーストラリアで、*Spondylus wrightianus* Crosse, 1872 はシノニム)。WMSDB では *Pecten gibbus* Linnaeus, 1758 はシノニムで、有効学名は *Argopecten gibbus* (Linnaeus, 1758)であった(分布域は北アメリカ〜ブラジル)。この学名を持つ種の採集地は米国フロリダ州なので「トゲナガシヨウウカズラという和名が間違っている」と結論付けた。この学名を持つ種は収蔵資料 DB にもあり、和名はフロリダイタヤになっていた。標本でトゲナガシヨウウカズラとフロリダイタヤを調べたところ、どちらも同じフロリダイタヤであった。収蔵資料 DB には、トゲナガシヨウウカズラ *Spondylus wrightianus* が別に存在した(この学名はシノニム)。ヒゲナガシヨウウカズラ(学名入力なし)を Google で引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。標本に当たって調べたところ、オリジナルのラベルを(トをヒと)読み違えた転記ミスで、トゲナガシヨウウカズラが正しかった。

ヨメガカサ *Cellana toreuma* (Reeve, 1854)と入力されている種15点(2点はヨメガカサガイと入力)中7点は古腹足目 Vestigastropoda、ニシキウズガイ科 Trochidae と入力され(明らかな誤入力)、8点はカサガイ目 Patellogastropoda、ツタノハガイ科 Patellidae と入力されていた。ヨメガカサの学名は BISMaL でも WoRMS でも同じだが、カサガイ目 Patellogastropoda、ヨメガカサガイ科 Nacellidae になっていた(WoRMS に目名はなく、Patellogastropoda は亜綱になっている)。同じ属名でトラフザラ *Cellana testudinaria* (Linnaeus, 1758)と入力されている種6点の学名は BISMaL でも WoRMS でも同じだったが、トラフザラの和名はな

く、オオベッコウガサになっていた。この種の 6 点中 5 点はツタノハガイ科 *Patellidae* と、1 点はヨメガサガイ科 *Nacellidae* と入力されていた。

和名の誤入力が少なくなく(e.g., マダマブドウガイがマタマブドウガイとマダマブトウガイに; チャイロタマキビがチャイロタマビに)、科名の誤入力や[e.g., ヒザラガイ科 *Chitonidae* が *Chitonida* に (BISMaL では、*Chitonidae* の和名をクサズリガイ科に変更しているので、これに従った)], 命名者名の誤入力も見られた(e.g., Müller が Miiller に)。シロツブリ *Murex turunculus* は、和名の誤入力と属名変更、種小名の誤入力重なっていて、WoRMS では *Hexaplex trunculus* (Linnaeus, 1758) が有効学名であった(昔から染色に使われているという理由から、ツロツブリの和名は残すことにした)。収蔵資料 DB には、他にツロツブリボラ *Hexaplex (Trunculariopsis) turunculus* (Linnaeus, 1758) と入力されている種が見つかった(*turunculus* は誤入力)。ミスズイ *Latiaxis mawae* (Griffith & Pidgeon, 1834) は和名の誤入力、BISMaL で *Latiaxis mawae* を検索するとミズスイの和名が出て来た。WoRMS では命名者名が明確化され、命名年が異なる *Latiaxis mawae* (Gray in Griffith & Pidgeon, 1833) が適用されていた。

クシチクモドキと和名だけ入力されているケースは、この資料の寄贈者である鈴木稔さんのメモ紙に書かれた独特の筆致を誤入力したものと考えられ、実際には「7 シチクモドキ」と記入されているようであった(7 は数字の通し番号)。これとは別に、シチクモドキと入力されている種には *Hastula strigilata* (Linnaeus, 1758) という学名が入力されていて、これは BISMaL と一致した。シャジャクガイ *Micantapex (Parabathytoma) luehdorfi* (Lischke, 1872) は和名の誤入力であったが、シャジクガイの和名に相当する分類群が BISMaL には存在しなかった。WoRMS では *Micantapex luehdorfi* (Lischke, 1872) というシノニムが存在し、現在の有効学名は *Bathytoma luehdorfi*

(Lischke, 1872) であった。この学名の属名と種小名を基に Google の引用符検索で調べたところ、シャジクガイという和名が生きていた(奥谷, 2017)。

学名は命名年が入っているものが多く、一見すると問題はなさそうに思えた。しかし、軟体動物門に特異的な(他の分類群では余り使わない)事例として、本来、動物の分類では使用することのない品種(*forma*)や変種(*variety*)が、学名として記載されていることであった。これら *forma* の付いた属名と種小名を Google で引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。アジロダカラ *Palmadusta ziczac forma undata* (Lamarck, 1810) は WoRMS ではシノニムとされ、*Palmadusta ziczac* (Linnaeus, 1758) が有効学名であった。ホンメダカラ *Palmadusta ziczac* (Linnaeus, 1758) は、BISMaL では和名がアジロダカラになっていた。ホソスウェイソンモオリガイという和名が入力されている品種には *Alcithoe swainsoni forma calva* Powell, 1928 という *forma* の付いた学名が与えられていて、Google の引用符検索(*forma* の付いた属名と種小名のみの検索)では、収蔵資料 DB がヒットするだけであった。BISMaL と WoRMS では、この学名に相当する *Alcithoe swainsoni* Marwick, 1926 というシノニムが見つかり、種小名が異なる有効学名は *Alcithoe arabica* (Gmelin, 1791) であった。

オキノシマギセル *Paganizaptyx stimpsoni* var. *perignobilis* (Pilsbry, 1901) の変種や、ニシムラギセル *Paganizaptyx stimpsoni forma nishimurai* (Kuroda, Ms. 1949) の品種の学名に関しても、Google の引用符検索でヒットするのは収蔵資料 DB だけで、これらの学名の引用元が肥後・後藤(1993)であることを確認した。WMSDB では属名が変更され、亜種(または型)の扱いになっている[*Hemizaptyx stimpsoni perignobilis* (H. A. Pilsbry, 1901); *Hemizaptyx stimpsoni nishimurai* J. T. Kuroda, 1949]。エゾマイマイ *Ezohelix gainsi* (Pilsbry, 1900) (*gainsi* は *gainesi* の誤入力) とブドウマイマイ *Ezohelix gainesi forma flexibilis* (Fulton, 1905) は、

WMSDB では属名が変更され、後者は亜種の扱いになっている[*Bradybaena gainesi* (H. A. Pilsbry, 1900); *Bradybaena gainesi flexibilis* (H. C. Fulton, 1905)]。一般的に、ブドウマイマイはエゾマイマイの黒化型と言われて来たが、亜種レベルでの分化が進んでいるという判断のようである。

リュウキュウカタベ *Angaria delphinus* (Linnaeus, 1758)の品種として入力されているコブシカタベガイ *Angaria delphinus forma tyria* (Reeve, 1842)は、加藤繁富さんがフィリピンのセブマーケットで購入したもので、WoRMS では *Angaria tyria* (Reeve, 1842)が有効学名であった。シリブトチグサ *Cantharidus callichroa forma bisbalteatus* (Pilsbry, 1901)は、奥谷(2000)、及び BISMAL では *Cantharidus bisbalteatus* (Pilsbry, 1901)になっていたが(属名の *Cantharidus* は誤入力)、WoRMS に原記載の *Cantharidus bisbalteatus* Pilsbry, 1901 が出来たので、これを採用した。

クロタマキビ(1 品種) *Neritrema stithana forma atkana* Dall, 1868 やクロタマキビ(1 品種) *Neritrema stilhana forma kurila* Middendorff, 1848 では、種小名の誤入力が酷く、属名を変更した *Littorina stithana* や *Littorina stilhana* で検索可能な DB はなかった。WMSDB で *Littorina atkana* を検索すると、命名年の異なる *Littorina sitkana atkana* W. H. Dall, 1902 が出来た(WoRMS では検索不能)。BISMAL では、命名年の異なる *Littorina sitkana atkana* Dall, 1886 が、クロタマキビのシノニムとして出来た(命名者名が Dall の命名年が 1868 から 1902 を経て 1886 へ変更されている)。WoRMS や WMSDB では、*Littorina kurila* Middendorff, 1848 がシノニムとされ(Middendorff は誤入力)、*Littorina sitkana* Philippi, 1846 が現在の有効学名であった(クロタマキビの品種が消えた?)。

肥後・後藤(1993)で亜種として扱われていたものが、奥谷(2000)では型小名の前に form を置き、種の型(たとえば、夏型、秋型)として記述しているケースが多い。収蔵資料 DB では、品種小名の前に forma の付

いた品種は数多く見られるが、form の付いたものはなかった。しかし、イシダタミ *Monodonta Labio from confusa* Tapparone-Canefri, 1874 と入力されている型 16 点は、form とすべきところを from と入力したものと推察され、この間違いがそのまま収蔵資料 DB を検索すると出て来る(*Labio* は誤入力)。BISMAL では、*Monodonta labio confusa* Tapparone-Canefri, 1874 という亜種がシノニムになっていて、亜種小名を種小名に変更したイシダタミ *Monodonta confusa* Tapparone-Canefri, 1874 が有効な和名・学名であった(WoRMS では命名者名のハイフンがなく、原記載であることから、こちらを採用した)。

ツマグロメダカラ *Purpuradusta (Purpuradusta) gracilis* (Gaskoin, 1848)の亜種としてメタカラガイ *Purpuradusta (Cupinota) gracilis japonica* (Schilder, 1931)が入力されていた。ツマグロメダカラは採集地が台湾の高雄で、和名は BISMAL になく、収蔵資料 DB を除いて、Google の引用符検索でもヒットしなかった。この和名を動物部門が所有する図鑑類と照合したところ、肥後・後藤(1993)と一致した。現在は、どちらも属名が変更され、ツマグロメダカラの和名が消えて、メダカラ *Cypraea gracilis* (Gaskoin, 1848)が有効な和名・学名とされている。菱田(2000)では、この学名にホンメダカラの和名が与えられている。収蔵資料 DB にタカラガイ類で入力されている外国産種の多くは、属名と種小名しか入力されていない点で、菱田(2000)と一致する。

トゲエビス *Calliostoma aculeatus aculeatus* Sowerby, 1912 と入力されている亜種は、BISMAL では種へと昇格し、命名者名が明確化されて、*Calliostoma aculeatum* Sowerby III, 1912 になっていた(*aculeatus* は *aculeatum* の語尾変化間違い)。WoRMS では属名が異なり、種小名の語尾変化と命名者名の明確化がなされて、*Tristichotrochus aculeatus* (G. B. Sowerby III, 1912)が適用されていた。トゲエビスの亜種として入力されていたヘソアキトゲエビス *Calliostoma*

aculeatus soyuae Ikebe, 1942 は BISMAL でも WoRMS でも属名が同じで、*Calliostoma soyuae* Ikebe, 1942 と、トゲエビスとは別属の種になっていた。キイエビス *Calliostoma consors kiiense* Ikebe, 1942 は、BISMAL に和名も学名もなかった。学名は WoRMS にもなかったが、*Tristichotrochus consors* (Lischke, 1872) という有効学名のシノニムとして、*Calliostoma kiiense* Ikebe, 1942 が存在した。収蔵資料 DB や BISMAL でコシタカエビス *Calliostoma consors* (Lischke, 1872) と記載されている種は、WoRMS では *Tristichotrochus consors* (Lischke, 1872) のシノニムであった。キイエビスは、和名も学名もコシタカエビスに統一されたことになる。ヘソアキエビス *Coralastele pulcherrima* (Sowerby, 1914) は、BISMAL では命名年が異なり、*Coralastele pulcherrima* (Sowerby III, 1944) が適用されていた。しかし、この命名者名で 1944 という命名年は余りにも懸け離れている[奥谷(2000)では 1914]。WoRMS では、*Coralastele pulcherrima* (G. B. Sowerby III, 1914) が有効学名であった(BISMAL では、このような間違いが少なくない)。ニシキエビス *Calliostoma multiliratum* (Sowerby, 1875) には、BISMAL では命名者名が異なる *Calliostoma multiliratum* (Sowerby II, 1875) が適用されていた。WoRMS によると、この命名者名は間違いで、*Calliostoma multiliratum* (G. B. Sowerby III, 1875) が有効学名のシノニムとされている(二世と三世の違い)。このシノニムには種小名が異なる *Calliostoma crossleyae* E. A. Smith, 1910 が適用されていて、属名が変更された *Tristichotrochus crossleyae* (E. A. Smith, 1910) が現在の有効学名であった。

フトスジエビス *Machaeroplax rudis* (Dall, 1919) は、BISMAL や WoRMS に和名や学名がなく、WMSDB に *Solariella rudis* W. H. Dall, 1919 が出て来た。Google でフトスジエビスを検索すると、*Solariella baxteri* McLean, 1995 という別の学名を掲載している複数のサイトが見つかった。Google で *Solariella baxteri* を引用符検索すると、Wikipedia に species inquirenda とし

て同じ学名が存在した[species inquirenda: ラテン語で、未確定種(a species of doubtful identity requiring further investigation)]。この学名のオリジナルは OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018b) で、*Solariella baxteri* McLean, 1995 のシノニムとして、種小名・命名者名・命名年が同じ *Margarites (Pupillaria) rudis* Dall, 1919 が存在した。この学名の senior name として *Solariella baxteri* McLean, 1995 が掲載されていること、収蔵資料 DB の *Machaeroplax* 属は消えていても種小名・命名者名・命名年が同じであること(WoRMS では *Solariella* 属のシノニムとして掲載)、common name として Futo-suji-ebisu が掲載されていることから、フトスジエビス *Solariella baxteri* McLean, 1995 (未確定種) が有効な和名・学名と判断した。

収蔵資料 DB にシロオビコダマウサギ *Prinovolva (Prinovolva) wilsoniana* Cate, 1973、及びムラクモダマウサギ *Prinovolva brevis* (Sowerby, 1828) という種が入力されている。シロオビコダマウサギに、BISMAL や WoRMS では種小名が異なる *Prinovolva brevis* (G. B. Sowerby I, 1828) が適用されていた(*Prinovolva* は誤入力)。これはムラクモダマウサギの学名と同じであったが、BISMAL に和名がなく、著者らは当初、和名がシロオビコダマウサギへ変更されたと考えた。ムラクモダマウサギという和名に違和感を覚え、BISMAL でムラクモコダマウサギを検索すると、*Prinovolva bulla* (Adams & Reeve, 1848) が有効学名であった(この学名は WMSDB にはあるが、WoRMS にはない)。ヒナウミウサギ *Pseudosimnia (Inflatovula) sinensis* (Sowerby, 1874) は、BISMAL や WoRMS では和名と命名者名が明確化されたヒナウミウサギガイ *Pseudosimnia (Inflatovula) sinensis* (G. B. Sowerby III, 1874) がシノニムとされ、和名・属名・種小名が異なるコダマウサギ *Margovula marginata* (G. B. Sowerby I, 1828) が適用されていた。この学名はヘリトリコダマウサギ *Pseudosimnia (Inflatovula) marginata* (Sowerby, 1828) にも適用されていた(ヒナウミウサギとヘリト

リコダマウサギをコダマウサギに変更した)。

ヘソアキクボガイ *Chlorostoma turbinata* (A. Adams, 1853)は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)や BISMAL では、学名が *Chlorostoma turbinatum* A. Adams, 1853 になっていた。両者は、種小名の語尾変化と原記載であること以外、特段の問題はないものと思われたが、WoRMS の *Chlorostoma* 属に該当種はなかった。WMSDB で *Chlorostoma turbinatum* を入力して検索されたのは、*Tegula lividomaculata* (C. B. Adams, 1845)という属名も種小名も異なる学名で、*Tegula turbinata* J. E. Tenison-Woods, 1877 がシノニムになっていたが、*Chlorostoma* 属から *Tegula* 属への変遷が不明で、別種の可能性が高かった(写真も異なる)。微小貝データベース(2018e)では、ヘソアキクボガイ *Chlorostoma turbinatum* A. Adams, 1853 の説明に「=*Tegula argyrostoma turbinatum* A. Adams, 1853」という記述が見られ、WoRMS 検索を掛けても記録がなかったが、WMSDB に *Tegula argyrostoma turbinata* (A. Adams, 1853)が見つかった。WoRMS に、この亜種名はないが、*Tegula argyrostoma* (Gmelin, 1791)がシノニムとされ、有効学名は *Chlorostoma argyrostomum* (Gmelin, 1791)であった。この学名は BISMAL になく、これも別種の可能性が高かった。著者協議の結果、ヘソアキクボガイ *Chlorostoma turbinatum* A. Adams, 1853 を現時点での有効な和名・学名と結論付けた。

バテイラ *Omphalius pfeifferi pfeifferi* (Philippi, 1846)は奥谷(2000)や BISMAL と一致したが、WoRMS の *Omphalius* 属に該当する亜種はなく、WMSDB で *Omphalius pfeifferi* を検索すると属名が異なる *Tegula pfeifferi* (R. A. Philippi, 1846)が出て来た。WoRMS 検索で同じ学名が見つかったので、バテイラ *Tegula pfeifferi* (Philippi, 1846)を有効な和名・学名と判断した。オオコシダカガンガラ *Omphalius pfeifferi carpenteri* (Dunker, 1882)も奥谷(2000)や BISMAL と一致したが、WoRMS の *Omphalius* 属に該当する亜種はなかった。WMSDB では属名と命名年が異なる *Tegula pfeifferi*

carpenteri R. W. Dunker, 1859 が存在したが、この亜種名も学名の変遷も WoRMS になく、バテイラと同じ学名の *Tegula pfeifferi* (Philippi, 1846)という種だけが記載されていた。これらの結果から、オオコシダカガンガラ *Tegula pfeifferi carpenteri* Dunker, 1859 を有効な和名・学名と判断した。

エゾチグサ *Cantharidus jessoensis* (Schrenck, 1863)は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では命名者名が Schrenck になっていた。WoRMS では *Cantharidus* 属に該当する種はなく、WMSDB では *Cantharidus callichrous jessoensis* (L. von Schrenck, 1863)という亜種名が出て来て、命名者名は収蔵資料 DB や肥後・後藤(1993)と同じであった。Google Scholar で L. von Schrenck と L. von Schrenck を引用符検索すると、前者は 139 件ヒットし、後者に相当する文献がなかった。以上の結果から、エゾチグサ *Cantharidus callichrous jessoensis* (Schrenck, 1863)を適用した。ハナチグサ *Cantharidus callichroa* (Philippi, 1850)は奥谷(2000)や BISMAL では命名年が 1849 になっていたが、WMSDB には *Cantharidus callichrous* R. A. Philippi, 1850 という学名があり、種小名が女性形 *callichroa* から男性形 *callichrous* に語尾変化して、命名年が 1849 から 1850 になっていた。著者協議の結果、ハナチグサ *Cantharidus callichrous* Philippi, 1850 を有効な和名・学名と判断した。

シモフリチグサ *Iwakawatrochus vittatus* (Pilsbry, 1903)は肥後・後藤(1993)と一致したが、和名も学名も奥谷(2000)や BISMAL になく、WoRMS では *Iwakawatrochus* の属名だけ出て来て、種を含まなかった。WMSDB では、属名が異なる *Cantharidus vittatus* (H. A. Pilsbry, 1903)が適用されていた。イワカワチグサ *Iwakawatrochus urbanus* (Gould, 1861)は、肥後・後藤(1993)、奥谷(2000)、BISMAL と一致したが、WMSDB では属名が異なり、*Cantharidus urbanus* (A. A. Gould, 1861)になっていた(WoRMS でも有効)。これらを総合的に判断し、和名なし *Cantharidus vittatus*

(Pilsbry, 1903)と、イワカワチグサ *Cantharidus urbanus* (Gould, 1861)を有効な和名・学名と結論付けた。リュウキュウチグサ *Kanekotrochus gilberti* (Montrouzier in Fischer, 1878)は BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS でも *Kanekotrochus* 属に該当する種小名はなかった。WMSDB で *Kanekotrochus gilberti* を検索すると、収蔵資料 DB の学名とは属名だけ異なる *Jujubinus gilberti* (R. P. Montrouzier in P. Fischer, 1878)が出て来た。オニノハ *Tosatrchus attenuatus* (Jonas, 1845)に、BISMAL では属名と命名年が異なる *Thalotia attenuatus* (Jonas, 1844)が適用されていた。WoRMS では種小名が男性形から女性形へ変化した *Thalotia attenuata* (Jonas, 1844)がシノニムとされ、収蔵資料 DB と命名年が異なるだけの *Tosatrchus attenuatus* (Jonas, 1844)が適用されていた。

収蔵資料 DB のアナアキウズ *Trochus* (*Trochus*) *maculatus verrucosus* Gmelin, 1790 は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)では和名、及び亜種から型への変更がなされ、ニシキウズ(アナアキウズ型) *Trochus maculatus form verrucosus* Gmelin, 1791 になっていた(BISMAL の記載も基本的に同じだが、form が抜けているのは単純な記入ミスか?)。WoRMS では亜種から種へと昇格した *Trochus verrucosus* Gmelin, 1791 がシノニムとされ、種小名が異なる *Trochus maculatus* Linnaeus, 1758 が有効学名であった。この学名は BISMAL に存在し、和名はニシキウズになっていた。WoRMS では、アナアキウズはニシキウズの亜種にも型にも分化していないと判断されたことになる。ハクシャウズ *Trochus* (*Trochus*) *calcaratus* Souverbie, 1971 は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では種小名が異なり、*Trochus histrio* Reeve, 1848 になっていた。WoRMS では、命名年が異なる *Trochus histrio* Reeve, 1842 が適用されていた。WoRMS で *Trochus* 属を見て行くと、収蔵資料 DB に入力されている学名とは命名年が異なる *Trochus calcaratus* Souverbie, 1875 が見つかった。

WoRMS では、ハクシャウズと考えられる学名が 2 つ出て来たことになる。WMSDB では *Trochus calcaratus* S. M. Souverbie, 1875 がシノニムとされ、*Trochus histrio* L. A. Reeve, 1842 が適用されていた。これらの結果から、ハクシャウズ *Trochus histrio* Reeve, 1842 を有効な和名・学名と判断した。

ヒメタカジリ *Trochus* (*Trochus*) *cumingii* (A. Adams, 1853)は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では原記載の *Trochus cumingii* A. Adams, 1853 になっていた(この学名は、大英自然史博物館のリストに載っている)。WoRMS 検索で原記載の *Trochus cumingii* Philippi, 1846 がヒットしたが、命名者名と命名年が異なっていた。WoRMS と WMSDB では、これもシノニムとされていて、属名が異なる *Tectarius cumingii* (Philippi, 1846)が有効学名であった。サラサバテイ *Tectus* (*Rochia*) *maximus* (Philippi, 1844)には、奥谷(2000)と BISMAL では種小名が異なる *Tectus niloticus* (Linnaeus, 1767)が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、属名と種小名の語尾が異なる *Rochia nilotica* (Linnaeus, 1767)が現在の有効学名であった。ナツモモ *Clanculus margaritarius* (Philippi, 1846)も肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では命名年が 1849 になっていた。WoRMS では *Monodonta margaritaria* Philippi, 1846 が原記載なので、収蔵資料 DB と肥後・後藤(1993)の命名年(1846)は正しく、奥谷(2000)と BISMAL の 1849 は間違いである。フアセコナツモモ *Clanculus* (*Eucheliclanculus*) *bronni fraterculus* Pilsbry, 1904 は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS や WMSDB で *Clanculus* 属を調べても該当する亜種や *fraterculus* に似た綴りが見つからなかった[*Eucheliclanculus* に該当する属はなかったが、肥後・後藤(1993)にはコマキアゲエビス亜属と記載されている]。Google でフアセコナツモモを引用符検索すると、*Clanculus fraterculus* Pilsbry, 1904 という独立種が出て来た(微小貝データベース、

2018f)。肥後・後藤(1993)と WoRMS では *Clanculus hizenensis* Pilsbry, 1901 が、WMSDB では *Clanculus hizenensis fraterculus* H. A. Pilsbry, 1904 が、それぞれ *Clanculus bronni* Dunker, 1860 のシノニムとされていた(BISMaL では、コマキアゲエビスの学名になっている)。学名の変遷は不明瞭だったが、これらを総合的に判断すると、フアセコナツモモという亜種はコマキアゲエビスという種に吸収されたと考えられ、フアセコナツモモ *Clanculus (Eucheliclanculus) bronni fraterculus* Pilsbry, 1904 をコマキアゲエビス *Clanculus bronni* Dunker, 1860 に変更した。

Pentacta australis (LuowG)と学名だけ入力されている種(軟体動物門 Mollusca/腹足綱 Gastropoda/古腹足目 Vestigastropoda/ニシキウズガイ科 Trochidae: 採集地はアラフラ海の西沖)は、BISMaL に和名がなく、*Pentacta australis* (Ludwig, 1875)という学名だけが記載されていた。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Plesiocolochirus australis* (Ludwig, 1875)が有効学名であった(棘皮動物門 Echinodermata/ナマコ綱 Holothuroidea/樹手目 Dendrochiroidea/キンコ科 Cucumariidae)。この種は鈴木稔コレクションの1点で、標本状態が貝殻なので、ナマコの仲間を示す学名には違和感を覚えた。標本に当たって調べたところ、まったく別物のニシキウズガイ科の貝殻であった。元々のラベルの学名の転記ミスで、オオサンショウガイモドキ *Herpetopoma aspersa* (Philippi, 1846)が最も近かった(微小貝データベース, 2018g)。WoRMS では *Herpetopoma aspersa* [sic]と出て来て、*Herpetopoma aspersum* (Philippi, 1846)が有効学名であった(軟体動物門 Mollusca/腹足綱/GastropodaSeguenziida 目/Chilodontidae 科)。

クラギシログサ *Lepeta kuragiensis* (Yokoyama, 1920)は、BISMaL では属名が異なる *Cryptobranchia kuragiensis* (Yokoyama, 1920)が有効学名であった。WoRMS では学名が混乱しているようで、2018年12月8日の時点で *Cryptobranchia* Middendorff, 1851 は

junior objective synonym (客観新参異名)とされ、*Lepeta* Gray, 1847 を有効属名と記述しているにもかかわらず、*Cryptobranchia kuragiensis* (Yokoyama, 1920)も有効学名と記述していた。著者協議の結果、クラギシログサ *Lepeta kuragiensis* (Yokoyama, 1920)を有効な和名・学名と結論付けた。シログサ *Lepeta caeca pacifica* Moskarev, 1978 は、BISMaL では和名と命名者名が異なるシログサガイ *Lepeta caeca pacifica* Moskalev, 1978 が有効とされていた。WoRMS では、命名年が異なる *Lepeta caeca pacifica* Moskalev, 1977 がシノニムとされていて、*Lepeta caeca* (O. F. Müller, 1776)が有効学名であった。クルマガサ *Cellana radiata* (Pilsbry, 1891)は BISMaL では命名者名が異なり、*Cellana radiata* (Bron, 1891)になっていた。WoRMS では、この学名の命名者名の綴りと命名年が間違いとされ、*Cellana radiata* (Born, 1778)が適用されていた(原記載は *Patella radiata* Born, 1778)。タイワンガサ *Cellana profunds mauritiana* (Pilsbry, 1891)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL に和名はなく、WoRMS や WMSDB の *Cellana* 属に似たような種小名も亜種小名もなかった。Google でタイワンガサを検索すると、*Eoacmaea* sp.の学名が見つかった(佐々木, 2018)。WoRMS の *Eoacmaea* 属には、亜種から種に格上げされた *Eoacmaea mauritiana* (Pilsbry, 1892)が出て来た。この種の原記載が *Helcioniscus profundus mauritiana* Pilsbry, 1892 なので、収蔵資料 DB と肥後・後藤(1993)にある *profunds* という種小名は、*profundus* の記述ミスと推察される。以上の結果から、タイワンガサ *Eoacmaea mauritiana* (Pilsbry, 1892)を有効な和名・学名と判断した。

ツボミ *Patelloida (Asteracmea) pygmaea lampanicola* (Habe, 1944)は、BISMaL や WoRMS では種小名が異なり、ツボミガイ *Patelloida conulus* (Dunker, 1861)が適用されていた。シボリガイ *Patelloida (Asteracmea) pygmaea signata* (Pilsbry, 1901)は BISMaL に見当たらなかったが、シボリガイモドキ *Patelloida signatoides*

(Kuroda & Habe, 1971)という種が存在した。WoRMS で *Patelloida* 属を見て行くと、亜種から種へと昇格した *Patelloida signata* (Pilsbry, 1901)が出て来て、*Patelloida signatoides* (Kuroda & Habe, 1971)がシノニムとされていた。以上の結果から、BISMaL に記載されているシボリガイモドキは消え、シボリガイ *Patelloida signata* (Pilsbry, 1901)を有効な和名・学名と判断した。ヒメコザラ *Patelloida (Asteracmea) pygmaea pygmaea* (Dunker, 1860)は BISMaL と WoRMS では種小名と命名年が異なり、*Patelloida heroldi* (Dunker, 1861)が適用されていた。

採集地が北海道稚内と岩手県広田湾のベッコウシロガイ *Testudinalia scutus* (Eschscholtz, 1833)と入力されている種は、BISMaL や WoRMS では属名と種小名が異なる *Lottia emydia* (Dall, 1914)が有効学名とされている。WoRMS で *Testudinalia scutus* を検索すると、種小名の語尾と命名者名が異なる *Testudinalia scutum* (Rathke, 1833)が、*Lottia scutum* (Rathke, 1833)のシノニムとして出て来た。これは入力の問題で、和名優先なら *Lottia emydia* (Dall, 1914)が正しく、学名優先なら *Lottia scutum* (Rathke, 1833)が正しい。WMSDB で分布域を調べると、前者は北海道で、後者はアラスカを初めとする環太平洋地域であった。以上の結果から、ベッコウシロガイ *Lottia emydia* (Dall, 1914)を有効な和名・学名と判断した。

ヒメイシダタミアマオブネ *Nerita (Ritena) tristis* Pilsbry, 1901 は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL では和名も学名も見当たらず、WoRMS では *Nerita tristis* d'Orbigny, 1842 と *Nerita tristis* Pilsbry, 1901 という属名と種小名が同じで命名者名と命名年が異なる 2 つの学名が出て来た。*Nerita tristis* d'Orbigny, 1842 は *Puperita pupa* (Linnaeus, 1767)のシノニムとされ[*Nerita (Nerita) helicinoides tristis* Pilsbry, 1901 は奥谷(2000)と一致したが、現在のステータスは新参異物同名(invalid: junior homonym of *Nerita tristis* d'Orbigny, 1842)], *Nerita tristis* Pilsbry, 1901 は

Nerita eichhorsti Krijnen, Gras & Vink, 2018 の学名を持つ新種として記載されていた(Pilsbry の命名は総て否定された)。

スミツキシヤジクガイ *Inquister* sp.は、フィリピン・セブの Mactan 島で採集され、BISMaL に和名はなかった。Google でスミツキシヤジクガイの引用符検索を掛けると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。県博が所有する図鑑類で調べたところ、菱田(2000)にスミツキシヤジクガイ *Inquister vaicosa* と書かれている写真が存在した。*Inquister* 属は間違いなので、WoRMS で *Inquisitor* 属に出て来る種を見て行くと、*Inquisitor varicosus* (Reeve, 1843)という、種小名が似ている種が見つかった(WoRMS では、原記載として *Pleurotoma varicosus* Reeve, 1843 が記載されている)。菱田(2000)の種小名 *vaicosa* は、*r* が抜けた誤入力と不正確な語尾変化によるものと考え、類推した属名と種小名 *Inquisitor varicosus* で Google の引用符検索を掛けると、Wikipedia に菱田(2000)と似た貝殻の写真が出て来た。微小貝データベース(2018d)に、ウネクチキレボラ *Inquisitor varicosus* (Reeve, 1843)という種が見つかった。このサイトに別名スミツキシヤジク、台湾名: 台湾玉米捲管螺 *Inquisitor taivaricosus* と書かれていて、この学名で WoRMS 検索を掛けると、*Inquisitor taivaricosus* Chang & Wu, 2000 という新しい種が出て来た。この種の WoRMS image を見ると、菱田(2000)に掲載されているのとまったく同じ貝殻で、フィリピン・セブの Mactan 島で採集されたものであった。以上を総合的に判断し、収蔵資料 DB のスミツキシヤジクガイ *Inquister* sp.を、スミツキシヤジク *Inquisitor taivaricosus* Chang & Wu, 2000 に変更した。

ヒメカノコ *Clithon (Pictoneritina) oualaniensis* (Lesson, 1831)は、WoRMS では *Clithon oualaniensis* [sic] (incorrect gender ending)となっていて、*Clithon oualaniense* (Lesson, 1831)が有効学名であった。オオマルアマオブネ *Neritina (Theliostyla) chamaelom*

Linnaeus, 1758 は、BISMaL でも WoRMS でも属名が異なる *Nerita chamaeleon* Linnaeus, 1758 が適用されていた(*chamaelon* は誤入力)。ヒロクチカノコ *Neritina* (*Dostia*) *violacea* (Gmelin, 1791)は、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL では、和名優先なら種小名が異なる *Neritina cornucopia* (Benson, 1836)が有効であったが、学名優先なら和名なし *Neritina violacea* (Gmelin, 1791)が別に存在した[奥谷(2000)では別種とされている]。WoRMS では、*Neritina cornucopia* Benson, 1836 がシノニムとされ、属名が変更された *Neripteron cornucopia* (Benson, 1836)が有効学名であった[学名優先の場合、*Neripteron violaceum* (Gmelin, 1791)も種として存在するが、明らかにヒロクチカノコとは別種]。

スジマキカワニナ *Semisulcospira massaeformis* Kuroda & Kanamaru, 1929 は、WMSDB の expanding search でも Double Metaphone algorithm でも記録がなかった。Google で *Semisulcospira massaeformis* を引用符検索すると、収蔵資料 DB だけがヒットした。肥後・後藤(1993)には種小名の異なる *Semisulcospira nassaeformis* Kuroda & Kanamaru, 1929 が記載されている(*massaeformis* という種小名は明らかな誤入力で、*n* と *m* の違いだけで検索に引っ掛かって来なかったことになる)。WMSDB で *Semisulcospira nassaeformis* を検索すると、*Semisulcospira libertina nassaeformis* J. T. Kuroda & T. Kanamaru, 1929 が出て来た。アオミオカタニシ *Leptomopa* (*Leptomopa*) *nitidum* Sowerby, 1843 は WMSDB で *Leptomopa nitidum* を検索してもヒットせず、Google でアオミオカタニシを検索すると *Leptopoma nitidum* が出て来た(*Leptomopa* は誤入力で、*p* と *m* の置き換わりで検索に引っ掛かって来なかったことになる)。

イブキゴマガイ *Diplommatina* (*Sinica*) *labiosa* *labiosa* Martens, 1877 は肥後・後藤(1993)と一致したが、WMSDB 検索で命名者名と命名年が異なる *Diplommatina labiosa* Blanford, 1868 が出て来た。陸・

淡水産腹足類日本固有種目録(亀田, 2018)ではイブキゴマガイの和名に *Diplommatina collarifera* Schmacker & Böttger, 1890 が掲載され、肥後・後藤(1993)では *Diplommatina collarifera* Schmacker & Boettger, 1890 が *Diplommatina* (*Sinica*) *labiosa labiosa* Martens, 1877 のシノニムとして掲載されている(Boettger と Böttger は同じ綴り)。WMSDB 検索で、*Diplommatina collarifera* P. B. Schmacker & O. Böttger, 1890 という種が出て来た。WMSDB では、*Diplommatina* 属に *labiosa* と *collarifera* の種小名を持つ2つの種が存在し、そのどちらかにイブキゴマガイという和名が与えられていることになる(掲載されている画像を見る限り、*collarifera* のように軍配が上がりそうである)。その一方で、イブキゴマガイと同じ種小名を持つオオウエゴマガイ *Diplommatina* (*Sinica*) *labiosa tenuiplica* Pilsbry, 1900 は、WMSDB では亜属が取れた学名が適用されていたが、種小名だけ異なる *Diplommatina collarifera tenuiplica* H. A. Pilsbry, 1900 も存在し、かなり混乱しているようであった。WoRMS にも陸産貝類として *Diplommatina* 属は掲載されているが、*labiosa* と *collarifera* の種小名はない。以上を総合的に判断し、イブキゴマガイ *Diplommatina collarifera* Schmacker & Böttger, 1890 とオオウエゴマガイ *Diplommatina collarifera tenuiplica* Pilsbry, 1900 を有効な和名・学名と結論付けた。

クボタシタダミ *Kubotanella* sp.は、BISMaL では命名年のない *Kubotanella vitrea* Kuroda がシノニムとされ、属名が異なる *Dillwynella vitrea* Hasegawa, 1997 が適用されていた(WoRMS や WMSDB にも同じ学名が存在する)。サミダレタマキビ *Littorina* (*Neritrema*) sp. の和名が Google の引用符検索でヒットするのは、収蔵資料 DB と「山形県立博物館収蔵資料目録. 動物資料目録 8. 加藤繁富貝類コレクション(以後、加藤目録と略す)」の2件だけで、和名も学名も特定は不能であった(この2つは同じもの)。 *Littorina peanapis* (Philippi)と学名だけ入力されている種を Google で引

用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけで、*Littorina* 属で種小名の特定は不能であった。*Littorina (Austrelittorina) unifasciata antipodum* Philippi と学名だけ入力されている亜種を WMSDB で検索すると、*Austrolittorina unifasciata antipodum* R. A. Philippi, 1847 という原記載がシノニムになっていて、*Austrolittorina antipodum* (R. A. Philippi, 1847)が出て来た(*Austrelittorina* は *Austrolittorina* の誤入力で、*o* が *e* になっただけで検索が困難になっている)。BISMaL にも、*Austrolittorina antipodum* (Philippi, 1847)という和名なし学名が見つかった。

コビトウラウズ *Peasiella roepstorffiana* (Nevill, 1884)は、BISMaL や WoRMS では学名が消え、新種記載されたコビトウラウズガイ *Peasiella habeii* Reid & Mak, 1998 が有効な和名・学名になっていた。ホソスジチョウジガイ *Peripetella materinsulae* Pilsbry, 1904 には、WMSDB では属名が異なる *Rissoina materinsulae* H. A. Pilsbry, 1904 が適用されていたが、BISMaL と WoRMS ではシノニムとされ、入力されている学名とは属名も種小名も異なる *Rissoina ambigua* (Gould, 1849)が適用されていた。キンスジチョウジガイ *Apataxia cerithiformis* (Dunker, 1887)には、BISMaL では属名・命名者名・命名年が異なる *Rissoina cerithiformis* Tryon, 1887 が適用されていた(*cerithiformis* は誤入力)。WoRMS では *Rissoina cerithiiformis* Tryon, 1887 がシノニムとされ、属名が変更された *Apataxia cerithiiformis* (Tryon, 1887)が有効学名であった。ヌノメチョウジガイ *Phosinella fusca* (Gould, 1861)には、BISMaL では属名と種小名が異なる *Rissoina pura* (Gould, 1861)が適用されていたが、WoRMS や WMSDB では *Phosinella pura* (Gould, 1861)が適用されていた。レイシツボ *Pyramidelloides miranada* (A. Adams, 1861)は、属名と種小名の誤入力で、どの DB でもヒットしなかったが、属名を類推して WMSDB 検索すると、*Pyramidelloides mirandus* (A. Adams, 1861)が出て来た(学名は WoRMS でも有

効)。この種はリソツボ科 *Rissoidea* に分類されていたが、現在は寄生種で構成されるハナゴウナ科 *Eulimidae* に移行している。

コゲレイシダマシ *Cronia (Muricodrupa) aspera* (Lamarck, 1799)は肥後・後藤(1993)と一致したが、どの組み合わせでも、BISMaL や WoRMS だけでなく、WMSDB でも検索不能で、佐々木(2018)の和名・学名対応表に *Neothais marginatra* があった。BISMaL 検索で *Neothais marginatra* (Blainville, 1832)が出て来て、この学名は WoRMS や WMSDB でも有効であった[肥後・後藤(1993)に「= *marginata*」とあったので(*marginatra* ではない)、試しに *Cronia (Muricodrupa) marginata* で検索すると、WoRMS に *Cronia marginatra* (Blainville, 1832)というシノニムが見つかった]。レイシダマシモドキ *Cronia (Muricodrupa) fusca* (Kiister, 1862)は、BISMaL や WoRMS では、属名変更された *Semiricinula fusca* (Küster, 1862)が有効学名であった(Kiister は Küster の誤入力)。

コイボテツレイシ *Mancinella intermedia* (Kiener, 1936)には、BISMaL では 1836 の命名年が適用されていたが、WoRMS の曖昧検索で出て来たのは、属名が異なる *Marginella intermedia* G. B. Sowerby II, 1846 と *Marginella herminea* Jousseaume, 1875 であった。これらの学名に違和感を覚えたので、WMSDB で *Mancinella intermedia* を検索すると、属名が異なる *Menathais intermedia* (L. C. Kiener, 1836)がヒットした(この学名は WoRMS で有効)。トゲツノテツレイシ *Mancinella aculeata* Deshayes, 1844 は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS や WMSDB では *Mancinella aculeata* Link, 1807 がシノニムになっていて(命名者名と命名年が異なっている)、種小名が変更された *Mancinella alouina* (Röding, 1798)が適用されていた。ツノテツレイシ *Mancinella hippocastanum* (Linnaeus, 1758)には、BISMaL では種小名が語尾変化した *hippocastana* が適用されていたが、WoRMS では収蔵資料 DB と同じ学名がシノニムで出て来て[BISMaL

の *hippocastana* は語尾変化間違い。奥谷(2000)では *hippocastanus* になっている]、属名と種小名が異なる *Volema myristica* Röding, 1798 が有効学名であった。

シロハリゴウナ *Eulima maria* (A. Adams, 1861)は、WoRMS の曖昧検索で *Eulima paria* (Bartsch, 1926)が出て来たが、*maria* が *paria* に変わっただけで命名者名と命名年が異なることに違和感を覚えた。WMSDB では、原記載の *Eulima maria* A. Adams, 1861 がシノニムとして出て来て、属名と種小名が変更された *Hypermastus casta* (A. Adams, 1861)が現在の有効学名であった。この学名は WoRMS でも有効であったが、*maria* の種小名は *Leiostraca maria* A. Adams, 1861 が原記載であった。オオクリムシガイ *Balcis cumingi* (A. Adams, 1854)は、BISMaL では和名が変更され、属名・種小名の語尾・命名年が異なるオオクリムシ *Melanella cumingii* (A. Adams in H. & A. Adams, 1853)が適用されていたが、WoRMS では命名年が異なる *Melanella cumingii* (A. Adams, 1851)が適用されていた(原記載は *Eulima cumingii* A. Adams, 1851)。ユキクリムシガイ *Balcis musta* (Yokoyama, 1928)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL や WoRMS では検索不能であった。WMSDB では、この学名と同じものが出て来たが、化石種に付けられていて、現生種の学名は不明であった。

ユキノキリニナ *Turritellopsis acicula stimpsoni* Dall, 1919 に、BISMaL では *Tachyrhynchus septemcostatus* Golikov, 1986 という新種記載が適用されていたが、WoRMS では BISMaL の学名が doubtful synonym とされ、属名と種小名が異なる *Acirsa morsei* (Yokoyama, 1926)が適用されていた(この学名は WMSDB でも有効。原記載は *Turbonilla morsei* Yokoyama, 1926)。ヤマビトボラ *Tibia powisi* (Petit, 1842)は BISMaL と一致したが、WoRMS では *Tibia powisii* (Petit de la Saussaye, 1840)がシノニムで、*Rimellopsis powisii* (Petit de la Saussaye, 1840)が有効学名であった。ワタナベボラ *Tibia martinii* (Marrat, 1877)に、BISMaL では種小名の

語尾が異なる *martini* が適用されていたが、WoRMS では語尾間違いとされ、元の学名に戻っていた[この学名もシノニムで、属名が異なる *Rostellariella martinii* (Marrat, 1877)が有効とされている]。

アツキクスズメ *Sabia acuta* (Quoy & Gaimard, 1835)は肥後・後藤(1993)や BISMaL と一致したが、*Sabia acuta* で検索すると WoRMS では記録がなく、WMSDB では *Hipponix acutus* J. R. C. Quoy & J. P. Gaimard, 1835 がシノニムとして出て来て、種小名が異なる *Hipponix conicus* (H. C. F. Schumacher, 1817)が適用されていた。WoRMS では、この学名はシノニムとされ、*Sabia conica* (Schumacher, 1817)が適用されていた。BISMaL で *Sabia conica* を検索すると、キクスズメ *Sabia conica* (Schumacher, 1817)の和名・学名が別に存在した。WMSDB でシノニムとされた *Hipponix acutus* Quoy & Gaimard, 1835 は、BISMaL ではアツキクスズメ *Sabia acuta* (Quoy & Gaimard, 1835)のシノニムだが、WoRMS では *Sabia conica* (Schumacher, 1817)のシノニムであった。WoRMS の見解に従えば、アツキクスズメはキクスズメに吸収されたことになる。ヒメゴホウラ *Tricornis sinuatus* (Lightfoot, 1786)は、BISMaL では *Sinuistrobus sinuatus* (Humphrey, 1786)が有効学名であったが、WoRMS では命名者名が([Lightfoot], 1786)になっていた(原記載は *Strombus sinuatus* [Lightfoot], 1786)。スイジガイ *Harpago chiraga* (Linnaeus, 1758)は、BISMaL では *Lambis chiragra* (Linnaeus, 1758)になっていた。この学名は WoRMS と WMSDB ではシノニムとされ、*Harpago chiragra* (Linnaeus, 1758)が適用されていた(収蔵資料 DB の間違いは種小名の誤入力だけ)。

ヤイバボラ *Laminilabrum breviaxe* Kuroda & Habe in Habe, 1961 は、BISMaL では属名が異なる *Pisanianura breviaxe* Kuroda & Habe in Habe, 1961 が有効とされていたが、原記載が適用されていることに違和感を覚えた。WoRMS 検索で、原記載でない *Pisanianura breviaxis* (Kuroda & Habe, 1961)がシノニムとして出

て来て(*breviaxe* は *breviaxis* の誤入力)、*Laminilabrum breviaxe* Kuroda & Habe, 1961 が現在の有効学名であった。カゴメナワボラ *Ariadnaria insignis* (Middendorff, 1849) は、BISMaL では属名が異なる *Trichotropis insignis* Middendorff, 1849 が有効学名であった。

WoRMS では、この学名がシノニムで(命名年は 1848)、属名が元に戻った *Ariadnaria insignis* (Middendorff, 1848) が有効学名であった(収蔵資料 DB は命名年が間違っているだけ)。タマゴナワボラ *Iphinopsis kroyeri* (Philippi, 1849) は、BISMaL では *Neoiphinoe kroyeri* (Philippi, 1749) が有効とされていたが、この命名者名で 1700 年代の命名年に違和感を覚えた。WoRMS では、*Neoiphinoe kroyeri* (Philippi, 1849) が有効学名であった(収蔵資料 DB は属名が異なるだけ)。

カワチドリの和名にスズメガイの学名 *Pilosabia trigona* (Gmelin, 1791) が入力されている種 1 点は、和名を優先すべきか、学名を優先すべきか、判断が難しかった。標本に当たって調べたところ、幼貝で、毛羽毛羽がない殻の特徴からして、カワチドリ *Antisabia foliacea* (Quoy & Gaimard, 1835) を有効な和名・学名と判断した。カセンチドリ *Capulus batus* Dunker, 1882 は、BISMaL に和名がなく、*Capulus batus* に該当する種もなかった。*Capulus* で検索すると、*Capulus badius* Dunker, 1882 がシノニムとして出て来て(*batus* は *badius* の誤入力)、属名も種小名も異なる *Amathina violacea* (Angas, 1867) が有効とされていた。WoRMS で *Amathina violacea* を検索するとシノニムになっていて、属名が元に戻り、種小名の語尾が変化した *Capulus violaceus* Angas, 1867 が適用されていた。ヒラフネガイ *Ergaea walshi* (Reeve, 1859) は BISMaL ではシノニムになっていて、属名が異なる *Syphopatella walshi* (Reeve, 1859) が有効学名であった [*Crepidula walshi* (Reeve, 1859) と *Syphopatella walshi* (Reeve, 1859) もシノニムとして挙げられている]。WoRMS で属名の変遷をたどると、*Syphopatella* (incorrect subsequent spelling) から *Syphopatella* Lesson,

1831 を経て、*Crepidula* Lamarck, 1799 まで変わっていた。原記載の *Crepidula walshi* Reeve, 1859 がシノニムで、属名が異なる *Ergaea walshi* (Reeve, 1859) が現在の有効学名であった(収蔵資料 DB の学名は正しく、BISMaL が間違っていた)。

ホンクマサカ *Xenophora japonica* Kuroda & Habe, 1971 は BISMaL や WoRMS と一致したが、BISMaL では和名がホンマクサカガイになっていた(ホンマクサカガイは誤入力で、収蔵資料 DB の和名をホンクマサカガイに変更した)。コゲクマサカ *Xenophora torrida* Kuroda & Ito, 1961 と入力されている種 2 点は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS で *Xenophora torrida* を検索するとシノニムになっていて、*Xenophora cerea* (Reeve, 1845) が現在の有効学名であった。この学名を BISMaL で検索すると、シワクマサカガイ *Xenophora cerea* (Reeve, 1845) が出て来た。収蔵資料 DB にも、シワクマサカ *Xenophora cerea* (Reeve, 1845) と入力されている種 2 点が存在した。

ヒメハラダカラ *Cypraea* (*Erronea*) *hungerfordi* *hungerfordi* Sowerby, 1888 には、BISMaL では属名が変更され、命名者名が明確化された *Notadusta hungerfordi hungerfordi* (G. B. Sowerby III, 1888) が適用されていた。WoRMS では、属名が異なる *Paradusta hungerfordi* (G. B. Sowerby III, 1888) が適用されていた。アミメダカラ *Mauritia* (*Arabica*) *scurra* (Gmelin, 1791) には、BISMaL では *Mauritia scurra indica* (Gmelin, 1791) が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、亜種小名が異なる *Mauritia scurra scurra* (Gmelin, 1791) が現在の有効学名であった(この学名が亜種になっているのは、*Mauritia scurra occidua* C. P. Meyer & Lorenz, 2017 が新種記載されたから)。チドリダカラ *Pustularia cicercula lienardi* (Jousseaume, 1874) に、BISMaL では *Pustularia cicercula* (Linnaeus, 1758) が適用されていたが、WoRMS では入力されている学名とは亜種小名が異なる *Pustularia cicercula tricornis* (Jousseaume, 1874) が

適用されていた。クロシオダカラ *Cypraea* (*Palmadusta*) *contaminata* Sowerby, 1832 に、BISMaL では *Palmadusta contaminata* (G. B. Sowerby I, 1832) が適用されていたが、WoRMS では命名者名が異なる *Palmadusta contaminata* (Gray, 1832) が有効学名であった(原記載は *Cypraea contaminata* Gray, 1832)。

ハンフレータカラガイ *Cypraea humphreysi* は、WoRMS では命名者名と命名年が入った *Cypraea humphreysii* Gray, 1825 がシノニムとされていた(*humphreysi* は誤入力)。この学名から属名が変更された *Palmadusta humphreysii* (Gray, 1825) は incorrect original spelling で、種小名から *s* が取れた *Palmadusta humphreyii* (Gray, 1825) が適用されていた。ゴウシュウルリグチダカラ *Adusta walhesi continens* は BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では *Adusta* が *Erronea* に属名変更されていることが分かった。WoRMS で *Erronea walhesi* を検索すると、種小名が誤って入力されていて、*Erronea walkeri* (G. B. Sowerby I, 1832) というシノニムが出て来た。属名が異なる *Contradusta walkeri* (G. B. Sowerby I, 1832) が有効学名で、*Contradusta walkeri continens* (Iredale, 1935) という direct children の亜種が存在した。ゴマフダカラ *Palmadusta punctata* (Linnaeus, 1771) には、BISMaL では属名が異なる *Notadusta punctata punctata* (Linnaeus, 1771) が適用されていたが、WoRMS では更に属名が異なる *Ransoniella punctata punctata* (Linnaeus, 1771) が適用されていた。ジュズダマダカラ *Paulonaria beckii* (Gaskoin, 1836) は、BISMaL では属名が *Erosaria* になっていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Naria beckii* (Gaskoin, 1836) が有効学名であった。フスベダカラ *Ponda (Ponda) ventriculus* (Lamarck, 1810) は、WMSDB で *Ponda ventriculus* を検索すると、modified Genus *Ponda* to *Lyncina* と出て来て、属名が異なる *Lyncina ventriculus* (J. B. P. A. Lamarck, 1810) が適用されていた。この学名は WoRMS でも有効で、BISMaL では

キンカンダカラという和名が与えられていた。ナンヨウダカラ *Callistocypraea aurantium* (Gmelin, 1791) に BISMaL では *Lyncina aurantium* (Gmelin, 1791) が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が *Callistocypraea* に戻っていた。

リュウズタカラガイ *Paritrqna coputdraconis* は(採集地はイースター島)、どの DB にもなく、Google で和名や学名を引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。リュウズタカラガイの引用符を外して検索すると、鳥羽水族館のニセハナムルユキ(リュウズダカラ) *Cypraea caputdraconis* がヒットした。WoRMS 検索では *Cypraea caputdraconis* Melvill, 1888 がシノニムで出て来て、属名変更された *Monetaria caputdraconis* (Melvill, 1888) が有効学名であった(*coputdraconis* は誤入力。*a* が *o* になっただけでヒットしない)。*Paritrqna* の属名自体が読めないの、鈴木稔コレクションのラベルを確かめると、癖のある字体で *Ravitrona* と書いてあり、WMSDB で modified Genus *Ravitrona* to *Monetaria* と出て来た(*Ravitrona* を *Paritrqna* と読み違えた誤入力)。アカベリヘリトリ *Marginella cincta* は、WoRMS では *Marginella cincta* Kiener, 1834 がシノニムとされ、属名が変更され、種小名が語尾変化した *Prunum cinctum* (Kiener, 1834) が有効学名であった(収蔵資料 DB の盤足目 Discopoda/ウミウサギガイ科 Ovulidae とは、目名も科名も異なる新腹足目 Neogastropoda/ヘリトリガイ科 Marginellidae に所属していた)。BISMaL ではザクロガイ *Sulcerato callosa* (A. Adams & Reeve, 1850) に、属名が異なる *Proterato callosa* (Adams & Reeve, 1850) が適用されていたが、WoRMS では属名も種小名も異なる *Hespererato scabriuscula* (Gray, 1832) が適用されていた。

ウカレコボレバケボリ *Dentiovula saturnalia* Cate & Azuma, 1973 には、BISMaL や WoRMS では、和名と種小名が変更されたコボレバケボリ *Dentiovula colobica* (Azuma & C. N. Cate, 1971) が適用されていた。

収蔵資料 DB には、コボレバケボリの和名に似たコボレバケボリダカラ *Dentiovula dorsuosa* (Hinds, 1844) が入力されている。この和名は BISMAL になく、学名で検索すると、和名が異なるキンスジケボリ *Dentiovula dorsuosa* (Hinds, 1844) が出て来た。テンロケボリ *Pseudosimnia* (*Diminovula*) *punctata* (Duclos, 1831) は BISMAL ではシノニムになっていて、亜属から属へと昇格した *Diminovula punctata* (Duclos, 1831) が有効とされていたが、WoRMS では命名年が異なる *Diminovula punctata* (Duclos, 1828) が適用されていた(原記載は *Ovula punctata* Duclos, 1828)。

チシオコボレバケボリ *Dentiovula takeoi* Cate & Azuma, 1973 は BISMAL や WoRMS ではシノニムになっていて、属名と種小名が異なるハナアヤメケボリ *Crenavolva striatula* (G. B. Sowerby I, 1828) が有効な和名・学名であった。収蔵資料 DB には、トガリアヤメケボリ *Crenovolva* (*Cuspirovolva*) *cuspi* Cate, 1973 が存在し、BISMAL に従ってハナアヤメケボリ *Crenavolva striatula* (G. B. Sowerby I, 1828) へ変更した。ハガタスジマキケボリ *Crenovolva* (*Crenovolva*) *striatula trailli* (A. Adams, 1855) の和名は BISMAL になく、属名と亜種小名の誤入力で検索が困難だったが、アヤメケボリ *Crenavolva traillii* (A. Adams, 1855) の和名・学名を見つけた。WoRMS では、更に命名年が異なる *Crenavolva traillii* (A. Adams, 1856) が適用されていた。収蔵資料 DB にはアヤメケボリ *Delonovolva formosa* (A. Adams & Reeve, 1848) が存在し、学名を *Crenavolva traillii* (A. Adams, 1856) へ変更した。ツマニケボリ *Crenovolva* (*Crenovolva*) *frumentum* (Sowerby, 1828) には、BISMAL では属名と種小名が異なる *Primovula beckeri* (Sowerby III, 1874) が適用されていたが、WoRMS では更に命名年が異なる *Primovula beckeri* (Sowerby III, 1900) が適用されていた(原記載は *Amphiperas beckeri* G. B. Sowerby III, 1900)。チヂワケボリ *Prosimnia semperi boshuensis* Cate, 1973 という亜種は、BISMAL では種に吸収され、*Prosimnia semperi*

(Weinkauff, 1881) になっていた。WoRMS でシノニムの変遷をたどり、亜種から種へと昇格した *Prosimnia boshuensis* C. N. Cate, 1973 が、学名としては有効と判断した。

加藤繁富コレクションでナガレボリシラタマ *Trivirostra* (*Trivirostra*) *pellucidula* (Gaskoin, 1846) と記載されている種は、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMAL では *Trivirostra pellucidula* (Gaskoin, 1846) が適用されていたが、WoRMS では命名者名が異なる *Trivirostra pellucidula* (Reeve, 1846) が適用されていた(原記載は *Cypraea pellucidula* Reeve, 1846)。加藤繁富コレクションと鈴木稔コレクションでナガレボリシラタマ *Tanea areolata* (Récluz, 1844) と記載されている種も肥後・後藤(1993)と一致したが、ナガレボリシラタマの和名でナガレシボリダマの学名 *Tanea areolata* (Récluz, 1844) が入力されていた。タマガイ科 Naticidae に分類されているため学名優先と判断したが、標本に当たって調べたところ、加藤繁富コレクションは学名が正しく、鈴木稔コレクションは和名が正しかった。肥後・後藤(1993)の目録にナガレシボリダマの和名はなく、学名が異なるナガレボリシラタマが2ヶ所に入っている。

クチュムラサキタマガイ *Natica violacea* Sowerby, 1825 は BISMAL と同じだったが、WoRMS では属名が異なり、命名者名が明確化された *Tectonatica violacea* (G. B. Sowerby I, 1825) が有効学名であった。スミレダマガイ *Natica labrotincta* Sowerby, 1914 には、BISMAL では和名と種小名が異なるスミレダマ *Natica suffusa* Reeve, 1855 が適用されていたが、WoRMS では属名も異なる *Tectonatica suffusa* (Reeve, 1855) が有効学名であった(収蔵資料 DB で入力されている種とは別物)。ヘブライタマガイ *Natica maculata* は BISMAL に和名も学名もなかったが、WoRMS では *Natica maculata* von Salis, 1793 がシノニムとされ、属名も種小名も異なる *Naticarius hebraeus* (Martyn, 1786) が適用されていた。*Natica millepunctata*

Lamarck と学名だけ入力されている種は、WoRMS では種小名の綴りが 1 文字だけ異なる *Natica millepunctata* Lamarck, 1822 がシノニムで、*Naticarius stercusmuscarum* (Gmelin, 1791)が有効学名であった。

ハウシュノタマ *Notocochlis lurida* (Philippi, 1870)には、BISMaL では種小名が異なる *Notocochlis gualteriana* (Récluz, 1844)が適用されていたが、WoRMS では種小名の綴りが 1 文字だけ異なる *Notocochlis gualtieriana* (Récluz, 1844)が適用されていた[Natica gualteriana Récluz, 1844 は original spelling のシノニムで、原記載は *Natica gualtieriana* Récluz, 1844]。モクメダマ *Tanea zebra* Camarck, 1822 は命名者名の誤入力で、*Tanea zebra* Lamarck, 1822 というシノニムが肥後・後藤(1993)にある。BISMaL や WoRMS では、種小名が異なる *Tanea undulata* (Röding, 1798)が有効学名であった。*Tanea zebra* で検索すると、BISMaL や WoRMS に一致する分類群はなく、WMSDB の曖昧検索で *Natica zebra* J. B. P. A. Lamarck, 1822 というシノニムが見つかった。エゾタマガイ *Cryptonatica andoi* (Nomura, 1935)は、BISMaL では *Cryptonatica janthostomoides* (Kuroda & Habe, 1949)が有効とされていたが(原記載は *Tectonatica janthostomoides* Kuroda & Habe, 1949)、この学名は WoRMS ではシノニムとして消滅し、元の学名が適用されていた(原記載は *Natica andoi* Nomura, 1935)。

ハギノツユ *Tanea sagittata* (Menke, 1843)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL や WoRMS では属名と種小名が異なり、*Notocochlis cernica* (Jousseaume, 1874)が適用されていた。問題は、*Tanea sagittata* (Menke, 1843)が WoRMS に有効学名として存在していることで、学名の変遷をたどると、*Notocochlis sagittata* (Menke, 1843)がシノニムで出て来た。*Notocochlis cernica* (Jousseaume, 1874)のシノニムとして、*Notocochlis sagittata hancockae* Powell, 1971 が出来た。元々、ハギノツユとされていた種から、日本近海産のものが亜種に分けられ、現在は別々の種と

して異なる学名を持つに至ったと考えられる。

ゴマフダマ *Tectonatica tigrina* (Röding, 1798)は、BISMaL では属名が異なる *Paratectonatica tigrina* (Röding, 1798)が有効とされていた。WoRMS では、*Paratectonatica* Azuma, 1961 に *tigrina* の種小名を持つ種は存在せず、WMSDB で *Notocochlis tigrina* (P. F. Röding, 1798)が出て来た。掲載されている画像を見ると、明らかなゴマフダマであった。タマネコガイ *Eunaticina papilla lamarckiana* (Récluz, 1845)は、BISMaL では亜種から種へと昇格した *Eunaticina lamarckiana* (Récluz, 1843)が有効とされていたが、この学名(命名者名は Récluz)は WoRMS ではシノニムとされ、元の学名から命名年だけ異なる *Eunaticina papilla lamarckiana* (Récluz, 1843)が適用されていた。ホソスジタマガイ *Jectinatica filosa* は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS や WMSDB でも検索できなかった(採集地はスペインのマラガ)。Google でホソスジタマガイを検索すると、*Natica filosa* Philippi, 1845 という学名が出て来た(微小貝データベース, 2019a)。BISMaL で *Natica filosa* を検索すると、和名がなく、命名者名と命名年が異なる *Natica filosa* Reeve, 1855 がシノニムとして出て来て、*Mammilla fibrosa* (Gray, 1850)が適用されていた。WoRMS、及び WMSDB では *Natica filosa* Philippi, 1845 をシノニムとするのが *Tectonatica sagraiana* (d'Orbigny, 1842)で、*Natica filosa* Reeve, 1855 をシノニムとするのが *Mammilla fibrosa* (Gray, 1850)であることが判明した。微小貝データベース(2019a)と WMSDB の採集地情報や画像の比較、標本調査から、*Tectonatica sagraiana* (d'Orbigny, 1842)を有効学名と判断した[BISMaL に掲載されている和名なし *Mammilla fibrosa* (Gray, 1850)は、ホソスジタマガイとは別種]。オリジナルラベルには *Tectinatica filosa* と記入されていて(*Jectinatica* は誤入力)、WoRMS で改めて *Tectinatica filosa* を検索すると、*Tectonatica filosa* (Philippi, 1845)をシノニムとする *Tectonatica sagraiana* (d'Orbigny, 1842)が出て来た

(*Tectinatica* は誤入力)。ビワガイ *Ficus subintermedia* (d'Orbigny, 1852)は奥谷(2000)や BISMAL と一致したが、WoRMS では、この種の学名は「化石種のみ(fossil only)」と記述されていた。WMSDB で *Ficus subintermedia* を検索すると、*Ficus ficus subintermedia* (A. V. M. D. D'Orbigny, 1852)という亜種が出て来た。両者を同じ物と考え、WoRMS で現生種の *Ficus ficus* (Linnaeus, 1758)をビワガイに適用するのが妥当と判断した。

トウカムリ *Cassis cornutus* (Linnaeus, 1758)の4点は、BISMALやWoRMSでは種小名の語尾が異なる *Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)が有効学名であった。問題は *Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)の1点にフグリウラシマガイの和名が入力されていることで、加藤目録で確かめると、トウカムリ *Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)とフグリウラシマガイ *Cypræcassis testiculus* (Linnaeus, 1758)は、和名・学名が正確に記載されていた。目録は正しかったのに、収蔵資料 DB では間違った学名が入力されていることになる。*Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)という学名が誤入力でフグリウラシマガイの和名に残っていることと、奥谷(2000)にトウカムリ *Cassis cornutus* (Linnaeus, 1758)と記載されていることから、当時の担当者がトウカムリの種小名を *cornuta* から *cornutus* へ変更したものと推察される。

Phalium (Bezoardicella) decussatum (Linnaeus, 1758)と入力されている種4点は、WoRMS では亜属が取れた *Phalium decussatum* (Linnaeus, 1758)が有効学名であったが、2点にヌノメカズラの和名が、2点にスベリウラシマガイの和名が入力されていた。加藤目録で確かめると、スベリウラシマガイには *Phalium bisulcatum* (variety)と記載されていた。収蔵資料 DB で *Phalium bisulcatum* を検索すると、イナズマタイコガイと入力されていて、加藤目録のイナズマタイコガイには *Phalium (Casmaria) pondarosa forma turgidum* Reeve と記載されていた[WMSDB で

Casmaria pondarosa turgidum を検索すると、*Casmaria ponderosa turgida* L. A. Reeve, 1848 というシノニムと(*pondarosa* は誤入力)、*Casmaria turgida* (L. A. Reeve, 1848)が出て来た。収蔵資料 DB ではイナズマタイコガイの学名にナシガタウラシマガイと入力されていて、加藤目録のナシガタウラシマガイには *Phalium (Xenophalium) pyrum pyrum* (Lamarck, 1822)と記載されていた[WoRMS で *Phalium (Xenophalium) pyrum* を検索すると、*Phalium pyrum* (Lamarck, 1822)というシノニムが出て来て、属名が異なる *Semicassis pyrum* (Lamarck, 1822)が有効学名であった]。収蔵資料 DB ではナシガタウラシマガイの学名にアツウラシマガイと入力されていて、加藤目録のアツウラシマガイには *Phalium (Tylocassis) granulatum granulatum* (Born, 1778)と記載されていた。この学名は、収蔵資料 DB に存在しない。WoRMS で *Phalium (Tylocassis) granulatum* を検索すると、*Semicassis granulata* (Born, 1778)が有効学名として出て来た。収蔵資料 DB では、スベリウラシマガイにヌノメカズラの学名が誤入力されてから順に1個ずつ学名がズレて行き、アツウラシマガイの学名が押し出される形で消えてしまったことになる。

前述の加藤目録でスベリウラシマガイ *Phalium bisulcatum* (variety)と記載されている種は、収蔵資料 DB では *Phalium (Bezoardicella) decussatum* (Linnaeus, 1758)が誤入力されていて(ヌノメカズラの旧学名)、WoRMS では属名と種小名の語尾が異なり、命名者名と命名年が入った *Semicassis bisulcata* (Schubert & J. A. Wagner, 1829)が有効学名であった。問題は、収蔵資料 DB に学名が同じワダチウラシマ *Semicassis bisulata bisulata* (Schubert & Wagner, 1829)と入力されている亜種3点と(*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、カズウネウラシマ *Semicassis bisulcata bisulcata* (Schubert & Wagner, 1829)と入力されている亜種1点が存在することであった。加藤目録で調べると、ワダチウラシマの記載はあったが、カズウネウラシマ

はなかった(Google でカズウネウラシマを引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった)。他に入力されている、ウネウラシマ *Semicassis bisulcata japonica* (Reeve, 1848)の4点、リュウグウウネウラシマ *Semicassis bisulata japonica* (Reeve, 1848)の2点(*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、タマウラシマ *Semicassis bisulcata pila* (Reeve, 1848)の3点、ウラシマガイ *Semicassis bisulcata persimilis* Kira, 1959 の6点、アツウラシマガイ *Semicassis bisulata persimilis* Kira, 1959 の1点(*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、マメシボリウラシマ *Semicassis bisulata minor* (Küster, 1857)の2点は(頭楯目 Cephalaspidea/マメウラシマガイ科 Ringiculidae で入力されている。*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、BISMaL では和名なし *Semicassis bisulcata* (Schubert & J. A. Wagner, 1829)のシノニムとされている(WoRMS の学名を適用した。*Semicassis* 属に、これらの亜種小名が種小名に昇格した種が存在しないことを確認した)。オオシイノミガイ *Acteon sieboldi* (Reeve, 1842)には、BISMaL では種小名の語尾が異なる *Acteon sieboldii* (Reeve, 1842)が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Japonactaeon sieboldii* (Reeve, 1842)が有効学名であった。アカフキジビキガイ *Punctacteon flammeus* (Gmelin, 1791)は BISMaL と一致したが、WoRMS では記録がなく、WMSDB では *Maxacteon flammeus* (J. G. Bruguière, 1789)が出て来た。Google 検索で、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Acteon flammea* が見つかった(奥谷, 2017)。WoRMS では *Acteon flammea* [sic] (incorrect gender ending)と表示され、*Maxacteon flammeus* (Bruguière, 1789)が有効学名であった。

レンジャクガイ *Casmaria ponderosa nipponensis* Abbott, 1968 は BISMaL と一致したが、WoRMS ではシノニムとされ、亜種から種へと昇格し、種小名が異なる *Casmaria cernica* (G. B. Sowerby III, 1888)が適用されていた。クビレマツカワ *Biplex aculeata* (Schepman, 1909)には、BISMaL では和名と種小名が

異なるクビレマツカワガイ *Biplex pulchra* (G. B. Sowerby II, 1836 in G. B. Sowerby I & G. B. Sowerby II, 1832–1841)が適用されていたが、WoRMS では属名が異なり、種小名が語尾変化した *Gyrineum aculeatum* (Schepman, 1909)が適用されていた。コトリノカシラ *Biplex jacundum* (A. Adams, 1853)は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS でも記録がなかった。WMSDB では命名者名と命名年が異なる *Biplex jacundum* E. Forbes, 1852 がシノニムとされ、種小名が異なる *Biplex pulchellum* Sowerby, 1825 が適用されていた。WoRMS では *Biplex pulchella* (G. B. Sowerby I, 1825)がシノニムになっていて、属名が変更され、種小名が語尾変化した *Gyrineum pulchellum* (G. B. Sowerby I, 1825)が適用されていた。オオヘビガイ *Serpulorbis imbricatus* (Dunker, 1860)は BISMaL と一致したが、この学名は WoRMS では junior homonym (subjective synonym)とされ、属名と種小名が異なる *Thylacodes adamsii* (Mörch, 1859)が適用されていた。

トゲコナルトボラ *Bursa (Colubrellina) lolituda wolfei* Beu は、*Bursa wolfei* で検索すると、WMSDB では *Bursa latitudo wolfei* T. A. Garrard, 1961 がヒットした(*lolituda* は *latitudo* の誤入力)。WoRMS では *Bursa (Bufonariella) latitudo wolfei* Beu, 1981 がシノニムで出て来て、*Bursa latitudo* Garrard, 1961 が有効学名であった。クチグロオキニシ *Bursa (Bursa) muehlhaeuseri* Parth, 1990 は、WoRMS 検索で *Bursa muehlhaeuseri* Parth, 1990 がシノニムとして出て来て(*muehlhaeuseri* は誤入力)、種小名が異なる *Bursa lamarckii* (Deshayes, 1853)が適用されていた。BISMaL では、この学名にはクロミオキニシの和名が与えられていた。*Bursa spinosa* と学名だけ入力されている種を WoRMS 検索すると、*Bursa spinosa* (Schumacher, 1817)がシノニムで出て来て、属名と種小名が異なる *Bufonaria echinata* (Link, 1807)が有効学名であった。BISMaL では、この学名にハリミヤコボラの和名が与えられていた。ヒメヤスリミヤコボラ *Bufonaria subgranosa*

(Sowerby, 1836)は BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS では *Bufonaria rana* (Linnaeus, 1758)のシノニムとして出て来た。BISMAL では、この学名にミヤコボラの和名が与えられていた。タテヒダミヤコボラ *Bufonaria marginata* Gmelin, 1991 と、この命名者名ではあり得ない命名年が入力されている種には、WoRMS では *Aspa marginata* (Gmelin, 1791)が適用されていた。オニウネボラ *Bursina nobilis* (Reeve, 1844)に、BISMAL では *Bufonaria nobilis* (Reeve, 1844)が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、元の学名が有効であった。

柄眼目 *Stylommatophora*、及び *Assimineae* *grayana* Fleming, 1828 と入力されている種には(採集地はベルギーの Antwerpen)、和名も科名も入力されていなかったが、属名でソートを掛けると目名の異なる盤足目 *Discopoda*／カワザンショウガイ科 *Assimineidae* の 1 種 3 点と 1 亜種 1 点が検出された(カワザンショウガイ *Assiminea japonica* v. Martens, 1877 とテシオカワザンソウ *Assiminea japonica septentrionalis* Habe, 1942)。BISMAL では学名と科名は同じだったが、どちらも目名が吸腔目 *Sorbeoconcha* になっていた。WoRMS や WMSDB では *Assiminea grayana* Fleming, 1828 が適用されていたが、前述の 1 種 1 亜種を含めた目名には疑義が出ていた(Order *Littorinimorpha*: BISMAL では、吸腔目の下目になっている)。和名は見当たらない。著者協議の結果、*Littorinimorpha* 目を適用した。トウガタカワザンショウ *Angustassiminea angusta* Pilsbry, 1901 は BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS でも WMSDB でも検索できなかった。WoRMS で *Assiminea angusta* を検索すると、種小名が異なる *Assiminea angustata* Pilsbry, 1901 がシノニムとして出て来て、属名が異なる *Ansola angustata* (Pilsbry, 1901)が有効学名であった。WoRMS には属名が異なる *Barleeia angustata* (Pilsbry, 1901)がシノニムとして掲載されていて、BISMAL では、この学名にチャツボの和名が与えられている。

オオカラミミズガイ *siliquaria pohderosa* は、WoRMS の曖昧検索で *Siliquaria ponderosa* (Mörch, 1861)というシノニムが出て来て、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Tenagodus ponderosus* Mörch, 1861 が適用されていた。パイプミジンツツ *Meioceras kajiyamai* (Habe, 1963)は、BISMAL では属名が異なる *Caecum kajiyamai* (Habe, 1963)が有効とされていたが、WoRMS や WMSDB では属名が元に戻り、原記載の *Meioceras kajiyamai* Habe, 1963 が有効学名であった。ヒシレイシ *Thais* (*Thais*) *mutabilis* (Link, 1806)は、BISMAL や WoRMS では記録がなかったが、WMSDB では命名年が異なる *Thais mutabilis* J. H. F. Link, 1807 がシノニムとして出て来て、属名と種小名が異なる *Indothais lacera* (I. von Born, 1778)が適用されていた。ウスイロアクキ *Murex* (*Murex*) *scalopax* Pillmyr は、WoRMS の曖昧検索で、種小名と命名者名が異なる *Murex scolopax* Dillwyn, 1817 が出来た(命名者名の誤入力が甚だしいケース。Google でウスイロアクキを引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけで、加藤繁富コレクションなのに加藤目録にはなかった)。ヒラメヨウラクガイ *Murex* (*Eupleura*) *nitida* (Broderip, 1833)は、WoRMS では種小名が語尾変化した *Murex nitidus* Broderip, 1833 がシノニムになっていて、属名と種小名が異なる *Hexaplex radix* (Gmelin, 1791)が有効学名であった。

タイワンツブリ *Haustellum rectirostris* (Sowerby, 1841)の和名は BISMAL になかったが、学名検索で和名と属名が異なるヒメホネガイ *Vokesimurex rectirostris* (G. B. Sowerby II, 1841)が出て来た(この学名は WoRMS でも有効)。オトヒメガンゼキ *Chicoreus* (*Phyllonotus*) *laciniatus* (Sowerby, 1841)は、肥後・後藤(1993)と一致した(正確な和名は、オトヒメガンゼキ)。同じ学名でオトヒメバシヨウ *Chicoreus* (*Chicomurex*) *laciniatus* (G. B. Sowerby, 1861)と入力されている種があり、どちらも加藤繁富コレクションなのに、加藤目録にオトヒメバシヨウは見当たらなかった。

WoRMS では *Chicoreus laciniatus* (G. B. Sowerby II, 1841) がシノニムとされ、属名が異なる *Chicomurex laciniatus* (G. B. Sowerby II, 1841) が適用されていた。このことからオトヒメガンゼキ *Chicomurex laciniatus* (G. B. Sowerby II, 1841) を有効な和名・学名と判断した。ムラサキガンゼキボラ *Marchia purpureus* (Azuma, 1976) は、BISMaL や WoRMS では和名も学名も検索できず、Google でムラサキガンゼキボラを引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。WMSDB で *Marchia purpureus* を検索すると、*Raphitoma purpurea* (G. Montagu, 1803) と *Orania purpurea* (J. T. Kuroda & T. Habe, 1961) の 2 つの学名が出て来たが、どちらもムラサキガンゼキボラとは異なると思われた。WMSDB に modified Genus *Marchia* to *Pterynotus* という記述があり、WoRMS では *Pterynotus purpureus* Azuma, 1976 がシノニムになっていて、種小名が異なる *Pterynotus barclayanus* (H. Adams, 1873) が有効学名であった。収蔵資料 DB には、他にベニガンゼキ *Marchia barclayana* (H. Adams, 1874) と入力されている種があり、WoRMS 検索すると、命名年が異なる *Marchia barclayana* (H. Adams, 1873) がシノニムで出て来て、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Pterynotus barclayanus* (H. Adams, 1873) が有効学名であった(ムラサキガンゼキボラと学名は同じで、和名なし種に変更した)。

ハツキガイ *Siratu pliciferoidess pliciferoides* (Kuroda, 1942) は、BISMaL に一致する分類群情報がなかったが、*Siratu pliciferoidess* で検索すると、ハツキガイ *Siratus pliciferoides* (Kuroda, 1942) という和名・学名が出て来た(和名・属名・種小名の誤入力)。ミヨコバシ ヨウ *Marchia loebbeckei miyokoe* Kosuge, 1979 は、BISMaL や WoRMS では和名も学名もなかったが、WMSDB では *Babelomurex miyokoe* S. Kosuge, 1985 と *Timbellus miyokoe* (S. Kosuge, 1979) の 2 つの学名が出て来た。掲載されている画像と収蔵資料 DB にある画像を比較したところ、後者に相当することが

分かった。WoRMS で *Timbellus miyokoe* を検索するとシノニムになっていて、属名が異なる *Chicoreus miyokoe* (Kosuge, 1979) が適用されていた。パナマアラレツブリボラ *Muricopsis armatus* Adams, 1854 は、WMSDB では属名が変更され、命名者名が明確化された *Murexsul armatus* (C. B. Adams, 1854) が有効学名であった。WoRMS では、命名者名が異なる *Murexsul armatus* (A. Adams, 1854) が適用されていた(原記載は *Murex armatus* A. Adams, 1854)。

ツヅレヨウラク *Favartia rosamiae* d'Attilio & Hyero, 1985 は、BISMaL では、和名と命名者名が異なるローザトゲヨウラク *Favartia* (*Murexiella*) *rosamiae* D'Attilio & Myers, 1985 がシノニムとされ、和名なし *Favartia rosamiae* D'Attilio & Myers, 1985 が適用されていた(Hyero は Myers の誤入力)。ドロシーヨウラク *Favartia* (*Murexiella*) *dorothyae* Emerson & d'Attilio, 1979 は、WoRMS の曖昧検索で *Favartia dorothyae* Emerson & D'Attilio, 1979 が出て来て(*dorothyae* は *dorothyae* の誤入力)、種小名が異なる *Favartia salmonea* (Melvill & Standen, 1899) が有効学名であった。収蔵資料 DB では、この学名にニクイロヨウラクの和名があり、両種に和名なし *Favartia salmonea* (Melvill & Standen, 1899) を適用した。

ヨウラクガイ *Pteropurpura* (*Ocinebrellus*) *falcata* (Sowerby, 1840) に、BISMaL では亜種から種へと昇格し、命名者名が明確化されて命名年が異なる *Pteropurpura falcata* (G. B. Sowerby II, 1834) が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、属名が変更され、種小名が語尾変化した *Ocinebrellus falcatus* (G. B. Sowerby II, 1834) が有効学名であった。イセヨウラク *Pteropurpura* (*Ocinebrellus*) *adunca* (Sowerby, 1834) は、BISMaL では亜属が取れた学名が有効とされていたが、WoRMS ではシノニムとされ、種小名が異なる *Pteropurpura falcata* (G. B. Sowerby II, 1834) を経て、属名が変更され、種小名が語尾変化した *Ocinebrellus falcatus* (G. B. Sowerby II,

1834)が適用されていた。この学名は BISMAL ではヨウラクガイに適用されているので、イセヨウラクの和名を無効とし、ヨウラクガイ *Ocenebrellus falcatus* (G. B. Sowerby II, 1834)を有効と判断した[BISMAL ではヨウラクガイ *Pteropurpura falcata* (G. B. Sowerby II, 1834)とイセヨウラク *Pteropurpura adunca* (Sowerby, 1834)は別々の種として記載されている]。

Urosalpinx lurida (Middendorff, 1848) forma *munda* (Carpenter, 1864)と入力されている品種は、命名者名と命名年が2ヶ所にあり、初めて見る学名の書き方であった。WMSDB では、属名が異なる *Ocenebra lurida munda* P. P. Carpenter, 1864 というシノニムが出て来て、属名が変更され、亜種から種へと昇格した *Ocenebrina lurida* (A. T. von Middendorff, 1848)が適用されていた。カゴメガイ *Bedeva birileffi* (Lischke, 1871)は BISMAL と同じだったが、WoRMS ではシノニムとされ、*Bedevina birileffi* (Lischke, 1871)が適用されていた。ヒメヨウラク *Ergalatax takugawai* Kuroda & Habe in Kuroda, Habe & Oyama, 1971 とトクガワヒメヨウラク *Ergalatax tokugawai* Kuroda & Habe, 1971 は、学名が同じと思われた(*takugawai* は誤入力)。BISMAL では、ヒメヨウラク *Ergalatax contractus* (Reeve, 1846)とトクガワヒメヨウラク *Ergalatax tokugawai* Kuroda & Habe in Kuroda, Habe & Oyama, 1971 は学名が異なっていた。WoRMS や WMSDB では、*Ergalatax contracta* (Reeve, 1846)と *Ergalatax tokugawai* Kuroda & Habe, 1971 が有効学名であった(BISMAL の *contractus* は、語尾変化間違い)。

チヂミボラ *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMAL と奥谷(2000)では種小名が異なる *Nucella lima* (Gmelin, 1791)が適用されていた。ホソスジチヂミボラ *Nucella lima* (Gmelin, 1791)も肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMAL と奥谷(2000)では、*Nucella heyseana* (Dunker, 1882)の学名にもホソスジチヂミボラの和名にも一致する分類群情報はなかった。WoRMS や WMSDB

では *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)も *Nucella lima* (Gmelin, 1791)も生きていて、学名の変遷をたどると、どちらも独立して派生した種と思われた。肥後・後藤(1993)では、チヂミボラとホソスジチヂミボラの和名が入れ替わっている可能性が考えられた。収蔵資料 DB にあるチヂミボラ *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)とホソスジチヂミボラ *Nucella lima* (Gmelin, 1791)は、貝殻の形状が2種とも WoRMS や WMSDB の画像と一致したことから、学名は正しく入力されていると結論付けた。奥谷(2000)、WoRMS、及び WMSDB で *Nucella lima* (Gmelin, 1791)の画像が一致したことから、学名を優先し、和名を変更したチヂミボラ *Nucella lima* (Gmelin, 1791)と和名なし *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)を有効な和名・学名と判断した。コシタカチヂミボラ *Nucella freycineti elongata* Gorikov & Kussakin, 1962 は BISMAL に和名も学名もなかったが、WoRMS では *Nucella elongata* Golikov & Kussakin, 1974 がシノニムになっていて(*freycineti* と Gorikov は誤入力で、1962 は命名年間違い)、種小名が異なる *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)が適用されていた(この学名はチヂミボラとして入力されていたもので、和名がホソスジチヂミボラに変更された後、和名なし種に落ち着いている)。

クビレスイフガイ *Bucconia cumingii* (A. Adams, 1862)には、BISMAL では属名が異なる *Scaphander cumingii cumingii* A. Adams, 1862 が適用されていたが、WoRMS では更に属名が異なる *Philine cumingii* (A. Adams, 1862)が適用されていた(スイフガイ科 Cylichnidae からキセワタガイ科 Philinidae へ変更)。テラマチスイフガイ *Nipponoscapander teramachii* (Habe, 1954)は、BISMAL や WoRMS では属名が異なる *Scaphander teramachii* (Habe, 1954)が有効学名であった(スイフガイ科 Cylichnidae から Scaphandridae 科へ変更)。ツマベニクダタマガイ *Eocylichna braunsi* (Yokoyama, 1920)には、BISMAL では属名が異なる *Eocylichna braunsi* (Yokoyama, 1920)が適用されてい

たが、WoRMS の曖昧検索で *Eocylichna braunsi* (Yokoyama, 1920)が出て来て(*Eocylichna* は記述ミス)、属名と種小名が異なる *Cylichna biplicata* (A. Adams in Sowerby, 1850)が有効学名であった。セキヒツクダタマガイ *Eocylichna musashiensis* (Tokunga, 1906)には、BISMaL では属名が異なる *Eocylichna musashiensis* (Tokunaga, 1906)が適用されていたが(Tokunga は誤入力)、WoRMS では収蔵資料 DB と同じ属名になっていた。BISMaL に掲載されている *Eocylichna* 属 7 種は、軒並み *Eocylichna* の誤入力で、奥谷(2000)では *Eocylichna* になっている。

タマゴマメヒガイ *Rhizorus ovulinus* (A. Adamus, 1862)は、WoRMS では属名と命名年が異なり、種小名が語尾変化した *Volvulella ovulina* (A. Adams, 1850)が有効学名であった(Adamus は誤入力)。オオヤマコメツブガイ *Acteocina (Truncateocina) oyamai* Kuroda & Habe, 1954 は BISMaL では和名が異なるワタゾコメツブガイ *Truncateocina oyamai* (Kuroda & Habe in Habe, 1954)が適用されていたが、WoRMS では *Truncateocina oyamai* (Kuroda & Habe, 1954)がシノニで、*Truncateocina arata* (R. B. Watson, 1883)が適用されていた。マツシマコメツブガイ *Retusa (Decolifer) matusima* (Nomura, 1940)には *Decorifer matusimanus* (Nomura, 1939)が適用されていた(収蔵資料 DB の *Decolifer* と *matusima* は誤入力で、1940 は間違い)。

クチムラサキサンゴヤドリ *Coralliophila neritoidea* (Lamarck, 1816)に、BISMaL では命名者名と命名年が異なる和名なし *Coralliophila neritoidea* (Gmelin, 1791)が適用されていた。この学名は WoRMS で「Invalid: basionym is a junior homonym of *Murex neritoideus* Linnaeus, 1767」とされ、種小名が異なる *Coralliophila violacea* (Kiener, 1836)が有効学名であった。ウスベニサンゴヤドリ *Coralliophila amirantium* Smith, 1884 は、BISMaL では命名年が 1994 と 100 年も異なっていたが、WoRMS では *Coralliophila amirantium* E. A. Smith, 1884 が有効学名であった。スギモトサンゴヤドリ

Coralliophila clathrata (A. Adams, 1854)は、BISMaL では命名者名が滅茶苦茶で、*Coralliophila clathrata* (Adams, 1854 in H. A. Adams, 1983–58)になっていたが、WoRMS では収蔵資料 DB と同じ学名であった。クマドリカセン *Latiaxis castaneotinctus* Kosuge, 1980 は、WoRMS では *Latiaxis castaneotinctus* Kosuge, 1980 がシノニムで出て来て(*castaneotinctus* は誤入力)、*Babelomurex princeps* (Melvill, 1912)が現在の有効学名であった。ヒメエゾボラ *Neptunea (Barbitonia) arthritica* (Bernardi, 1857)は、亜属の取れた学名が BISMaL と一致したが、WoRMS では命名者名と命名年が異なり、*Neptunea arthritica* (Valenciennes, 1858)になっていた(原記載は *Fusus arthriticus* Valenciennes, 1858)。シワキキョウ *Latiaxis finchii* は、BISMaL の曖昧検索でシロキキョウニシ *Babelomurex finchii* (Fulton, 1930)と出て来て、収蔵資料 DB に同じ和名・学名を持つ種が存在した(ロをワと読み違えた?)。

タカブラ *Rapa bubiformis* Sowerby G. B. III, 1870 は奥谷(2000)と一致したが、BISMaL では種小名が異なり、命名者名が簡略化された *Rapa bulbiformis* Sowerby, 1870 が適用されていた(*bubiformis* は誤入力)。WoRMS では、命名者名が明確化された *Rapa bulbiformis* G. B. Sowerby II, 1870 が有効学名であった(二世と三世の違い)。ムロガイ *Magilus striatus* (Rüppell, 1835)は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS では *Magilus striatus* (Rüppell, 1835)がシノニムになっていて(Rüppell は誤入力)、属名が異なる *Leptoconchus striatus* Rüppell, 1835 というシノニムを経て、種小名が異なる *Leptoconchus peronii* (Lamarck, 1818)が現在の有効学名であった。カギヨウラク *P. lumaria* (Yokoyama, 1926)は、BISMaL でも WoRMS でも検索不能で、WMSDB の種小名検索に *lumaria* を入れたところ、*Ocenebra lumaria* M. Yokoyama, 1926 がヒットした。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Ocenebrellus lumarius* (Yokoyama, 1926)が有効学名であった。アワビモドキ *Concholepas perwiana* Lamarck,

1801 は種小名の(uv を w と読み間違えた)誤入力で、WoRMS では *Concholepas peruviana* Lamarck, 1801 というシノニムが出て来て、*Concholepas concholepas* (Bruguère, 1789)が有効学名であった。

ナガラメ *Haliotis* (*Sulculus*) *diversicolor gruneri* Phippi, 1848 の4点は、BISMaL になかった。WoRMS で亜種小名 *gruneri* を持つ種のシノニム状況、及び Google の引用符検索でナガラメという和名を検討した結果、亜種小名を変更し、BISMaL で有効なフクトコブシ *Haliotis diversicolor diversicolor* Reeve, 1846 への変更をおこなった。フクトコブシ *Sulculus diversicolor diversicolor* (Reeve, 1846)は他に4点あったが、これらは *Haliotis* の属名を持つ原記載の亜種への変更をおこなった。ハナヤカカンス *Bolma* (*Galeoastrea*) *erectospinosa* (Habe & Okutani, 1980)は、肥後・後藤(1993)の参考種に準拠していると思われたが、BISMaL では和名も学名も検索できなかった。WoRMS では、*Galeoastrea erectospinosa* Habe & Okutani, 1980 がシノニムとされ、*Bolma persica* (Dall, 1907)が有効学名であった。これはテンジクカンス *Bolma* (*Galeoastrea*) *percica* Dall, 1907 と同じもので、この種の和名・学名も肥後・後藤(1993)に準拠していると思われた。ここで入力されている *percica* という種小名は *persica* の誤記で、BISMaL ではテンジクカンス *Bolma persica* (Dall, 1907)と記載されている(これが現在の有効学名)。テンジクカンスとハナヤカカンスは、肥後・後藤(1993)では2つの種という認識で、その後の学名の変遷でハナヤカカンスという和名が抹消されたと考えられる。

マドモチヒメカタベ *Liotina peronii* (Kiener, 1839)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL では、この学名を持つ種の和名はリュウキュウヒメカタベに変更されている。この変更で、リュウキュウヒメカタベ *Liotina* (*Liotinaria*) *ryukyuensis* Habe, 1991 の学名をシノニムと見なし、*Liotina peronii* (Kiener, 1839)を適用した。WoRMS では、この学名もシノニムで、亜

属から属へと変更された *Liotinaria peronii* (Kiener, 1838)が適用されていた[WORMS では、*Liotina* (*Liotinaria*) *ryukyuensis* Habe, 1991 はシノニムに記載されていない]。ヒラマキヒメカタベ *Cyclostrema japonicum* Sakurai & Habe, 1977 は肥後・後藤(1993)や奥谷(2000)と一致し、WoRMS では有効であったが、BISMaL では命名者名の Sakurai が Sasaki になっていた。肥後・後藤(1993)に桜井・波部とあり、Sakurai が有効な命名者名であることを確認した。

キナノカタベ *Angaria sphaerula* (Kiener, 1839)は、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL では和名が検索できなかったが、*Angaria sphaerula* (Kiener, 1873)という学名は生きていて、キタノカタベという和名が記載されていた(命名年が1839ではなく1873になっていた)。BISMaL の学名と命名年は奥谷(2000)と一致したが、奥谷(2000)では和名がキナノカタベになっていた(この文献はBISMaLの引用元なので、キタノカタベは誤入力)。WoRMS では、この学名の命名年は1838になっていた。WoRMS にある原記載から1838を適用し、肥後・後藤(1993)に「喜納静氏(沖縄)に献名」と記載されていることから、和名をキナノカタベに統一した。

Margarites lenticula Gould, 1861 と学名だけ入力されている種は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL や WoRMS では該当する種が見つからなかった(採集地は、鹿児島県奄美群島大島笠利土浜)。WoRMS に表示される *Margarites* 属 98 種の中に、*lenticula* という種小名は見つからなかった。Google で属名と種小名の引用符検索を掛けると、収蔵資料 DB 以外に、OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018a)で同じ学名の種が出て来た。この DB に掲載されている学名の有効性には疑問が残るところから、WMSDB 検索すると、種小名が語尾変化した *Margarites lenticulus* A.A. Gould, 1861 が出て来た。著者協議の結果、*Margarites lenticulus* Gould, 1861 を有効学名と判断した。ダイオウテンガイ *Lucapina*

(*Megathura*) *cremlata* (Sowerby)は、まるでパズルのようであった。WoRMS では、*Lucapina* 属に該当する種は見つからなかった。亜属の *Megathura* で検索すると、*Megathura crenulata* (Sowerby I, 1825)という学名が見つかった。亜属から属への変更と種小名の誤入力为重なったせいで(*nu* を *m* と読み違えた?)、DB では検索不能な間違いになってしまっている。コシバテンガイ *Diodora* (*Diodora*) *yokoyamai koshibensis* Otuka, 1937 は、BISMaL では和名検索できなかったが、同じ種と思われるヨコヤマテンガイ *Diodora yokoyamai* Okutani, 1937 が存在した。WoRMS では命名者名が異なる *Diodora yokoyamai* Otuka, 1937 が適用されており、ヨコヤマテンガイ *Diodora yokoyamai* Otuka, 1937 を有効な和名・学名と判断した。オオツカテンガイ *Diodora* (*Diodora*) *suprapunicea* Otuka, 1937 は、BISMaL では *Diodora suprapunicea* Okutani, 1937 と命名者名が異なっているのに対し、WoRMS では命名者名が *Diodora suprapunicea* Otuka, 1937 になっていて、これを有効学名と判断した。

チリメンニナには、BISMaL でも WoRMS でも *Cirsotrema varicosum* (Lamarck, 1822)が適用されていたが、同じ学名にセブチリメンイトカケの和名が入力されていた。この和名は BISMaL になく、Google の引用符検索でヒットするのは収蔵資料 DB だけという、お粗末な結果であった。セブチリメンイトカケの採集地がフィリピンなので、WMSDB で *Cirsotrema varicosum* (Lamarck, 1822)の分布域を見ると、日本からフィリピンまで広域分布する種であることが判明した(WMSDB の種小名 *varicosa* は、原記載からの間違い)。このことから、どちらも同じ種と判断し、セブチリメンイトカケをチリメンニナに変更した。ハタエイトカケ *Spiniscala vigintifoliata* Masahito, Kuroda & Habe, 1971 に、WoRMS では属名と種小名が異なる *Epitonium castum* (A. Adams, 1873)が適用されていた。オケゾコイトカケ *Viciniscala okezoko* Azuma, 1962 は、WoRMS では「Secondary

homonym of *Cycloscala okezoko* Habe, 1961」になっていて、新種記載された *Epitonium profundum* Nakayama, 2000 が適用されていた。フタオビハブタエイトカケ *Fragilopalia bitaeniata* Masahito & Habe, 1976 には、BISMaL では属名が変更された *Amaea bitaeniata* (Masahito & Habe, 1976)が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、種小名が異なる *Amaea nebulodermata* (Azuma, 1972)が適用されていた。クレハガイ *Papyriscala latifasciata* (Sowerby, 1878) は、BISMaL では属名と種小名が異なる *Epitonium clementinum* (Grateloup, 1940)が有効とされていたが、WoRMS では命名年が 1840 になっていた(原記載は *Scalaria clementina* Grateloup, 1840)。マダラキリオレ *Viriola* (*Viriola*) *flammulata* (Pease, 1860)は、BISMaL や WoRMS では属名と種小名が異なる *Euthymella elegans* (Hinds, 1843)が有効学名であった。カスリキリオレ *Viriola* (*Orbitophora*) *elegans* (Hinds, 1843)は BISMaL に和名も学名もなかったが、WoRMS では *Viriola elegans* (Hinds, 1843)がシノニムとされ、マダラキリオレの学名 *Euthymella elegans* (Hinds, 1843)が適用されていた。BISMaL ではアラレキリオレ *Inella japonica* Kuroda & Kosuge, 1963 に原記載が適用されなかったが[*Inella japonica* (Kuroda & Kosuge, 1963)]、WoRMS と WMSDB では命名者名が異なる *Inella japonica* Kuroda & Habe, 1963 が適用されていた。

ケシマツムシ *Zafra sinensis* (Sowerby, 1894)は BISMaL と一致したが WoRMS になく、WMSDB では命名者名が明確化されていても古い属名の *Anachis sinensis* (G. B. II Sowerby, 1894)が出て来た。微小貝データベース(2019b)に「ハハジマノミニナに合併」という記述があり、ハハジマノミニナ *Zafra hahajimana* (Pilsbry, 1904)も BISMaL と収蔵資料 DB (*hahajimama* と誤入力)に出て来た(WoRMS で有効)。BISMaL では有効でも WoRMS では消えていることから、ケシマツムシ *Zafra sinensis* (Sowerby, 1894)をハハジマノミニナ *Zafra hahajimana* (Pilsbry, 1904)に変

更した。ホソシワノミニナ *Zafra nanisca* (Hervier, 1899)には、BISMaL では種小名が異なる *Zafra peasei* (Martens & Langkavel, 1871)が適用されていたが、WoRMS では属名も異なる *Seminella peasei* (Martens & Langkavel, 1871)が有効学名であった。ウネナシノミニナ *Zafra dautzenbergi* (Hervier, 1899)には、BISMaL では種小名が異なる、原記載のウネナシノイニア *Zafra polita* G. Nevill & H. Nevill, 1875が適用されていたが(ウネナシノイニアは、ウネナシノミニナの誤入力)、WoRMS では属名も異なる *Ascalista polita* (G. Nevill & H. Nevill, 1875)が有効学名であった。

サメハダムギガイ *Zafrona lifuana* (Hervier, 1899)は BISMaL と一致したが、WoRMS に掲載情報がなく、WMSDB の曖昧検索で原記載の *Columbella lifouana* R. P. J. Hervier, 1899 がシノニムで出て来て(*lifouana* は誤入力)、*Zafrona striatula* (R. W. Dunker, 1871)が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。アラレガイ *Niotha variegata* (A. Adams, 1852)は BISMaL や WoRMS に和名も学名もなかったが、WMSDB では属名が異なる *Nassa variegata* A. Adams, 1852 がシノニムで出て来て、属名も種小名も異なる *Nassarius conoidalis* (G. P. Deshayes, 1832)が現在の有効学名であった(この学名は WoRMS や BISMaL でも有効)。リュウキュウムシロ *Zeuxis margaritifer* (Dunker, 1847)は BISMaL ではシノニムとされ、属名と種小名の語尾が異なる *Nassarius margaritiferus* (Dunker, 1847)が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、種小名の語尾が異なる *Nassarius margaritifer* (Dunker, 1847)が有効学名であった。ホソムシロ *Allonassa eximius* (H. Adamus, 1872)は、WoRMS の曖昧検索で *Allanassa eximia* (H. Adams, 1872)がシノニムで出て来て(*Allonassa* と *Adamus* は誤入力で、*eximius* は語尾変化の違い)、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Nassarius eximius* (H. Adams, 1872)が有効学名であった。

隣り合わせで入っているカミオボラ *Volutopsius*

middendorffi (Dall, 1891)とチャイロカミオボラ *Volutopsion castaneus* (Mörch, 1858)は、属名の語尾が異なっていた。BISMaL や WoRMS で前者は有効であったが、BISMaL では後者に属名の語尾が異なる *Volutopsius castaneus* (Mörch, 1858)が適用されていた。この属名は WoRMS ではシノニムになっていて、属名はそのまま種小名の語尾が異なる *Volutopsion castaneum* (Mörch, 1858)が適用されていた。タテゴトナシボラ *Pyrolofusus deformis harpa* (Mörch, 1858)は、BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB の曖昧検索で *Pyrolofusus deformis harpa* O. A. L. Mörch, 1857 がシノニムとして出て来た(*Pyrolofusus* と *Mörch* は誤入力)。WMSDB では亜種から種へと昇格した *Pyrolofusus harpa* (O. A. L. Mörch, 1857)が適用されていたが、WoRMS では命名年が 1858 になっていた。チビイトマキツムバイ *Colus* (*Aulacofusus*) sp.の和名を Google 検索すると、新種記載された *Calagrassor analogus* Fraussen, Chino & Stahlschmidt, 2017 が出来た(微小貝データベース, 2019c: WoRMS でも有効)。サフランツムバイ *Plicifusus croceus* (Dall, 1907)の和名は BISMaL になく、Google の引用符検索でヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。学名で検索すると、BISMaL ではサフランシワバイの和名が与えられていた。加藤目録にサフランツムバイの記述が見られるので、ここでの記述ミスと断言できる。ミドリツムバイ *Habevolutopsius verkruzeni* (Kobelt, 1876)は BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB の曖昧検索で *Buccinum verkruzeni* W. Kobelt, 1882 が出来たが、貝殻の形状が異なっていた。奥谷(2000)にミドリツムバイ *Fusivolutopsius verkruzeni* (Kobelt, 1876)とあり、この学名で検索可能な DB はなかったが、Google 検索で Hasegawa (2009)がヒットし、Midori-tsumu-bai は *Plicifusus aurantius* (Dall, 1907)に変更されていた。この学名に BISMaL ではニクイロツムバイの和名が付いていたが、BISMaL や WoRMS ではシノニムになっていて、種小名が異な

る *Plicifusus rhyssus* (Dall, 1907)が適用されていた (WMSDB でも有効)。BISMaL では、この学名にネジケシワバイの和名が与えられているが、ミドリツムバイはシノニムに掲載されておらず、今回が初めての指摘になる可能性が高い。

ロヂウムバイ *Buccinum elatia rhodium* Dall, 1919 は BISMaL では和名検索できず、学名検索でロジウムバイ *Buccinum rhodium* Dall, 1919 が出て来た。WoRMS では、種小名が異なる *Buccinum scalariforme* Møller, 1842 が有効学名であった。収蔵資料 DB にはチヂワエゾバイ *Buccinum elatior elatior* (Middendorff, 1849)とチリメンエゾバイ *Buccinum scalariformis* Beck in Müller, 1842 が存在し、両者の学名にも *Buccinum scalariforme* Møller, 1842 が適用されていた。チヂワエゾバイもチリメンエゾバイも BISMaL になく、ロジウムバイ *Buccinum scalariforme* Møller, 1842 を有効な和名・学名と判断した。アデヤイカエゾバイ *Buccinum concinnum* Tiba, 1980 は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS で「Invalid: junior homonym of *Buccinum concinnum* Dillwyn, 1817, and *B. concinnum* C. B. Adams, 1848; *Buccinum boucheti* is a replacement name」と出て来て、*Buccinum kashimanum* Okutani, 1964 が有効学名であった (BISMaL では、カシマナダバイの和名が与えられていた)。ツバイ *Buccinum tsubai* Kuroda in Teramachi, 1933 は BISMaL と一致したが、WoRMS と WMSDB では命名者名が異なっていた (*Buccinum tsubai* Kuroda & Kikuchi, 1933)。ヒメシライトマキ *Buccinum nipponense* Dall, 1907 は種小名の誤入力で、BISMaL や WoRMS では *niponense* が正しい綴りであった。

エゾイソナ *Searlesia fuscolabiata* (Smith, 1874) は BISMaL では和名が追加され、種小名が異なるトバソイソナ／エゾイソナ *Searlesia modesta* (Gould, 1860) が有効とされていた。この学名は WoRMS になく、WMSDB ではシノニムとされ、属名も種小名も異なる *Lirabuccinum fuscolabiatum* (E. A. Smith, 1875)

が有効とされていた (WoRMS でも有効)。クマモスソガイ *Volutharpa ainos* Kuroda & Kinoshita, 1956 は BISMaL と一致したが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、種から亜種へと降格した *Volutharpa perryi ainos* Kuroda & Kinoshita, 1956 が適用されていた。オニニシ *Hemifusus crassicaudus* (Philippi, 1848) は、BISMaL では *Hemifusus crassicaudus* (Philippi, 1848) がシノニムで (*crassicaudus* は *crassicaudus* の誤入力)、種小名が異なる *Hemifusus crassicauda* (Philippi, 1848) が適用されていた。WoRMS では *Hemifusus crassicaudus* [sic] (misspelling) と表示され、種小名の語尾と命名年が異なる *Hemifusus crassicauda* (Philippi, 1849) が有効学名であった (BISMaL の *crassicauda* も誤入力?)。

コウシフタマンジ *Turritomella candida* (Yokoyama, 1926) は肥後・後藤 (1993) と一致した。奥谷 (2000) と BISMaL では、属名が変更された *Oenopota candida* (Yokoyama, 1926) の学名にサドフタマンジの和名が記載され、コウシフタマンジの和名に *Propebela exquisita* Bartsch, 1941 の学名が記載されていた (両種の学名は WoRMS でも有効)。収蔵資料 DB にサドフタマンジの和名はなく、コウシフタマンジ *Propebela exquisita* Bartsch, 1941 を有効な和名・学名と判断した。ニクイロマンジ (学名未入力) は BISMaL になく、鹿間 (1964) にニクイロマンジ *Obesostoma schantarica* Middendorff の記述があった。WoRMS では *Obesotoma schantarica* (Middendorff, 1849) がシノニムになっていて (*Obesostoma* は *Obesotoma* の誤入力)、*Oenopota schantaricum* (Middendorff, 1849) が適用されていた。収蔵されている標本で再同定をおこなったところ、殻の形状と縦肋の細かさ、及び千葉県銚子市という採集地情報から、ヌノメフタマンジ *Curtitoma violacea* (Mighels & C. B. Adams, 1842) という種が、標本に一番近いと判断した (和名は BISMaL に、命名者名 C. B. Adams を含む学名は WoRMS に従った)。

オニアサリ *Protothaca* (*Notochione*) *jedoensis* (Lischke, 1874) の学名と同じと思われる、ヌノメアサ

リ *Protothaca jedomensis* (Lischke, 1874)が入力されていた。BISMaL では、オニアサリには*Protothaca jedomensis* (Lischke, 1874)が適用され(ヌノメアサリと入力されている種と同じ学名)、ヌノメアサリには別の学名 *Protothaca euglypta* (Sowerby, 1914)が適用されていた[標本の形状が異なるので、ヌノメアサリ *Protothaca jedomensis* (Lischke, 1874)は学名の誤入力と判断した]。WoRMS では、更に属名が異なる *Leukoma jedomensis* (Lischke, 1874)と、命名者名が明確化された *Leukoma euglypta* (G. B. Sowerby III, 1914)が、それぞれ適用されていた。*Zeuxis olivaceus* (Bruguière, 1789)と入力されている学名 2 点には、クリイロムシロ 1 点とクリイロヨウバイ 1 点の 2 つの和名が入力されていた。後者の和名は、一般的にクリイロヨウバイが使用されている。前者は肥後・後藤(1993)と奥谷(2000)で使用され、後者は菱田(2000)で使用されていた。BISMaL では属名が異なる *Nassarius olivaceus* (Bruguière, 1789)が有効で、クリイロムシロ/クリイロヨウバイの 2 つの和名が併記されていた(命名者名に Bruguière と Bruguière の違いはあるが、S-Net/GBIF への登録では Bruguiere)。

Lienardia roseotincta (Montrouzier, 1872)と *Lienardia* (*Lienardia*) *roseotincta* (Montriuzier, 1872)は、命名者名の綴りは微妙に違うが同じ学名で、それぞれバライロアラボリクチキレツブとバライロフタナシヤジクの和名が入力されていた。BISMaL や WoRMS では、バライロフタナシヤジク *Lienardia roseotincta* (Montrouzier in Souverbie & Montrouzier, 1872)が適用されていた(BISMaL にバライロアラボリクチキレツブの和名はなかったが、Google の引用符検索を掛けると多数ヒットし、この和名はバライロフタナシヤジクの別名であった)。WMSDB に従い、バライロフタナシヤジク *Lienardia roseotincta* (Montrouzier, 1872)を有効な和名・学名と判断した。

Dosinorbis (*Phacosoma*) *pubescens* (Philippi, 1847)という学名を持つ種 2 点には、ヒメカガミとタマカガミ

ミの 2 つの和名が入力されていた。BISMaL では、ヒメカガミという和名は存在しなかったが(採集地は愛知県安楽沖)、タマカガミ *Dosinia subalata* E. A. Smith, 1916 は存在した。WoRMS によると、*Dosinorbis* から *Dosinia* への属名変更がなされていて、この属に *Dosinia pubescens* (Philippi, 1847)という学名を見つけた。この学名は WMSDB にも存在し、ヒメカガミと同じ愛知県が分布域になっていた。*Dosinia pubescens* で Google の引用符検索をかけると、ヒメカガミがヒットした(微小貝データベース, 2018a)。収蔵資料 DB ではヒメカガミの学名でタマカガミの和名が入力されていたことになり、ヒメカガミ *Dosinia pubescens* (Philippi, 1847)とタマカガミ *Dosinia subalata* E. A. Smith, 1916 を有効な和名・学名と判断した。

オオアシヤガイ *Granata sulcifera* Lamarck, 1820 の学名は、BISMaL では原記載の *Granata sulcifera* Lamarck, 1822 が出て来て、単なる命名年の間違いかと思われたが、WoRMS では *Granata sulcifera* (Lamarck, 1822)となっていた。WoRMS では原記載が *Stomatella sulcifera* Lamarck, 1822 になっていて、属名が *Stomatella* から *Granata* へと移行していることから、*Granata sulcifera* (Lamarck, 1822)を有効学名と判断した。ヒラコマ *Calliostoma haliarchus* (Melvill, 1889)は BISMaL と同じだったが、WoRMS では属名が異なる *Tristichotrochus haliarchus* (Melvill, 1889)が適用されていた。キキョウウラウズガイ *Astraea* (*Bellastraea*) *kesteveni* (Iredale, 1924)は、WoRMS に *Bellastraea kesteveni* Iredale, 1924 というシノニムが見つかり、現在は種小名も変更された *Bellastraea squamifera* (Koch, 1844)が有効学名とされている。マツムシガイ *Pyrene* (*Testudinaria*) *tylerae* (Griffith & Pigeon, 1834)は、BISMaL では亜属として入力されている *Testudinaria* が種小名になっていて、属名が異なり、亜種から種へと昇格した、和名なし *Pardalinops testudinaria* (Link, 1807)が現在の有効学名であった。

変わった間違いとしては、ヒトハサンゴヤドリと

いう和名が入力されている種の命名年が複数年に股がって記載されていることで[*Quoyula madreporara* (Sowerby, 1820–24)], これは肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL や WoRMS では、種小名が語尾変化した *Quoyula madreporarum* (Sowerby, 1832)がシノニムとされ、属名も種小名も変更された *Coralliophila monodonta* (Blainville, 1832)が有効学名であった。いずれにしても、収蔵資料 DB の学名は種小名の語尾が女性形になっていて、しかも命名年が分類学では余り見ない書き方であった。奥谷(2000)では、ヒトハサンゴヤドリの学名が *Coralliophila madreporaria* (Sowerby, 1820–24)になっていた。マルフトコロ *Euplica turturina* Duclos, 1835 には、BISMaL では命名者名と命名年が異なる *Euplica turturina* (Lamarck, 1822 in 1815–22)が適用されていたが、WoRMS では *Euplica turturina* (Lamarck, 1822)になっていた(原記載は *Colombella turturina* Lamarck, 1822)。ムシエビ *Pyrene flava* (Bruguière, 1789 in 1789–1816)も BISMaL と一致し、WoRMS では「in 1789–1816」が除外されていた(原記載は *Buccinum flavum* Bruguière, 1789)。カムログイ *Sundamitrella impolita* (Sowerby, G. B. III, 1844 in 1842–87)は、WMSDB では属名と命名者名が異なる *Mitrella impolita* (G. B. II Sowerby, 1844)が適用されていたが、WoRMS では *Mitrella impolita* (G. B. Sowerby I, 1844)が有効学名であった(原記載は *Columbella impolita* G. B. Sowerby I, 1844 で、二世でも三世でもなかった)。

カンムリエビス *Turbo coronatus* Gmelin, 1791 の和名は BISMaL になく、BISMaL や WoRMS の学名検索で *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)のシノニムとして出て来た(BISMaL ではカンギクの和名が与えられている)。収蔵資料 DB に、カンギク *Lunella coronata granurata* (Gmelin, 1791)と入力されている亜種が見つかった。そのため、著者らは当初、原記載のカンムリエビス *Turbo coronatus* Gmelin, 1791 から和名と属名が変更され、種小名の語尾が変化して、カンギ

ク *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)になったと考えた。しかし、カンギクの採集地が奄美大島・沖縄になっているのに対し、カンムリエビスの採集地は Masirah Is., Oman になっていて、そのため日本近海産を対象とする BISMaL に和名がないのだろうとも考えた。収蔵資料 DB では、外国産カンムリエビスの和名にカンギクの学名 *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)を付けていて、そもそもの学名が間違っている可能性が残されていた。WMSDB で *Lunella coronata* の分布域を見ると、ヨーロッパからアフリカ・中東を経てアジアまで広範囲に生息していた(Japan も Oman も DB に記録あり)。以上の結果から、カンムリエビス *Turbo coronatus* Gmelin, 1791 と入力されている種は和名も学名も消え、現在はカンギク *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)が有効な種であると結論付けた。

フクレギンエビス *Ginebis convexiuscula tosana* Shikama, 1962 は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL では種小名と亜種小名が変更され、*Ginebis argenteonitens convexiuscula* (Yokoyama, 1920)になっていた。WoRMS で *Ginebis* 属の種や亜種を調べると、*Ginebis convexiuscula* (Yokoyama, 1920)がシノニムとして出て来て、現在は *Ginebis argenteonitens* (Lischke, 1872)が有効学名であった。この学名のシノニムとして *Lischkeia convexiuscula tosana* Shikama, 1962 が存在し、これは収蔵資料 DB の学名から属名だけ変更されたものであった。肥後・後藤(1993)では学名の整理をしている形跡が見られることから、本来なら原記載の *Lischkeia convexiuscula tosana* Shikama, 1962 とすべきところを、属名だけ *Ginebis* に変更してしまったのだろうと推測される。ヒラセギンエビス *Ginebis argenteonitens hirasei* Is. Taki & Otsuka, 1943 も、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL では和名も学名も有効だったが、WoRMS 検索ではヒットせず、*Ginebis argenteonitens* (Lischke, 1872)のシノニムとして *Turricula argenteonitens hirasei* Taki & Otsuka, 1943 が見つかった。これも肥後・後藤(1993)が、原記載の属名

Turricula を *Ginebis* に変え、ヒラセギンエビス *Ginebis argenteonitens hirasei* Is. Taki & Otsuka, 1943 と原記載偽装したものと推測される。ギンエビス *Ginebis argenteonitens argenteonitens* (Lischke, 1872)、フクレギンエビス *Ginebis convexuscula tosana* Shikama, 1962、及びヒラセギンエビス *Ginebis argenteonitens hirasei* Is. Taki & Otsuka, 1943 と入力されている亜種を、独立種のギンエビス *Ginebis argenteonitens* (Lischke, 1872)に変更した。

Bolma guttata caledonicus と入力されている亜種の学名や和名ニューカレドニアカンスが Google の引用符検索でヒットするのは、収蔵資料 DB と加藤目録の 2 件だけであった(この 2 つは、基本的に同じものである)。BISMaL では、キンウチカンス *Bolma guttata* (A. Adams, 1864)という種が、カンスガイ類のオリジナルとされている(WoRMS の原記載では、命名年が 1863)。WoRMS では、この種の亜種がシノニムになった 2 つの独立種の学名[*Bolma bathyraphis* (E. A. Smith, 1899); *Bolma millegranosa* (Kuroda & Habe in Habe, 1958)]が他に挙げられている。BISMaL では前者に和名はなく、後者はカンスガイになっていた(命名者名を Kuroda & Habe, 1958 に明確化)。*Bolma bathyraphis* で Google 検索を掛けると、ナンヨウカンス(仮称) *Bolma guttata bathyraphis* E. A. Smith, 1899 と記載されている亜種が見つかった(微小貝データベース, 2018b)。この亜種はニューカレドニア原産で、カンスガイのニューカレドニア型と考えられることから、ナンヨウカンス(仮称) *Bolma bathyraphis* (E. A. Smith, 1899)を有効な和名・学名と判断した。

ヤセリンボウ *Guildfordia yokadelicata* Habe & Okutani, 1983 は、BISMaL でも WoRMS でも学名が検索できなかった。WoRMS で表示される *Guildfordia* 属に、この学名に近い学名 *Guildfordia delicata* Habe & Okutani, 1983 がシノニムとして見つかり、有効学名は *Guildfordia yoka* Jousseume, 1899 になっていた。この学名には *Guildfordia yoka delicata* Habe & Okutani,

1983 という、シノニムとしての亜種が存在していた。収蔵資料 DB では、種小名 *yoka* と亜種小名 *delicata* が連続して入力されているため、ひとつの種小名 *yokadelicata* として取り扱われていたことが、検索に引っ掛からない原因であった。*Guildfordia yoka* Jousseume, 1899 という学名は BISMaL にも存在し、ハリナガリンボウという和名が与えられている(BISMaL では、この種の命名年は 1888 になっているが、WoRMS の原記載によると、1899 が正しい命名年である)。以上の結果から、ヤセリンボウ *Guildfordia yokadelicata* Habe & Okutani, 1983 と入力されている種(実際は亜種)をハリナガリンボウ *Guildfordia yoka* Jousseume, 1899 に変更した。

アカマダロサンショウガイモドキ *Tallorbis roseolus* G & H. Nevil, 1868 は、BISMaL に和名も学名も見当たらず、WoRMS に *Tallorbis roseola* G. Nevill & H. Nevill, 1869 が見つかった。アカマダロサンショウガイモドキを Google の引用符検索に掛けると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけという、お決まりのパターンであった。アカマダロという響きに違和感を覚え、アカマダラサンショウガイモドキを Google の引用符検索に掛けると、加藤目録だけがヒットした。この目録は基本的に収蔵資料 DB と同じものなので、アカマダロサンショウガイモドキは担当者による誤入力であることが確定した。他に和名は見当たらず、アカマダロサンショウガイモドキ *Tallorbis roseolus* G & H. Nevil, 1868 を、和名なし *Tallorbis roseola* G. Nevill & H. Nevill, 1869 に変更した。

ベニバイ *Eotricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)を BISMaL で和名検索すると、*Tricolia variabilis* (Pease, 1860)という別の学名が出て来た。前者は肥後・後藤(1993)と、後者は奥谷(2000)と一致した。著者らは当初、属名も種小名も変更されたと考えたが、BISMaL では和名のない *Tricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)が生きていた。和名優先なら前者の学名が正しく、学名優先なら後者の学名が正しいことになる。WoRMS

検索を掛けると、*Tricolia variabilis* (Pease, 1861)が、現在の有効学名 *Hiloe variabilis* (Pease, 1861)のシノニムとして出て来た(原記載の命名年は 1860 ではなく 1861)。WoRMS では *Tricolia* 属(87 matching records)に *Tricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)という学名はなく、*Eotricolia* という属名もなかった。以上の結果から、ベニバイ *Eotricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)の学名を変更し、ベニバイ *Hiloe variabilis* (Pease, 1861)を有効な和名・学名と結論付けた。コシタカベニバイ *Eotricolia oligomphala* (Pilsbry, 1895)を BISMAL で検索したが、和名も学名も見つからなかった。この学名は WoRMS にもなかったが、*Tricolia oligomphala* (Pilsbry, 1895)が *Tricolia variabilis* (Pease, 1861)のシノニムとして出て来た。現在はベニバイと同じ学名 *Hiloe variabilis* (Pease, 1861)がコシタカベニバイに与えられ、コシタカベニバイの和名が消えていることになる[奥谷(2000)では「ベニバイとコシタカベニバイは同じ種で、前者がオス、後者がメスの性的二型の関係にある」と説明されている]。

ホタルガイ *Olivella japonica* Pilsbry, 1895 は BISMAL と一致したが、WoRMS では *Olivella japonica* Pilsbry, 1910 がシノニムとされ(原記載は *Olivella fortunei* var. *japonica* Pilsbry, 1910)、種小名が異なる *Olivella mandarina* (Duclos, 1835)が適用されていた。ハナアヤメ *Olivella signata* Lischke, 1869 (マクラガイ科 Olividae)に関しては、BISMAL でハナアヤメを検索すると和名も学名もヒットせず、別の科のハナアヤメケボリ *Crenavolva striatula* (Sowerby I, 1828) (ウミウサギガイ科 Ovulidae)が出て来てしまう[肥後・後藤(1993)には両方ある]。WoRMS や WMSDB では、*Olivella signata* (Lischke, 1869)も *Crenavolva striatula* (G. B. Sowerby I, 1828)も有効学名であった。標本に当たって調べたところ、マクラガイ科の貝殻で、このことから和名なし(旧ハナアヤメ) *Olivella signata* (Lischke, 1869)を有効な和名・学名と結論付けた。ホザキリュウグウボタル *Ancillus apicalis* Kira, 1959 に

は、BISMAL では命名者名と命名年が異なる原記載 *Ancillus apicalis* Ninomiya, 1988 が適用されていた。WoRMS では、属名が変更された *Turrancilla apicalis* (Ninomiya, 1988)が有効学名であった。

ルリグチマクラ *Oliva* (*Neocylindrus*) *tessellata* Lamarck, 1811 は BISMAL ではルチグリマクラ *Oliva tessellate* Lamarck, 1811 と記載され(*tessellata* とルチグリマクラは誤入力)、WoRMS では種小名が異なる *Oliva guttata* Fischer von Waldheim, 1808 が適用されていた。学名が同じと思われる、サツマビナ *Oliva annulata* Gmelin, 1798、及びニクイロマクラガイ *Oliva* (*Neocylindrus*) *annulata* (Gmelin, 1791)と入力されている種がある[ニクイロマクラの和名は肥後・後藤(1993)にある]。奥谷(2000)と BISMAL ではサツマビナ *Oliva annulata* Gmelin, 1789 が適用されていたが、WoRMS では命名年が異なる *Oliva annulata* (Gmelin, 1791)が有効学名であった(原記載は *Voluta annulata* Gmelin, 1791)。収蔵資料 DB にサワビナ *Oliva* (*Annulatoliva*) *annulata* forma *carnicolor* Dautzenberg, 1927 と入力されている品種があり(Dautzenberg は t が全角入力)、これも肥後・後藤(1993)と一致することから、サツマビナ *Oliva annulata* Gmelin, 1789 を適用した。オオヒナマクラ *Oliva* (*Galeola*) *carneola iricfroma* Dautzenberg, 1927 はパズルのようで、*Oliva carneola iricfroma* では、どの DB でも検索不能であった(Google 検索では収蔵資料 DB のみヒットした)。WMSDB で、属名 *Oliva* と命名者名 Dautzenberg を入れて検索すると、一番近い亜種小名を持つのは *Oliva carneola trichroma* P. Dautzenberg, 1927 であった(*iricfroma* は加藤目録の誤入力。*trichroma* と比較すると、t が i に、h が f に変わっただけの誤入力で、まるで異なる単語に変わっていた)。収蔵資料 DB の画像と比較した結果は、*Oliva carneola trichroma* Dautzenberg, 1927 と同じ物であった。サラサマクラ *Oliva* (*Acutoliva*) *duclosi lentiginosa* Reeve, 1850 は、BISMAL や WoRMS では検索不能で、WMSDB では

種小名が異なる *Oliva jaspidea lentiginosa* L. A. Reeve, 1850 が出て来た。WoRMS では *Oliva jaspidea* Duclos, 1835 も *Oliva lentiginosa* Reeve, 1850 もシノニムになっていて、*Oliva esiodina* Duclos, 1844 が有効学名であった(前者のシノニムには「invalid: junior secondary homonym of *Voluta jaspidea* Gmelin, 1791; *Oliva duclosi* is a replacement name」とある)。

Mitra (Subcancilla) subcata Swainson & Sowerby, 1825 と学名だけ入力されている種は種小名と命名者名の誤入力で、WoRMS では *Mitra sulcata* Swainson, 1825 がシノニムとされ、亜属から属に格上げされた *Subcancilla sulcata* (Swainson, 1825) が有効学名であった。シロフヤタテ *Phaeomitra fasciolaris* (Deshayes in Laborde & Linat, 1834) には、BISMaL では属名が異なる原記載 *Mitra fasciolaris* Deshayes in Laborde & Linat, 1834 が適用されていたが、WoRMS では属名が変更され、命名者名が明確化された *Strigatella fasciolaris* (Deshayes, 1834) が有効学名であった。クリイロフデガイ *Phaeomitra coffea* (Schbert & Wagner, 1829) には、奥谷(2000)と BISMaL ではクリイロフデ *Mitra coffea* Schbert & Wagner, 1829 が適用されていたが(Schbert は Schubert の誤入力)、WoRMS では属名が変更され、命名者名が明確化された *Strigatella coffea* (Schubert & J. A. Wagner, 1829) が有効学名であった。チュウカフデ *Vicimitra chinensis* Griffith & Pidgeon, 1834 には、BISMaL では *Mitra chinensis* Griffith & Pidgeon, 1834 が適用されていたが、WoRMS では属名と命名者名が異なる *Isara chinensis* (Gray, 1834) が有効学名であった(原記載は *Mitra chinensis* Gray in Griffith & Pidgeon, 1834)。ベッコウフデ *Nebularia ferruginea* (Lamarck, 1811) は BISMaL ではシノニムになっていて、属名が異なる原記載 *Mitra ferruginea* Lamarck, 1811 が適用されていたが、WoRMS では収蔵資料 DB と有効学名が同じであった(BISMaL の原記載をシノニムにしている)。キイロフデ *Strigatella impressa* (Antor, 1939) は、WMSDB では *Strigatella impressa* H. E.

Anton, 1839 がシノニムで(Antor は誤入力)、種小名が異なる *Strigatella pellisserpentis* L. A. Reeve, 1844 が適用されていた。WoRMS では *Strigatella pellisserpentis* (Reeve, 1844) がシノニムで、属名が異なる *Nebularia pellisserpentis* (Reeve, 1844) が有効学名であった。

ズングリチョウチンフデ *Imbricaria dactyloidea* Anton, 1834 は、BISMaL や WoRMS では和名も学名も検索できず、WMSDB で命名年が異なる *Imbricaria dactyloidea* H. E. Anton, 1838 がシノニムで出て来て、*Imbricaria olivaeformis* W. J. Swainson, 1821 が適用されていた。収蔵資料 DB にマクラフデ *Imbricaria olivaeformis* (Swainson, 1821) があり、これは BISMaL と一致した。WoRMS では、この学名がシノニムとされ、属名が異なる *Scabricola olivaeformis* (Swainson, 1821) が有効学名であった。これら 2 つの種をマクラフデ *Scabricola olivaeformis* (Swainson, 1821) に変更した。ヤグラフデ *Scabricola yagurai* (Kira, 1959) には、BISMaL では種小名が異なる *Scabricola interlirata* (Reeve, 1844) が適用されていたが、WoRMS では属名も異なる *Imbricaria interlirata* (Reeve, 1844) が適用されていた。コガシラフデ *Subcancilla annulata* (Reeve, 1844) は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Imbricaria annulata* (Reeve, 1844) が有効学名であった(BISMaL では、コガラシフデが有効和名)。

ベニオトメフデガイの採集地は伊豆大島だったが、和名は BISMaL になく、*Mitropifex* 属から変更された *Vexillum* 属にも *subguablrafus* の種小名はなかった(Google で *Mitropifex subguablrafus* を引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった)。WoRMS でも *Vexillum* 属に含まれる 816 matching records に *subguablrafus* の種小名は見つからず、最も似ている種小名の学名は *Vexillum subquadratum* (G. B. Sowerby II, 1874) であった。*Vexillum subquadratum* で Google の引用符検索を掛けたが、和名は見当たらなかった。この種の分布域は「紅海から熱帯インド太平洋を経てポリネシアとハワイまで(from the Red

Sea through the tropical Indo-Pacific to Polynesia and Hawaii)」という記述があり(Cernohorsky, 1965)、採集地の伊豆大島が分布域に含まれるのかどうか定かではなかったが、WMSDBにJapanの記録が存在した。これらの結果から、ベニオトメフデガイ *Mitropifex subguabrafus* の学名を *Vexillum subquadratum* (G. B. Sowerby II, 1874)に変更した。

カノコミノムシガイ *Vexillum sanguisugum* やカノコシボリミノムシ *Vexillum sanguisuga* (Linnaeus, 1758) の和名は BISMAL になかったが、後者と同じ学名で、カノコミノムシの和名を持つ種が存在した。カノコミノムシ *Vexillum sanguisuga* (Linnaeus, 1758) を有効な和名・学名と判断した(*Vexillum sanguisugum* は、種小名の語尾変化間違い)。同じ学名で、命名者名と命名年が異なる *Vexillum plicarium* (Linnaeus, 1758) にはオオミノムシが、*Vexillum plicarium* (Sowerby, 1874) にはオオミノムシガイが適用されていた。BISMAL でオオミノムシを検索すると、前者と同じ学名が出て来た。WoRMS で *Vexillum plicarium* を検索しても前者と同じ学名で、シノニムの変遷に Sowerby, 1874 はなかった。

コビトマメオトメ *Pusia hanleyi* (Dohrn, 1861) は、BISMAL や WoRMS では和名も学名も検索できず、WMSDB では属名と命名年が異なる *Vexillum hanleyi* W. L. H. Dohrn, 1862 がシノニムになっていて、更に属名と種小名が異なる *Atlantilux exigua* (C. B. Adams, 1845) が有効学名であった(この学名は WoRMS でも有効)。イトマキヒタチオビ *Fulgoraria* (*Fulgoraria*) *rupestris hamillei* (Crosse, 1869) には、BISMAL では亜属が取れた学名が適用されていたが、WoRMS にはなかった。WMSDB で検索すると、亜種から種へと格上げされた *Fulgoraria hamillei* (J. C. H. Crosse, 1869) が出来て、この学名は WoRMS でも有効であった。ホンヒタチオビ *Nipponomelon prevostiana* (Crosse, 1878) には、BISMAL では属名が異なる、和名なし *Fulgoraria prevostiana* (Cross, 1878) が適用されて

いたが、この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、種から亜種へと降格した *Fulgoraria megaspira prevostiana* (Crosse, 1878) が有効学名であった。ツヤヒタチオビ *Musashia clara* (Smith, 1938) には、BISMAL では属名と命名者名・命名年が異なる、和名なし *Fulgoraria clara* (Sowerby, 1844) が適用されていたが、WoRMS では命名者名が明確化され、更に命名年が異なる *Fulgoraria clara* (G. B. Sowerby III, 1914) が有効学名であった。*undulata angasi* と、学名だけ入力されている種は、どの DB でも検索不能であったが、Google の suggestion 機能で *amoria undulata angasi* が示唆された。属名が抜けていると考えると、*undulata angasi* は種小名と亜種小名の可能性が高い。WMSDB では *Amoria undulata angasii* (G. B. II Sowerby, 1864) が適用されていたが、WoRMS では原記載の *Voluta angasii* G. B. Sowerby II, 1864 がシノニムになっていて、*Amoria undulata* (Lamarck, 1804) が有効学名であった。収蔵資料 DB では、この学名にモクメボラの和名が入っていたが、この和名は BISMAL になかった。和名なし(旧モクメボラ) *Amoria undulata* (Lamarck, 1804) を有効な和名・学名と結論付けた。

ウネシヨクコウラ *Harpa ventricosa* Lamarck, 1816 は、WoRMS では「invalid: junior homonym of *Harpa ventricosa* Lamarck, 1801」になっていて、種小名が異なる原記載 *Harpa cabriti* P. Fischer, 1860 が有効学名であった(*Harpa ventricosa* Lamarck, 1801 はシノニムで、*Harpa major* Röding, 1798 が有効学名であった。BISMAL では、この学名にシヨクコウラの和名が与えられている)。ウネクチキレ *Brachytoma varicosa* (Reeve, 1843) は BISMAL や WoRMS では検索できず、WMSDB の曖昧検索で *Inquisitor varicosa* (L. A. Reeve, 1843) が出来て来た。WoRMS では、種小名が語尾変化した *Inquisitor varicosus* (Reeve, 1843) が適用されていた。*Kuroshioturris tigurinaeformis* (Nomura, 1936) と学名だけ入力されている種は、BISMAL や WoRMS では検索できず、WMSDB の expanding search と Double

Metaphone algorithm で *Turris tigrinaeformis* S. Nomura, 1936 が出来た(*tigrinaeformis* は誤入力)。メルビルクダマキ *Gemmula (Gemmula) congener cosmoi* (Sykes, 1930)には、BISMaL では亜種から種へと昇格し、命名年が 100 年も異なる *Gemmula cosmoi* (Sykes, 1830) が適用されていたが、WoRMS では命名年が 1930 になっていた(原記載は *Turris cosmoi* Sykes, 1930)。カマクライグチ *Comitas kamakurana* (Pilsbry, 1875)は BISMaL と一致したが、WoRMS では命名年が 1895 になっていた(原記載は *Pleurotoma kamakurana* Pilsbry, 1895)。テンジククダマキ *Cochlespira pulchella pulcherrissima* (Kuroda, 1959)と入力されている亜種は、BISMaL や WoRMS では和名も学名も検索できなかったが、WMSDB では命名者名と命名年が異なる *Cochlespira pulchella pulcherrissima* (T. Kira, 1955)がシノニムになっていて、亜種から種へと昇格した *Cochlespira pulcherrissima* (T. Kira, 1955)が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。

ヤゲンイグチ *Aforia circinata* (Dall, 1973)は命名年の間違いで、BISMaL では和名なし *Aforia circinata* (Dall, 1973)が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。オホーツクイグチ *Aforia sakhalinensis* Bartsch, 1945 は BISMaL になく、WoRMS ではシノニムになっていて、*Aforia circinata* (Dall, 1973)が適用されていた。ヒメヤゲンイグチ *Aforia hondoana* Dall, 1925 も BISMaL になく、WoRMS では *Aforia hondoana* (Dall, 1925)がシノニムとされ(原記載は *Turricula hondoana* Dall, 1925)、*Aforia circinata* (Dall, 1973)が適用されていた。サビヤゲンイグチ *Aforia insignis* (Jeffreys, 1873)は BISMaL と一致したが、WoRMS では命名年が異なる *Aforia insignis* (Jeffreys, 1883)がシノニムとされ、*Aforia circinata* (Dall, 1973)が適用されていた[BISMaL ではサビヤゲンイグチ *Aforia insignis* (Jeffreys, 1873)と和名なし *Aforia circinata* (Dall, 1973)は、別種として並列されている]。以上を総合的に判断し、これら 4 種の有効な和名・学名をサビヤゲン

イグチ *Aforia circinata* (Dall, 1873)と結論付けた。

入力されている 2 つの属名の綴りが似ている場合、それらが 2 属なのか、どちらかが誤入力なのか、はっきりしない。モミジボラ 5 点・ミガキモミジボラ 2 点の和名が入力されているケースでは *Inquisitor* が、チャイロモミジボラ 2 点・ハシナガモミジボラ 1 点・タケノコシャジク 2 点・アラレタケノコシャジク 1 点・スミツキシヤジクガイ 1 点の和名が入力されているケースでは *Inquister* が使用されていた。WoRMS で *Inquisitor* Hedley, 1918 が正しい綴りであることを確認した。*Inquister* Hedley, 1918 の属名は、肥後・後藤(1993)に記載されている(明らかな記載ミスで、この属の総ての種に *Inquister* が使われている)。モミジボラ *Inquisitor jeffreysii* (Smith, 1875)は BISMaL と一致したが、WoRMS では属名が異なる *Funa jeffreysii* (E. A. Smith, 1875)が適用されていた。チャイロモミジボラ *Inquister chocolatus* (E. A. Smith, 1875)の和名と(属名を *Inquisitor* に訂正した)学名は、BISMaL になかった。WoRMS では、種小名の語尾が変化した *Inquisitor chocolata* (E. A. Smith, 1875)が有効とされていた。タケノコシャジク *Inquister flavidula* (Lamarck, 1822)の和名と(属名を *Inquisitor* に訂正した)学名は BISMaL になかったが、WoRMS 検索を掛けると *Inquisitor flavidula* [sic]がヒットした。これは種小名の語尾が不正確(incorrect gender ending)ということで、*Inquisitor flavidulus* (Lamarck, 1822)に変更されていたが、これもシノニムで、現在は *Clathrodrillia flavidula* (Lamarck, 1822)が有効学名であった[*Inquister flavidula* (Lamarck, 1822)は肥後・後藤(1933)と、*Inquisitor flavidula* (Lamarck, 1822)は奥谷(2000)と一致した]。イナズマカノコ *Neritina (Provittoidea) coramanderiana* Sowerby, 1832 は肥後・後藤(1993)と一致したが(種小名は *coromanderiana* の誤入力)、奥谷(2000)と BISMaL では、種小名が異なる *Neritina parallela* Roeding, 1798 が適用されていた。WoRMS では *Neritina* 属に *coromanderiana* も *parallela* もなかったが、WMSDB

では *Vittina coromandeliana* (G. B. II Sowerby, 1832)が
出て来た。WoRMS では命名者名と命名年が異なる
Vittina coromandeliana (G. B. Sowerby I, 1836)がヒット
した。奥谷(2000)と BISMAL では原記載の *Neritina*
parallela Roeding, 1798 を有効としているが、イナズ
マカノコ *Vittina coromandeliana* (G. B. Sowerby I,
1836)を現時点での有効な和名・学名と判断した。

カドバリナガニシ *Fusinus spectrum* (Reeve, 1847)は
BISMAL と一致したが、WoRMS では属名が異なる
Goniofusinus spectrum (A. Adams & Reeve, 1848)が有効
学名であった(原記載は *Fusus spectrum* A. Adams &
Reeve, 1848)。Parent は *Goniofusinus* Vermeij & Snyder,
2018 で、最近の属名変更であった。チゴフデ *Isara*
typha (Reeve, 1845)は、WMSDB では *Strigatella typha* L.
A. Reeve, 1845 が出来たが、WoRMS では *Strigatella*
typha (Reeve, 1845)がシノニムとされ、属名が異なる
Carinomitra typha (Reeve, 1845)が有効学名であった。
Parent は *Carinomitra* Fedosov, Herrmann, Kantor &
Bouchet, 2018 で、最近の属名変更であった。ツノイ
ロチョウチンフデ *Imbricaria punctata* (Swainson,
1821)は BISMAL と一致したが、WoRMS では属名が
変更され、*Imbricariopsis punctata* (Swainson, 1821)が
有効学名であった(Parent は *Imbricariopsis* Fedosov,
Herrmann, Kantor & Bouchet, 2018)。

セイロンイモ *Virroconus sponsalis ceylannensis*
(Hwass, 1792)に関しては、属名・種小名・亜種小名
のどの組み合わせでも検索可能な DB はなく、手始
めに *Virroconus* を *Conus* にしてみた。次に、セイロ
ンイモという和名から *ceylannensis* を誤入力と考え、
ceylonensis にしてみた。WMSDB で *Conus ceylonensis*
を検索すると、*Conus ceylonensis* C. H. Hwass in J. G.
Bruguère, 1792 がシノニムで出て来て、属名と種小
名が異なる *Harmoniconus musicus* (C. H. Hwass in J. G.
Bruguère, 1792)が適用されていた。WoRMS では、こ
の学名はシノニムとされ、*Conus musicus* Hwass in
Bruguère, 1792 が有効学名であった[収蔵資料 DB に、

ガクフイモ *Virroconus musicus* (Hwass, 1792)がある]。
サミダレシマミナシ *Stephaniconus princeps lineolatus*
(Valenciennes, 1832)は、BISMAL や WoRMS では検索
できず、WMSDB では *Conus lineolatus* A. Valenciennes,
1832 がシノニムで出て来て、*Ductoconus princeps* (C.
Linnaeus, 1758)が適用されていた。WoRMS では、原
記載の *Conus princeps* Linnaeus, 1758 が適用されてい
た。シシユウミナシ *Leptoconus thalassiarculus* (Sowerby,
1834)は、どの DB でも検索できず、*thalassiarculus* を
thalassiarculus に変えて検索すると、WMSDB で
Virgiconus thalassiarculus (G. B. II Sowerby, 1834)が出
て来た。WoRMS では、命名者名が異なる *Virgiconus*
thalassiarculus (G. B. Sowerby I, 1834)がシノニムとさ
れ、*Conus thalassiarculus* G. B. Sowerby I, 1834 が有効
学名であった。ユキゲイモ *Daucionus striatellus* (Link,
1807)も、どの DB でも検索できず、*Daucionus* に何
らかの入力ミスがあるものと思われた。WMSDB で
種小名 *striatellus* と命名者名 Link を入れて検索する
と、*Vituliconus striatellus* (J. H. F. Link, 1807)が出て来
た。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Conus*
striatellus Link, 1807 が有効学名であった(*Daucionus*
Cotton, 1945 が *Conus* 属のシノニムで、*Daucionus* は
c が抜けたために検索不能になっていた)。

ユウヤケイモ *Rhizoconus sazanka yoshioi* Azuma,
1973 は BISMAL や WoRMS では検索できず、WMSDB
では *Kioconus sazanka* (T. Shikama, 1970)が出て来た。
この学名は WoRMS ではシノニムで、*Conus martensi*
E. A. Smith, 1884 が有効学名であった。オカモトイモ
Rhizoconus okamotoi (Kuroda & Ito, 1961)も BISMAL や
WoRMS では検索できず、WMSDB では属名と種小
名が異なる *Calamiconus lischkeanus* (H. C. Weinkauff,
1875)が出て来た。この学名は WoRMS ではシノニム
とされ、*Conus lischkeanus* Weinkauff, 1875 が有効学名
であった。スソムラサキイモ *Hermes scabriuscula*
(Dillwyn, 1817)も、BISMAL や WoRMS では検索でき
ず、WMSDB では属名と種小名が異なる *Leporiconus*

coffae (J. F. Gmelin, 1791)が出て来た。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Conus coffae* Gmelin, 1791 が適用されていた。ナガシマミナシ *Virgiconus muriculatus* (Sowerby, 1933) (var)は、明らかな命名年の間違いで、BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では属名が異なる *Lividoconus muriculatus* (G. B. I Sowerby, 1833)がヒットした。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Conus muriculatus* G. B. Sowerby I, 1833 が適用されていた。ヒメホウオウイモ *Asprella insculpta* (Kiener, 1845)は、WoRMS の曖昧検索では、種小名の綴りが2つ違うだけで(*ul* と *ri*)、命名者名と命名年が異なる *Asprella inscripta* (Reeve, 1843)がシノニムで出て来た(*Conus inscriptus* Reeve, 1843 が有効学名)。違和感を覚えたので、WMSDB で検索すると、属名と命名年が異なる *Conasprella insculpta* (L. C. Kiener, 1847)が出て来た(この学名は WoRMS でも有効)。ホウライイモ *Endemoconus bayai* (Jousseume, 1872)は BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では *Dauciconus boui* (A. J. Da Motta, 1988)が出て来た。種小名は似ているが、他の部分の違いが気になり、*Conus bayai* で検索したが、WMSDB では同じ学名が出て来てしまった。この属名と種小名で WoRMS 検索すると、*Conus bayani* Jousseume, 1872 がヒットした(*bayai* は *bayani* の誤入力)。

コゲチャタケ *Pristiterebra tsuboiana* (Yokoyama, 1922)は、BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では Fossil only と表示される。Google でコゲチャタケを検索すると、京都大学総合博物館(2019)の標本備考に「*Terebra* (*Fusoterebra*) *bifrons* Hinds コゲチャダケ」と記載されていた。WMSDB で検索すると、*Pristiterebra bifrons* (R. B. Hinds, 1844)が出て来て(この学名は WoRMS でも有効)、BISMaL ではオオコゲチャタケの和名が与えられていた。ヒモカケセコバイ *Colubraria cumingi* (Dohrn, 1861)は、BISMaL では種小名と命名者名の綴りが異なる *Colubraria cumingii* (Dohn, 1861)が適用されていたが、WoRMS

では収蔵資料 DB の学名と同じであった。

同じ学名に見える2つの学名には、コグルマガイ *Psilaxis radiatus* (Röding, 1798)とゴシヨグルマ *Philippia* (*Psilaxis*) *radiata* (Röding, 1798)の2つの和名が入力されていた。種小名の違いは、属名に引きずられて、男性形と女性形に語尾が変化したものと考えられる。BISMaL では、現在の和名はコグルマで、前者が有効学名であった(この学名は WoRMS でも有効)。コシタカグルマ *Philippia* (*Psilaxis*) *layardi* A. Adams, 1855 も WoRMS では *Psilaxis radiatus* (Röding, 1798)が適用されていて、和名をコグルマに変更した。カゴサンショウガイモドキ *Euchelus* (*Vaceuchelus*) *instrictus* (Gould, 1860)に、BISMaL では *Herpetopoma instricta* (Gould, 1849)が適用され、属名の変更と種小名の語尾変化、及び年号間違いと思われたが、WoRMS では有効学名が *Herpetopoma instrictum* (Gould, 1849)になっていた。BISMaL では、属名変更に伴う種小名の語尾変化が不正確だったことになる(男性形から中性形に変化すべきところを女性形に変化させてしまった)。イボサンショウガイモドキ *Euchelus* (*Vaceuchelus*) *pauperculus* (Lischke, 1872)も、BISMaL では *Herpetopoma pauperculus* (Lischke, 1872)になっていて(種小名の語尾が男性形のまま)、単なる属名変更と思われたが、WoRMS では *Herpetopoma pauperculum* (Lischke, 1872)が適用されていた(種小名の語尾が中性形に変化)。

ヤキイモ *Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758)は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS では属名が異なる *Conus magus* Linnaeus, 1758 が有効学名になっていた。この種3点の他に、同じ属名と種小名の7品種(和名なし)が1点ずつ入力されていて、*Pionoconus magus forma carinatus* Swainson, 1822 の1品種とは別に、同一種と思われるカリガネヤキイモ *Pionoconus carinatus* (Swainson, 1822)の1点が入力されていた。この種の採集地はフィリピンで、BISMaL や WoRMS では学名を検索することが出来なかったが、

WMSDB では *Conus carinatus* Swainson, 1822 (シノニム)と *Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758) (有効学名)が出て来た。カリガネヤキイモ *Pionoconus carinatus* (Swainson, 1822)は、ヤキイモ *Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758)に吸収されてしまったことになるのだが、この学名も WoRMS では無効とされている(*Pionoconus* Mörch, 1852 は、WoRMS では *Conus* Linnaeus, 1758 のシノニムとされ、この属には検索時に 2,967 matching records が表示されていた)。品種が種へと昇格しているケースも少なくないが、前述の和名なし7品種は、WMSDB では *Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758)に吸収されている。以上を総合的に判断すると、*Conus magus* Linnaeus, 1758 が現在の有効学名と考えられる。

クリイロカメガイ *Cavolinia uncinata* (Rang, 1829) は BISMAL と一致したが、WoRMS では命名者名と命名年が異なっていて、*Cavolinia uncinata* (d'Orbigny, 1835)が適用されていた(原記載は *Hyalaea uncinata* d'Orbigny, 1835)。この学名のシノニムとして *Hyalea uncinata* Rang, 1829 が記載されていて、*Hyalea* [sic] (incorrect subsequent spelling of *Hyalaea* Lamarck, 1799) が命名者名と命名年が異なる理由であった。ツボウキヅツ *Cuvierina columnella* forma *urceolaris* (Moersch, 1852)は、BISMAL では品種から亜種へと昇格し、命名年が異なる *Cuvierina columnella urceolaris* (Mörch, 1850)が適用されていた。この学名は WoRMS になく、WMSDB では、亜種から種へと昇格した *Cuvierina urceolaris* (O. A. L. Mörch, 1850)が出て来た(この学名は WoRMS でも有効)。

ヤマボタルガイ *Cochlicopa lubrica* (Müller, 1774)の2点(採集地は、松前町離島小島と伊豆諸島八丈島)と、科名も和名も入力されていない学名 *Cochlicopa lubrica* (Müller, 1774)だけの種1点(採集地は、イギリス・ノーフォーク州)は、ヤマボタルガイ科 Cionellidae に分類されていた。これに対し、ヤマボタル *Cochlicopa lubrica* (Miller, 1774)の1点は、ヤマボタル

科 Cochlicopidae に分類されていた(採集地は稚内市宗谷で、Miller は Müller の誤入力)。淡水産貝類と判断し、WMSDB 検索を掛けると、*Cochlicopa lubrica* (O. F. Müller, 1774)と *Cochlicopa lubrica hachijoensis* H. A. Pilsbry, 1902 の1種1亜種が出て来た。前者は欧米に広く分布し、日本での記録も存在した。後者は伊豆諸島新居島での記録であった。Google で *Cochlicopa lubrica hachijoensis* の引用符検索を掛けると、ハチジョウヤマボタルの和名が出て来た。上島(2003)ではヤマボタル科 Cionellidae が使われていたが、WMSDB に modified Family Cionellidae to Cochlicopidae という記述があった。ヤマボタル科 Cochlicopidae を有効科名と判断し、伊豆諸島八丈島採集の亜種1点をハチジョウヤマボタル *Cochlicopa lubrica hachijoensis* Pilsbry, 1902、残りの種3点をヤマボタル *Cochlicopa lubrica* (Müller, 1774)と結論付けた。

トビシママメマイマイ *Trishoplita conulina* (Martens, 1867)の9点以外に、この和名が括弧付きで入力されている種2点[エンスイマイマイ(トビシママメマイマイ) *Trishoplita conospira* (Pfeiffer, 1851)]と、亜種31点[マメマイマイ(トビシママメマイマイ) *Trishoplita commoda commoda* (A. Adams, 1868)]が存在した(1点はマメマイマイとだけ入力)。亀田(2018)では、トビシママメマイマイ、エンスイマイマイ、マメマイマイの和名は有効とされている。WMSDB では、これら3種の属名は *Trishoplita* から *Aegista* へと変更され、エンスイマイマイでは種小名も変更されていた [*Aegista izuensis* (Pilsbry & Hirase, 1904)]。エンスイマイマイの種小名 *conospira* はカタママメマイマイの誤査定と考えられ、肥後・後藤(1993)では、この学名のシノニム(*Trishoplita izuensis* Pilsbry & Hirase, 1904)がイズママメマイマイの別和名で記載されている。

リンゴマイマイ *Hedleyella falconari* (Reeve)には、アカマイマイ科 Acavidae とオニグチギセル科 Odontostomidae の2つの科名が入力されていた。これらの謎をひもとくためには、第一に、リンゴマイ

マイの分布域はヨーロッパに限られるのに対し、採集地はオーストラリアのクイーンズランド州になっていた(オーストラリアにリングマイマイが移入種として生息していることが、和名間違いに繋がっている)。入力されている学名には種小名の誤入力と命名年の欠落が見られ、WoRMS や WMSDB では命名者名も異なる *Hedleyella falconeri* (Grey, 1834)が適用されていた(科名はアカマイマイ科でもオニグチギセル科でもなく、Caryodidae 科)。この学名を持つ種はオーストラリア固有種で(Murphy, 2002)、和名はないようであった(英名は giant panda snail)。この種はリングマイマイではなかったことになる。リングマイマイはエスカルゴとも呼ばれ、WMSDB では *Helix pomatia* Linnaeus, 1758 が有効学名であった(マイマイ科 Helicidae)。収蔵資料 DB ではエスカルゴ *Helix* (*Helix*) *pomatia* Linne と入力されていたが、チリロウバイ科 Nuculanidae と誤入力されていた。

カブトウラシマ *Echinophoria kurodai* Abbott, 1968 の1点は、BISMaL や WMSDB ではシノニムとされ、和名と種小名が異なるナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (R. B. Watson, 1886)が適用されていた。WoRMS では、*Echinophoria kurodai* (Abbott, 1968)もまた生きていた(原記載は *Phalium kurodai* Abbott, 1968)。著者らは WoRMS を優れた DB と判断し、基本的に WoRMS には充分な敬意を払っているが、*Echinophoria wyvillei* (R. B. Watson, 1886)の分類群で *Echinophoria wyvillei* (f) *kurodai* の image を採用していることから、*Echinophoria kurodai* (Abbott, 1968)を有効学名とすることには疑義がある。収蔵資料 DB にナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (Watson, 1886)が2点、ダイオウカブトウラシマガイ *Echinophoria coronadoi wyvillei* (Watson, 1886)が1点、イボカブトウラシマガイ *Galeodea rugosa* (Linnaeus, 1758)が1点ある。加藤目録で確かめると、それぞれイボカブトウラシマガイ *Galeodea echinophora* (Linnaeus, 1758)、ダイオウカブトウラシマガイ

Galeodea rugosa (Linnaeus, 1758)、ナンバンカブトウラシマ *Echinophoria coronadoi wyvillei* (Watson, 1886)と記述されていた。カブトウラシマ *Echinophoria kurodai* Abbott, 1968、及びナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (Watson, 1886)には、ナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (R. B. Watson, 1886)を適用すべきと判断した。ダイオウカブトウラシマガイ *Echinophoria coronadoi wyvillei* (Watson, 1886)には、WoRMS の *Galeodea rugosa* (Linnaeus, 1771)を適用した。イボカブトウラシマガイ *Galeodea rugosa* (Linnaeus, 1758)には、加藤目録や WoRMS と同じ、*Galeodea echinophora* (Linnaeus, 1758)を適用した(この学名は収蔵資料 DB に存在しない)。

モカボと和名だけ入力されている種(目名、科名、学名、採集地、採集年月日、採集者名なし)は、頭足綱 Cephalopoda と入力されているにもかかわらず、腹足綱 Gastropoda を表す Ga に分類されていた(YAMA3Ga007504)。モカボで Google の引用符検索を掛けると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけで、動物部門が所有する図鑑類にも存在しない正体不明種であった。標本状態が「貝殻」と入力されているので、オウムガイやタコブネの仲間と推測し、標本に当たって調べたところ、殻高 1.5 mm の小さな巻貝であった。頭足綱というのは間違いで、腹足綱であることだけは確かであったが、実体顕微鏡で観察しても同定不能であった。キュウシュウナミノコと和名だけ入力されている種(YAMA3Ga007592)には、BISMaL では和名なし *Donax kiusiuensis* Pilsbry, 1901 が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。問題は、この種に腹足綱 Gastropoda / 新腹足目 Neogastropoda / イモガイ科 Conidae と入力されていることで、BISMaL と WoRMS を比較検討した結果、二枚貝綱 Bivalvia / Cardiida 目 / フジノハナガイ科 Donacidae に変更した。

Volachlamys hirasei (Bavay, 1904)には、アワジチヒロ3点とヤミノニシキ1点の2つの和名が入力され

ていた。アワジチヒロ 1 点の和名には「外口種」という、見たことのない用語が入力されていた。BISMaL によると、この種の学名は正確に入力されていて(オリジナルラベルには *Pecten* という属名が書いてあるので、当時の担当者が新しい学名を入力したものと考えられる)、和名はヤミノニシキ／アワジチヒロとなっていた。Google の引用符検索では、外口種との一致はなかった。この種は二枚貝の仲間なので、貝の口が外に開く可能性は低いとしても、奇形種の可能性は高いと思われた。標本に当たって調べたところ、何の変哲もない二枚貝であった。オリジナルラベルにも「外口種」と書いてあったが、口と読める文字に癖があって、国という漢字の省略形と判断した(つまり、外国種と書いてある)。

同じと思われる学名には、ヒョウモンイカ *Sepia (Doratosepion) pardex* Sasaki, 1913 とヒョウモンコウイカ *Sepin (Doratosepion) pardex* Sasaki, 1913 の 2 つの和名が入力されていたが、属名が微妙に異なっていた(*Sepia* と *Sepin*)。コウイカ科 *Sepiidae* の他の 5 種の属名に *Sepia* と入力されているので、*Sepin* は単純な誤入力と思われた。BISMaL でヒョウモンイカという和名を検索すると、該当する分類群が見つかりませんでした」と表示されるのに対し、ヒョウモンコウイカ *Sepia (Doratosepion) pardex* Sasaki, 1913 は存在した。この学名は、WoRMS では alternate representation として扱われていたので、ヒョウモンコウイカ *Sepia pardex* Sasaki, 1913 を有効な和名・学名とした。この種の目名として入力されているコウイカ目 *Sepioidea* は、BISMaL では同じ *Sepioidea* Naef, 1916 が適用されているのに対し、WoRMS と WMSDB では *Sepiida* Zittel, 1895 が適用されていた(BISMaL の *Sepioidea* は WoRMS でも WMSDB でも検索できず、目名のシノニムにも出て来ない)。

ヒダトリサザエ *Marmorostoma squamosum* は、WoRMS で *Marmorostoma* を曖昧検索すると、*Turbo (Marmorostoma)* Swainson, 1829 が出て来た(属名の誤

入力)。Google でヒダトリサザエを検索すると、*Turbo squamosus* Gray, 1847 が出て来た(微小貝データベース, 2018c)。以上の結果から「収蔵資料 DB の学名は、属名 *Marmorostoma* と種小名 *squamosum* の誤入力ではないか」と考えた。WoRMS で *Turbo squamosus* を検索すると、この学名もシノニムで、有効学名は *Turbo laminiferus* Reeve, 1848 であった。以上の結果から、ヒダトリサザエ *Marmorostoma squamosum* の学名を *Turbo laminiferus* Reeve, 1848 に変更した(鈴木稔コレクションでラベルの学名を調べたところ、学名の誤入力は元々のラベルの記入ミスであった)。

サザエ *Turbo (Batillus) cornutus* Lightfoot, 1786 と入力されている種は、BISMaL 検索した時点で亜属を除いた学名 *Turbo cornutus* Lightfoot, 1786 の Alternate Representation になっていた。最近の研究で、日本のサザエには最初から学名がなかったことが明らかになり、*Turbo sazae* Fukuda, 2017 という学名が与えられた(Fukuda, 2017)。この学名は、既に WoRMS では有効とされている。*Turbo cornutus* Lightfoot, 1786 が WoRMS で確認されているが、これはサザエとは別種の中国原産ナンカイサザエに対して与えられた学名であった。1995 年にナンカイサザエの学名として記載された *Turbo chinensis* Ozawa & Tomida, 1995 は、現在は新参異名として取り扱われている。

ドブガイモドキ *Pletholophus discoidea* (Lea, 1834) の学名を WMSDB で検索すると、属名が異なる *Cristaria discoidea* (I. Lea, 1834) というシノニムがヒットし、入力された学名とは属名も種小名も異なる *Cristaria tenuis* (E. Griffith & E. Pidgeon, 1833) が出来た。2018 年 5 月 25 日、大阪教育大学名誉教授の近藤高貴さんが調査のため来館し、県博所蔵の鈴木稔貝類コレクションの中の 1 点が、ドブガイモドキ(滋賀県琵琶湖産, 1966)であることを確認した。この種は、東京都(Yeddo, 1874)で採集された標本を基に新種記載された淡水産二枚貝(イシガイ科／ドブガイモドキ属)で、沖縄県(石垣島, 2008)、福岡県(宗像

市, 2012)に次ぐ、国内 3 例目の産地記録であった(近藤・本間, 2018)。この文献では、属名が *Cristaria* から *Pletholophus* に戻っていて、ドブガイモドキの学名は *Pletholophus tenuis* (Gray in Griffith & Pidgeon, 1833)になっていた。2018 年 8 月 9 日更新の MUSSELp では、*Pletholophus tenuis* (Griffith & Pidgeon, 1833)となっていて、詳述されているシノニムの変遷から、これを有効学名と判断した。

11 採集地

S-Net/GBIF への登録に際し、採集地の位置情報(緯度・経度)を記入することが求められている。そのため、出来るだけ正確な採集地情報が必要であったが、収蔵資料 DB では採集地情報に不正確なものが存在した(e.g., 奄美大島の所在地が、鹿児島県ではなく沖縄県になっている)。

カンムリウミスズメの採集地として入力されている静岡県下田町(現、下田市)「鵜(ウ)島」は、国土地理院の地図(1/25,000)に存在せず、どの検索でもヒットしなかった(採集年月日: 1947 年 4 月 10 日)。オリジナルラベルの台帳では「鴉(カラス)の島」と書かれていて、県博のラベルでは「の」が抜けて鴉(カラス)島になっていた。この鴉(カラス)という字に黒ペンで○が付けられ、鵜(ウ)に訂正されていた。このことから、収蔵資料 DB に入力する段階で鵜(ウ)島になった、誤表記の可能性が高いと考えられる。昔、下田港に山城があり、この城を鵜(ウ)島城と呼んでいたことから、当時の担当者が「鵜(ウ)島」に書き換えたようである。ちなみに、鴉(カラス)島は、現在の地図上には存在しない。江戸時代の絵図で、下田湾内に鴉(カラス)シマという島があり、港湾整備後の地図上の位置と照合した結果、現在「毘沙子(ミサコ)島」と呼ばれている島が、鴉(カラス)シマと考えて良いとのことである(武石, 私信)。

オーストラリア・ビクトリア州シドニー通りと入力されているアワジチヒロ *Volachlamys hirasei* (Bavay,

1904)の採集地を標本に当たって調べたところ、採集地のメモに「Sanday St. Qld. Australia」と記述されていた。ビクトリア州ではなくクイーンズランド州であったが、シドニー通りという地名、及び Sanday St. (サンデイ通り?)が気になったので調べたところ、Sanday St. というメモも正確ではなく、Great Sandy Strait という海峡であった(メモの Sanday は記載ミスで、Google マップに Sanday St, Glen Waverley VIC 3150 Australia という住所が存在するので、おそらく入力担当者は、この住所からビクトリア州と誤って入力してしまったのだろうと推測される)。

12 終わりに

この原稿を執筆している時点で、県博が運営・公開している収蔵資料 DB はソフトのバージョンが古く、書き換え不能な状態が続いている。S-Net/GBIF への登録のために始めた動物資料の学名チェックではあったが、様々な学名の不具合は、図らずも DB システムの書き換え不能という県博全体の問題になってしまっている。また、これは県博に対する山形県の予算の割り当ての問題でもある(県からは優先順位が低いと見なされ、予算が下りて来ない)。動物資料以外の DB が機能的な役割を果たしているのかどうか定かではないが、収蔵資料 DB で学名の誤入力が多いことや学名が古いこと、学名の一部が全角入力されていることでインターネット検索に引っ掛からなければ、または学名が間違っていれば、貴重な資料もないと同然である。それだけなら未だしも、様々な学名の不具合は、県博全体の信頼性を失墜させてしまう危険性が高い。今後は、動物の収蔵資料 DB を外部からアクセス出来ない状態にしておいて、システムを更新するなり新しいソフトを入れるなりして、世界中の誰もが、県博が所有する動物資料の正確な学名を利用できるように、収蔵資料 DB を改善して行く必要がある。

以上、S-Net/GBIF への登録と連動し、ひとつの物

語になりそうな項目を主体的に取り上げて文章を書いてみたが、他にも記録として文章を残しておきたい項目は山ほどあり、ページ数の制限でかなりの項目を割愛している。従って、ここに挙げてある項目は、著者らが間違いを正した中のほんの一部に過ぎないことをお断りしておく。また、文章全体の約 8 割を軟体動物門(特に腹足類)の記述に充てているのは、この分類群に貝類コレクションのマニアが多く、

引用文献

- 微小貝データベース (2018a) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data84/r008398.html (accessed on 20 Oct 2018)
- 微小貝データベース (2018b) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data65/r006470.html (accessed on 2 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018c) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data40/r003996.html (accessed on 7 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018d) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data79/r007812.html (accessed on 22 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018e) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data01/a0363.html (accessed on 30 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018f) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data36/r003515.html (accessed on 5 Dec 2018)
- 微小貝データベース (2018g) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data39/r003885.html (accessed on 7 Dec 2018)
- 微小貝データベース (2019a) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data26/r002561.html (accessed on 9 Jan 2019)
- 微小貝データベース (2019b) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data02/a2182.html (accessed on 5 Feb 2019)
- 微小貝データベース (2019c) http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data49/r004869.html (accessed on 8 Feb 2019)
- Cernohorsky WO (1965) The Mitridae of Fiji. *Veliger* 8: 70–160
- Fukuda H (2017) Nomenclature of the horned turbans previously known as *Turbo cornutus* [Lightfoot], 1786 and *Turbo chinensis* Ozawa & Tomida, 1995 (Vetigastropoda: Trochoidea: Turbinidae) from China, Japan and Korea. *Molluscan Res* 37: 268–281
- Hasegawa K (2009) Upper bathyal gastropods of the Pacific coast of northern Honshu, Japan, chiefly collected by R/V Wakataka-maru. In: T Fujita (Ed), *Deep-sea fauna and pollutants off Pacific coast of northern Japan*. Natl Mus Nat Sci Monogr 39, pp 225–383
- 羽角正人 (2018) 博物館新任職員より. 動物部門 羽角正人. 山形県立博物館友の会会報 33: 3
- 肥後俊一・後藤芳央 (1993) 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. エル貝類出版局, 大阪

学名の変遷が多岐にわたっているからに他ならない。

謝辞

鴉シマに関する情報を提供していただいた、北九州市立自然史博物館の武石全慈学芸員に深く感謝の意を表する。

- 菱田嘉一 (2000) 世界海産貝類コレクション大図鑑. 電気書院, 東京
- 亀田勇一 (2018) 陸・淡水産腹足類日本固有種目録(2018 年 3 月版). http://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot_japan/endemic_list/
- 川田伸一郎・岩佐真宏・福井大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽創・姉崎智子・横畑泰志 (2018) 世界哺乳類標準和名目録. 哺乳類科学第 58 巻別冊 京都大学総合博物館 (2019) 自然史収蔵資料. 貝類. <http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/collection/Shell/Shell00002139.htm> (accessed on 24 Feb 2019)
- 近藤高貴・本間正明 (2018) 琵琶湖で採集されたドブガイモドキ. *ちりぼたん* 49(1–2): 47–49
- Murphy MJ (2002) Observations on the behaviour of the Australian land snail *Hedleyella falconeri* (Gray, 1834) (Pulmonata: Caryodidae) using the spool-and-line tracking technique. *Molluscan Res* 22: 149–164
- OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018a) <http://clade.ansp.org/obis/search.php/94225> (accessed on 8 Nov 2018)
- OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018b) <http://clade.ansp.org/obis/search.php/86679> (accessed on 15 Nov 2018)
- 奥谷喬司(編著) (2000) 日本近海産貝類図鑑. 東海大学出版会, 東京
- 奥谷喬司(編著) (2017) 日本近海産貝類図鑑, 第二版. 東海大学出版会, 東京
- 佐々木猛智 (2002) 貝の博物誌(東京大学コレクション XV). 東京大学総合研究博物館, 東京
- 佐々木猛智 (2018) 軟体動物和名学名一覧表. <http://www.um.u-tokyo.ac.jp/hp/sasaki/02-malacology/01-list/wamei-gakumei.htm> (accessed on 8 Dec 2018)
- 鹿間時夫 (1964) 原色図鑑 続 世界の貝. 北隆館, 東京
- 上島励 (2003) ヤマボタル科. In: 日本分類学会連合(編), 第 1 回日本産生物種数調査. <http://ujssb.org/biospnum/search.php>
- Yoshikawa N, Matsui M (2014) Two new salamanders of the genus *Onychodactylus* from eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa* 3866: 53–78

館長・学芸員講座「鎌倉の浜辺を掘ってみたら・・・」を振り返る

原田 俊彦 *

Toshihiko Harada

1 はじめに

当館では例年館長・学芸員講座を開講しており、平成 30 年度は計 4 回の講座が行われた。その第 1 回目の講座を私が担当し、上記のタイトルで 6 月 30 日（土）に行った。このタイトルを選んだ理由は、山形と同じくらい鎌倉が好きで、何度も足を運び、鎌倉観光文化検定 1 級を取得していることから、鎌倉の歴史・文化・地理・観光、そして考古学の側面から、都市鎌倉の一面を見ていただこうと考えたからである。

本稿では予定時間の 90 分間で話しきれなかった部分を簡潔に振り返ってみたい。

2 鎌倉の衰退から観光地化へ

まず、私が上記講座で予定した構成を示すと、①鎌倉を数字で見る②鎌倉検定について③鎌倉の地形・地質④鎌倉の歴史・文化・観光⑤浜地（由比ガ浜方面）の発掘調査について、とした。前半の説明に時間がかかってしまい、④の終わりと⑤の部分に十分時間を割けなかったと反省している。

④の後半で扱いたかったのは、「その後の鎌倉」という点である。教科書では鎌倉幕府が減ぶとともに扱いが少なくなり、すぐに鎌倉の町が荒廃してしまったと思う人もいるだろうが、室町幕府は都市鎌倉の重要性を認識し、鎌倉に鎌倉府という役所を置き、その長官である鎌倉公方に関東の抑えを任せた。よって、元弘 3 年（1333）の鎌倉

幕府滅亡から、永享 10 年（1438）の永享の乱で将軍足利義教と対立した鎌倉公方足利持氏が滅ぼされるまでの約 100 年間は、都市鎌倉の重要性が低下したり、町全体が著しく衰退したりすることはなかった。

しかし、永享の乱（1438）や享徳の乱（1455～1483）が起こり、関東が全国に先駆けて戦国乱世に突入したことによって、15 世紀後半から 16 世紀初頭の鎌倉はかなり荒廃していく。

このように荒廃した鎌倉の再興に取り組んだのが小田原城を根拠地とした戦国大名後北条氏である。特に後北条氏三代目の北条氏康は鶴岡八幡宮に社領を寄進し、浜の大鳥居（当時の一ノ鳥居）を建立したりして、鎌倉の再興に尽力した。



（若宮大路沿い、現一ノ鳥居より 180m 北側）

なお、写真の浜の大鳥居の発掘は平成 2 年（1990）2 月に行われ、北条氏康の頃に建立されたと思われるクスノキの柱痕が見つかった。

その後、江戸時代になると鎌倉が観光都市として人気を博すことになる。その要因として三点を

* 山形県立博物館 研究員

あげておく。一つ目は貞享2年(1685)に徳川(水戸)光圀の命で『新編鎌倉志』が編纂・発行されたこと。観光案内書として多くの人に読まれ、鎌倉観光の発展に大きな影響を与えた。二つ目は鎌倉の各寺社による江戸での出開帳である。鎌倉の寺社は小規模なところが多く、所領や寄付だけでは建物や保有する文化財を維持管理するのが難しく、修繕や改築費の不足分を補うために、江戸に寺(神)宝を出張させ公開することで収入を得ていた。これが鎌倉の知名度アップにつながった。三つ目は大山詣と江島詣の流行である。江戸の庶民が近場で旅行をすれば、成田山新勝寺か大山阿夫利神社と江島神社への参詣(大山詣と江島詣)が流行した。大山阿夫利神社は神奈川県伊勢原市にある雨乞い信仰の中心とされた神社で、祭神は大山祇大神(おおやまつみのおおかみ)である。当時は男神だけに参詣するのは片参りで良くないとされたことから、近くの女神(江島弁財天)を祀る江島神社にも参詣(これを二所詣と言う)する方が良いと考えられた。その後鎌倉を観光して江戸へ帰るというプチ旅行が大人気となったのである。これらのことがきっかけで、鎌倉は観光都市として復活していった。

3 由比ガ浜方面の発掘調査について

鎌倉市内で自治体や大学が主体となり、本格的に発掘調査が行われたのは戦後になってからである。しかも、1970年代前半までの調査対象は文献史料の比較的多い寺院跡や「やぐら」が主で、未調査のまま公共施設や宅地の建設が進んだ市街地の発掘調査は、1970年代後半以降の公共施設の建て替え工事や移設等が進んだ時期からである。中でも、鎌倉の浜辺の発掘調査は新しく、都市鎌倉の新たな一面が窺える貴重な資料だと考え、講座ではその一部を紹介した。

今までの由比ガ浜・材木座・長谷・稲村ヶ崎な

ど海岸部の発掘調査による特徴は三点ある。一つ目は堆積土層が砂を主体としているため、木製品などの有機遺物がほとんど残らないこと。二つ目は半地下式の「方形竪穴建築址」と呼ばれる建物群が多く、街内に見られる掘立柱建物・礎石建物がほとんど出てこないこと。三つ目は「人骨」や「獣骨」がまとまって見つかり、いわゆる埋葬エリア(集団墓地)として利用されていたこと、をあげることができる。

以下は由比ガ浜中世集団墓地遺跡の発掘現場写真である。①は大穴に頭蓋骨ばかりが約350体分集めて埋葬した跡である。このほかにも人骨(体も全部)を集積埋葬した跡もあり、この周辺が埋葬地だったことがわかる。②は方形竪穴建築址の倉庫群跡である。このあたりは和賀江嶋の港に近いことから、着いた大量の荷をここに集めて保管していたと考えられる。埋葬地と倉庫群が共存しており、鎌倉の浜辺を様々な形で利用していたことが窺える。

写真①



写真②



鎌倉市教育委員会『鎌倉の埋蔵文化財6』より

4 おわりに

まだ書き足りないが、紙幅の関係もあるので、最後に講座に参加していただいた方々に感謝して終わりとする。

[参考文献]

鎌倉考古学研究所編『中世都市鎌倉を掘る』1994

鎌倉市教育委員会『鎌倉の埋蔵文化財6』2003

中世都市研究会編『鎌倉研究の未来』2014

「明治 150 年」記念特別展「^{ターニングポイント}転換点」をふりかえって

岩崎 靖 *

Yasushi Iwasaki

1 はじめに

当博物館では、平成 30 年 6 月 2 日から 8 月 19 日まで 70 日間の会期で、「明治 150 年」記念特別展を開催した。この特別展は、本館と分館で同時開催コラボ企画であり、本館では「^{ターニングポイント}転換点—幕末動乱と統一山形—」という題で開催した。異動二年目での展示会担当ということで、実際の事前調査・研究は十分とはいえないところもあったが、会期中の入場者アンケート結果は概ねよく、一安心するとともに展示の意図した成果が現れたのではないかと思っている。本展示会のために、資料調査や資料借用に関わり、多くの関係機関や個人の御理解・御協力を賜ったことに厚く感謝を申し上げたい。

2 特別展開催の経緯

平成 30 (2018) 年は、近代日本の幕開けともいえる明治改元からちょうど 150 年の節目である。江戸から明治に時代が変わるとき、大きな転換点となったのが戊辰戦争である。高校の日本史の教科書には、鳥羽・伏見の戦い、江戸城無血開城、会津若松や函館で行われた戦いについては記載があるが、山形についてはほとんど記載がないため、山形各地にも幕末・明治維新の激動があったはずなのだが、個々の史実についてはあまり知られていない。よって、私は山形の「転換点」について目に見える形にして、当時の山形の姿を伝えたいと願い、本展示会を企画した。

これまでは戊辰戦争というと薩摩藩・長州藩を

中心とする武力討幕派と、会津藩を中心とする佐幕派という対立構図で論じられることが多かった。しかし、これまで語られてきた一面と、地域的な視野がなければ見えてこない一面とがある。ことさら山形における状況は、一般的には知られていないことが多いため、現在の山形県内におかれていた五つの藩（天童藩・米沢藩・山形藩・新庄藩・庄内藩）にフォーカスし、現在の山形県四地域を万遍なく紹介できるようにした。また時系列や藩ごとにまとめて整理して展示するなど分かりやすい構成を心がけた。展示構成や展示資料については 3 で詳しく述べていきたい。

さらに、明治時代に入って、藩閥政治が終わり中央集権化が進められるが、統一山形成立までの軌跡については、明治新政府によって行われた戦後処理や、版籍奉還・廃藩置県などの改革の結果、どのような過程をたどって現在の山形県が形づくられたのか、明らかにできるように心がけた。

3 展示構成と展示資料について

まず、展示構成については 3 部構成とした。第 1 部は江戸時代の山形について、第 2 部は山形における戊辰戦争について、第 3 部は明治時代の山形について、それぞれ時系列に沿った構成とした。その中でも第 2 部は、藩ごとに戊辰戦争における立場が異なるため、藩ごとにまとめることで立場や経過が分かりやすくなるように工夫した。

次に、展示資料については前後期通じて計 62 点である。主な資料を挙げておく。第 1 部では、

* 山形県立博物館 研究員

以下 2 点の絵図類である。

山形城下絵図（寶幢寺本）	当館蔵
水野時代山形城図	山形県立図書館蔵

これらを横並びにして展示することにより、江戸時代前期の最上家時代の山形城周辺と、江戸時代後期の水野家時代の山形城周辺では様子がまるで違うことが一目で分かるようにすることをねらいとした。短い導入で第 2 部に誘導できるように工夫したところである。

第 2 部では戊辰戦争の生々しい様子を伝えることをねらいとしたため、以下のとおり文書資料に限らず、実物資料を多く展示するようにした。

吉田大八遺墨「絶命の辞」	護国神社蔵（天童市）
織田信敏公所用陣羽織	天童市立旧東村山郡役所資料館蔵
米沢藩三十匁火縄筒	（公財）宮坂考古館蔵
水野三郎右衛門元宣謝罪嘆願書	豊烈神社蔵（山形市）
旧山形藩士岩永郷太郎着用軍衣	個人蔵
新庄藩備倉の焼け糺	新庄ふるさと歴史センター蔵
新庄藩が賜った菊花旗	戸澤神社蔵（新庄市）
戊辰戦争時に使用された銃弾	清川公民館蔵（庄内町）
御殿林の杉の木に突き刺さった鉛の弾丸	（公財）清河八郎記念館蔵
大砲の砲弾	（公財）致道博物館蔵

これら県内各地に残る戊辰戦争資料を当館に集めて展示ができたことで、各藩の立場や苦悩を可視化することができたのではないかと思います。

第 3 部は明治時代に入り、現在の山形県が成立するまでにどのような過程をたどったのかを明らかにし、そこに大きな影響を与えた統一山形初代県令三島通庸に関する資料を中心に展示を行った。

山形新聞第一号	当館蔵
三島通庸胸像	当館蔵
三島通庸肖像写真	当館蔵
三島通庸佩刀	当館蔵
三島通庸奉納戊辰戦死者銘板	新庄ふるさと歴史センター蔵
山形県新築之図	当館蔵

山形県下名所図会	当館蔵
山形県下眼鏡橋之真景	当館蔵

「土木県令」「鬼県令」などと称されることもある三島通庸ではあるが、戊辰戦争前は荒れ果てていた山形城周辺や城下町を県都として整備し、山形の近代化を推し進めた稀有な存在の人物であったことがお分かりいただけたと思う。

4 おわりに

最後に入館状況やアンケートから考えられることを報告し、まとめにかえていくこととする。

入館状況については以下のとおりである。

会期：平成 30 年 6 月 2 日（土）～8 月 19 日（日）

開館日：70 日間

入館者：9121 人（1 日平均 130.3 人）

（目標値：1 日平均 130 人）

アンケートの四段階評価は以下のとおりである。

とてもよかった	264（33.8%）
よかった	496（63.6%）
あまりよくなかった	18（2.3%）
よくなかった	2（0.2%）

「とてもよかった」と「よかった」を合わせると 97.4%を占める。山形の幕末・明治について予備知識がない方も多かったと思われるが、高い評価を得ているということは、「分かりやすさ」に焦点化したことの成果である。さらに入館者が目標値をわずかではあるが上回ることができた。数多くの方々に、山形県の「転換点」について紹介することができ、大変うれしく思っている。

以上、入館状況と評価から考えられることをまとめたが、本展示会で意図していた「分かりやすさ」という点では、概ね達成できたように思える。展示会を初めて担当し、慣れないことばかりでご迷惑をおかけしたが、館長はじめ県博職員の支えにより、無事に終えることができた。改めて感謝したい。

資料紹介「庄司家絵画資料」について

佐藤 佳美 *

Yoshimi Sato

「庄司家絵画資料」について

庄司家絵画資料は、山形県最上郡真室川町の庄司家に伝わった錦絵群で、平成 29 年 3 月以降 3 回に分けて寄贈されたものである。その内容は、江戸時代の役者絵などの錦絵から、明治時代の皇族の肖像画や日清・日露戦争を描いた印刷物、日光山・信濃善光寺などの名所絵版画などで、およそ 120 点となる。

これらの絵画を、庄司家では桃の節句の際、雛人形を飾った背後の壁に吊るして飾ったという。そのため、ほとんどの資料には、上辺の角 2 か所と中央に木綿糸を通してあるか、糸を通すための小さな穴があげられている。中には吊り下げた際に穴の周辺がちぎれてなくなってしまったものもある。また、裏面の四辺に糊をぬった形跡のあるものや、他の絵とつなげるための短冊状の紙が貼られているものもある。特に、明治期の横長型の絵画類の中には、飾るために 2 枚から数枚、縦に貼り継がれたものもある。そのため、これらの絵画資料は、美術品であると同時に、雛祭りの際に部屋の壁を飾ったという風習を伝える民俗資料としての性格をもつものである。

「豊国」・「国貞」の浮世絵

今回はこれらのうち、「豊国」「国貞」と署名のある江戸期の浮世絵 15 点を紹介する（なお、画中の署名を引用する際は、書かれたとおりの文字で表記する）。

「豊国」こと歌川豊国は、天明 8 年（1788）頃

から文政 7 年（1824）頃まで活躍した初代豊国、その門人で初代の養子となり、初代の死後 2 代を名乗った 2 代豊国、同じく初代の門人でやはり 2 代豊国を名乗った歌川国貞（区別するためこちらを 3 代豊国と呼ぶ）の 3 人が存在する。なお、国貞が「豊国」を名乗るのは弘化元年（1844）以降である。

「豊国」と署名のある作品は①～④・⑭・⑮である。改印などから、①は嘉永 6 年（1853）の作、②は安政元年（1854）作、⑮は安政 6 年（1859）作であることが分かり、この時期に作画活動をしていた 3 代目豊国（歌川国貞）の作であると考えられる。

また、④には「後素亭豊國画」とあるが、「後素亭」を名乗るのは 2 代豊国である。⑭は「一陽斎豊國」とあり、3 代豊国の画号であること、改印から嘉永期の作と考えられることから、3 代豊国の作とみてよかろう。しかし、③については極印と、鶴屋喜右衛門の版元印に似た、鳥を模した版元印があるのみで、制作年代を特定することが出来ず、どの豊国の作品かわからなかった。なお、③の絵は木曾義仲最期となる栗津の戦いを題材としており、義仲と別れた巴の奮戦ぶりを描く。根こそぎ引き抜かれた松の幹を巴と和田義盛とが引きあう図となっており、画面後方では、田の深みにはまり、身動きが取れなくなった義仲を、石田三郎為久が弓で狙っている様子が見える。

⑤から⑬は「五渡亭國貞画」、「香蝶楼國貞画」

とあり、いずれも歌川国貞の作品である。⑧・⑨の制作年は ARC 浮世絵ポータルデータベースを参考にしたが、その他の絵はいずれも極印と版元印のみであるため、制作年の特定はできなかった。また、⑥・⑩・⑪の版元印は山に「サ」とあり、太田屋佐吉または伊勢屋半左衛門のものであるが、特定できなかったのここでは不詳としておく。

②の作品は「源氏物語」を題材に、少女らに雪遊びをさせている様子を源氏と紫の上とが眺めている場面を描いたものである。本来は3枚続の作

品であるが、寄贈品の中には左右の1枚ずつしかなかった。なお、中央の絵は歌川広重による雪景色を描く作品であった（参考：早稲田大学図書館古典籍総合データベース）。

今回は紙面の都合上15点の紹介に留めておく。改印・版元名などは『原色浮世絵大百科事典』第3巻を参考とした。絵画の研究に不案内なため、版元や制作年の特定に不確実さもあるかと思う。今後、ご教示いただければ幸いである。

番号	作者	資料名	制作年	数量	版元	改印	署名
①	歌川国貞 (3代豊国)	荒波大尽 遊女あやはた 白ぬひ大尽	嘉永6年 (1853)	3枚続	清水屋 直次郎	名主双印・年月印 (村田・衣笠、丑四)	豊國画
②	歌川国貞 (3代豊国)	東源氏雪乃庭 (左)	安政元年 (1854)	2枚	森屋治兵衛	改印・年月印 (改・寅十二)	豊國画
③	(歌川豊國)	巴女 和田義盛 今井四郎兼平 木曾義仲 石田三郎為久		3枚続	不詳	極印	豊國画
④	2代 歌川豊国	全盛松の粧 西 尾張屋内満袖 まさきよすが		1枚	伊勢屋 利兵衛	極印	後素亭 豊國画
⑤	歌川国貞	大森彦七 市村羽左衛門		1枚	森屋治兵衛		五渡亭 國貞画
⑥	歌川国貞	片岡市蔵		1枚	不詳	極印	五渡亭 國貞画
⑦	歌川国貞	梅の方 瀬川菊之丞		1枚	上州屋金蔵	極印	五渡亭 國貞画
⑧	歌川国貞	楽人斎実ハ田五平 片岡市蔵	文政13年 (1830)	1枚	川口屋正蔵	極印	五渡亭 國貞画
⑨	歌川国貞	七十二候 涼風至	天保初年 (1830)	1枚	川口屋正蔵	極印	五渡亭 國貞画
⑩	歌川国貞	さゝの三五兵衛 市川団十郎		1枚	不詳	極印	五渡亭 國貞画
⑪	歌川国貞	さゝの三五兵衛 市川団十郎		1枚	不詳	極印	五渡亭 國貞画
⑫	歌川国貞	小柳常吉		1枚	上州屋金蔵	極印	香蝶楼 國貞画
⑬	歌川国貞	江戸町老丁目大黒屋内 倭		1枚			香蝶楼 國貞画
⑭	歌川国貞 (3代豊国)	荒馬吉五郎	嘉永期 (1848～53)	1枚	藤岡屋 慶次郎	名主双印 (米良・村田)	一陽斎 豊國画
⑮	歌川国貞 (3代豊国)	遠山甚三 古梅沢五郎兵衛	安政6年 (1859)	1枚	辻屋安兵衛	年月改印 (未弍改)	豊國画

*⑧・⑨の制作年は ARC 浮世絵ポータルデータベースを参考にした

①



②



③



③版元印部分拡大



⑥・⑩・⑪版元印部分拡大



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



明治初期の教員養成事業と山形県師範学校の建設

青木 章二 *

Shoji Aoki

1 はじめに

明治5年(1872)、わが国の近代学校制度の基本構造を定めた「学制」が公布されて、全国に小学校が創設され普及するなか、当初から大きな問題となったのは、近代教育普及の担い手となる教員の不足であった。新しく小学校がつくられたとはいっても旧態依然、教育の内容や方法は従前の私塾や寺子屋と変わらないという状況は全国に少なくはなかった。近代教育の理論と方法に習熟した教員を大量に養成することが急務とされ、教員養成のための教育機関の整備が進められた。文部省は、5年(1872)5月東京師範学校を設立したのはじめ、翌6年(1873)8月には大阪と宮城、7年(1874)2月には愛知・広島・長崎・新潟に設置して、全国七大学区本部に官立師範学校を1校ずつ設立した。また、同年3月には東京に女子師範学校を設立した。一方、この頃より次第に府県立の師範学校が設立されたことにより官立の師範学校との競合関係が生じたとともに、当時の厳しい財政事情から、10年(1877)、大阪・宮城・新潟・愛知・広島・長崎の6官立師範学校は廃止され、官立は東京師範学校と東京女子師範学校の2校だけとなった。同時に文部省は府県に師範学校設置を奨励して補助金を配布し、小学校教員養成の事業を地方に委任することとした。

9年(1876)、統一山形県の初代県令となった三島通庸は、就任後直ちに師範学校の設立計画に着手し、11年(1878)10月、山形県師範学校が開校

した。山形県師範学校の設立までの経過は、『山形大学教育学部九十年誌』及び『山形県教育史 通史編 上巻』等に詳述されているが、小稿では同校設立以前の3県時代を含む本県における教員養成事業や開校までの建設事業等について両書が触れていない資料や記事をも紹介しながら、山形県師範学校設立以前の歩みを改めてたどってみたい。

2 明治初期、3県時代の教員養成事業

全国で5万3千余の学校を設立する「学制」の計画が次第に具現化され、山形県でも各地に小学校が設立されていくにつれて、小学校教師の不足は深刻となった。師範学校の卒業生は依然として限られ、正式な教員資格者は地方ではきわめて稀であり、寺子屋・私塾の教師や僧侶・神官等、地域の知識人等を仮として教師に任命するのが多くの実情であった。このような状況から、新教育に必要な掛図、教科書、教具等がたとえ揃っても使用法がわからず困惑する教員が数多くいたという。文部省及び各府県は、最初の対策として、官立師範学校に現職教員を派遣して新教育の実際を参観、講習を受けるなどして新教授法を学ばせ、帰県後に他の教員に新教育法を伝達することを計画した。さらには師範学校の卒業生を地方に指導者として招来、地域の教員育成及び現職教員の資質向上を図った。この時教員養成機関として設置されたのが伝習学校であった¹。以下に3県時代の酒田(鶴岡)県の事例を最初に紹介したい。

* 山形県立博物館教育資料館 学芸員

6 年(1873)、酒田県では小倉政挙、中台直矢、小室由成の 3 名を東京師範学校、その他の小学校に派遣して視察、授業法を伝習させている。翌 7 年(1874)2 月帰郷した 3 名は酒田町天正寺に仮教師候補者 14 名を数日間招集して教授法を伝達した。

8 年(1875)3 月、宮城県師範学校卒業生矢吹薫を三等訓導に任じて伝習学校を設置した。1 校から 1 名ずつの仮教師及び仮教師手伝を入学させ、教授法、管理法、教科の研究、読書算の 3 科について伝習させた上で卒業生を授業生に採用した²。「第六大区巡視功程」の記事をみると、修業期間は 60 日であったが、教員不足の危急を救うには時間が長すぎることから東京府講習所の教員 4 名を招聘し、また鶴岡に 1 校を設けたとある³。本来は 1 年間の課程であったが養成における「速成」が優先され、2・3 か月乃至半年で修了させることが多く伝習期間は一定ではなかった。酒田伝習学校は、11 年(1878)に廃止された。

統一山形県成立以前の山形県における伝習学校の設置に着目すると、8 年(1875)11 月、「小学仮伝習所」が「香澄町地内横町口」に設置され生徒 85 名を募集した。官立師範学校卒業生の訓導が教員となり、生徒の年齢は満 16 歳以上 40 歳未満とした。下等小学学科授業法を伝習して授業日数は 2 か月であった。「生徒伝習中ノ賄方」は一切伝習所の費用とし、現職の者に対しては相当の金額を給料として与えた。9 年(1876)3 月には教員資格試験の布達が出された。会場は七日町学校で、試験科目は、歴史、理学、地理、算術、作文、手跡のほか教授法があった⁴。

一方、置賜県では、同年米沢市門東町に「師範学校」が設置され、教員 1 名、生徒 17 名が在籍していた。師範学校の得業生 1 名を教員として、生徒は 18 歳から 30 歳までのものを試験で選抜した。おおよそ 1 年間の修業期間で学資は書籍器械のほ

かは一切自弁であった。

9 年(1876)9 月の統一山形県成立以後の動きとしてまず挙げられることは、同年 11 月に山形の専称寺に「伝習校」を設置し、生徒数十名を募集したことである。この時に出された覚書では、「校費一切官費」としている。翌 10 年(1877)4 月には、「今度第一大区山形常念寺江山形伝習校開設、生徒六拾名ヲ限り、試験ノ上入学差許候条、志願之モノハ、来ル五月十日迄、履歴書相添願書可差出此旨相達候事」という布達が出されている⁵。

「学事年報」によれば、山形十日町の常念寺に設置された山形伝習校は 9 年(1876)の時点で、教員 2 名、生徒は男 72 名、翌年には生徒男 120、女 3 名となっている。同様に米沢門東町の米沢伝習校は、教員 2 名、生徒は男 68 名、翌年には生徒男 73 名、鶴岡新地の鶴岡伝習校は、教員 2 名、生徒は男 66 名、翌年には生徒男 57 名、となっている。

山形県師範学校発足後も最初の卒業生を出すまでには少なくとも 2 年の間があり、教員養成機関としての伝習学校の役割は依然と変わらず、11 年(1878)には 5 校、12 年(1879)には 4 校、13 年(1880)には 3 校あったことが「学事年報」に報告されている。

3 山形県師範学校の建設

山形県師範学校の建設計画に関する資料として、10 年(1877)の「学事年報」に掲載する文部権大書記中島永元の山形県巡視功程に「師範学校ハ未ダ完備セス方今県庁隣接ノ地ニ於テ之ヲ新築スルノ計画中ニシテ学務課長貴島宰輔之ヲ担当ス」とあり、三島県令が万日河原と称された旧馬見ヶ崎河原の荒蕪地に造営を計画した新官庁街の一角に県庁舎と隣接して師範学校の建設が予定されていたことがわかる。山形旅籠町旧万日寺跡に県庁及び師範学校を新築する旨の布達が出されたのは、9

年(1876)10月29日であった⁶。県庁舎及び師範学校の建築計画についてその仔細を検討すると、同年11月3日付けになる住民からの県庁用地提供の願い文にその土地が「師範学校建築地裏」とあること、加えて12月20日付けで内務省に出された「県庁新築之儀付伺」の中で、同様に「師範学校建築地ノ傍」とあることから、県庁舎の立地選定に先んじて師範学校の建設予定地が決まっていた可能性が指摘されている⁷。このことの傍証となると思われる資料が9月1日付けの「山形新聞」第1号にみえる。まず「万日堂の跡へは師範学校御建築に相成る由なり」という記事があり、三島通庸が統一山形県の県令として着任した10月3日以前に⁸師範学校の建築予定地が万日堂跡に既に決まっていたことが伺える。これとは別に同号には「県庁にては御門と外圍（ソトカコイ）の営繕（ゴフシン）あり兩三日には竣功（デキアガリ）する模様なり定めて壯麗（リツパ）に相成事て御座升ウ」という県庁の営繕工事に関する記事が載っている。この県庁舎は旧三の丸郭内にあり、旧山形藩主の建築による新御殿と呼ばれた建物であった⁹。門と外囲いの整備は新県令を迎えるに当たり行われた工事であろう。新御殿は狹隘の上に老朽化が進んでいたことから、この営繕工事は新庁舎建築までの暫定措置であったとも考えられようが、少なくとも9月1日の時点では、師範学校の建設が「～由なり」という表現の未確定情報の形ではあるものの建設予定地とともに明らかにされている一方、新県庁舎の建築計画は表にはあらわれてはいないのである。

この県庁舎は狹隘である上に政庁と住居を兼ねた構造で不便が多々あり、さらには敷地が陸軍省の所轄に属して永続の見込みはなかったために、10年(1877)1月、官の許可を得て万日河原への新築移転が決まった¹⁰。

10年(1877)5月、師範学校の敷地整備に着工、

建築用材は西置賜郡山口村姫城及び西村山郡慈恩寺の官林を伐採して調達された。10月28日、県は各区長に対して師範学校建築費の献納を布達した¹¹。たとえば村山郡長崎村からは39円90銭9厘が提出されたが、このとき村々には地価1,000円につき10銭3厘6毛、戸数割1戸につき3銭5厘9毛が割り当てられていた¹²。民間から献納された建築費は29,412円であった¹³。

11年(1878)9月、山形県師範学校の学舎は竣工した¹⁴。その建設には種々の困難があり、一年半の長きにわたり寝食を忘れて建築に従事した柴山景綱が現場の労苦を伝えている¹⁵。

中央正面に3層の時計台を備え、左右にガラス窓を連ねた2階建ての西洋建築は、当時山形における最高学府にふさわしい偉観と称えられた。開校式は10月1日、三島県令の臨席のもとに举行された。市中では山車を挽き出すというお祭り気分にあふれ、実に盛大な式典であったと伝えられている。時計塔を具備した学校としては、東北で最初の学舎であり、新聞は「五層楼上に自鳴鐘を置き時辰を報ず、その声市街に轟々たり。」¹⁶と報じている。

4 おわりに

「明治150年」に当たる平成30年(2018)は、山形県師範学校創立140年であるとともに、創設者三島通庸没後130年の節目となる年でもあった。山形県立博物館教育資料館では、記念として特別展「明治期の山形県師範学校」を開催し、関連資料の展示を通して明治期における同校の歩みを振り返った。小稿は本展示会では紹介できなかった山形県師範学校の創設前史をまとめたものである。

(注)

-
- ¹ 呼称としては、伝習所、講習所、養成校など様々であった。
- ² 『琢成五十年』の「酒田伝習学校」(『琢成百年』に再録 p 110)
- ³ この時招聘した4名は、深田康守、成富一郎、関原弥里、田島桑三郎であったと考えられる。また、明治7年の「酒田県学事年報」によれば、さらに当県士族の師範学校卒業生を加えた6名体制として酒田・鶴岡のほかに松嶺にも講習所を設置する計画であった。
- ⁴ 『富本小学校 百年誌』 p 34
- ⁵ 同上
- ⁶ 『山形県史 通史編第四卷 近現代上』 p173
- ⁷ 野中勝利「三島通庸による明治初期の山形・官庁街建設における建設意図」(『日本建築学会系論文集』第589号)
- ⁸ 三島通庸の統一山形県令任命の布達は、明治9年(1876)8月26日付けで出されている。
- ⁹ 第一次山形県が成立した明治3年(1870)の10月19日、新御殿が県の官吏に引き渡され、直ちに山形県庁の標札が掛けられた。(『山形市史 下巻 近現代編』 p 114)
- ¹⁰ 『東村山郡史 続編 卷之二』 p 223
- ¹¹ 同上 p 222
- ¹² 『中山町立長崎小学校百周年記念誌』 p 50
- ¹³ 「山形新聞」明治16年(1883)10月17日付け
- ¹⁴ 学舎の建坪について、山形県師範学校の「沿革史」には、総建坪930坪2合5勺、内「本校建坪」441坪2合5勺、内「学校教室、学科教室、事務所等」として240坪という記録がある。
- ¹⁵ 『柴山景綱事歴』 p 41～42
- ¹⁶ 「米沢新聞」明治13年(1880)3月28日付け

「博物館まつり」の実施及び今後の課題について

須田 真由美 *

Mayumi Suda

1. はじめに

博物館における教育普及活動の重要性についてはすでに認知される場所であり、教育普及専門の部署や担当者（エデュケーター）を配置する施設は年々増加し、その内容についても多様化している。当館では、その重要性が認識されながらも予算及び人的な課題を主たる要因として、企画展示または部門ごとの教育普及活動（講座・体験イベント）を可能な範囲で実施している状況であった。各部門主体による実施は負担が大きい割には規模が限られ内容にも課題があったため、年4回の「博物館まつり」として特に体験イベントについては集約化を図った。以下その取り組みについて簡単に紹介する。

2. 従前の課題確認と対策

（凡例：●＝現状 ○＝対策）

（1）各部門任せの企画・運営

●基本的には、7部門それぞれ正規職員1名という配置の中で、部門ごとに講座やイベントを企画・運営することには困難が伴い、結果的に毎年同じ企画を実施することが精一杯で、イベントのマンネリ化が一つの課題となっていた。○企画・運営を Team MATSURI が担当し、その構成人員を企画展示担当者以外の学芸員とした。構成人員4名は春夏秋冬それぞれの「博物館まつり」の主担当を務め、立案・準備・広報・運営等について役割を変えながら分担する

ことで、実施方法やスケジュールを共有した。

また、「博物館まつり」ごとにアンケート調査を実施して利用者の反応を確認するとともに、職員の意見も聴収し、次回の課題として活かしていくことにした。

○春夏秋冬の「博物館まつり」それぞれにコンセプト及び利用者のターゲット層（世代）を念頭にイベント・講座を企画することで、統一感とわかりやすさを演出した。さらに、広報活動では、コンセプトを大々的に掲げることで報道各社の関心を引いて事前報道に協力を仰ぎ、その一方で、ターゲット層を明確にすることにより広報媒体や広報先を工夫することにした。

（2）博物館ならではの“学び体験”

●「こどもの日」や「文化の日」等の無料開館日に多くの利用者が来館するため、これを対象とする無料体験イベントを例年実施していた。「四次元宇宙シアター」「おしばのしおりづくり」「昔の遊び道具づくり」等を数年にわたり実施していたが、利用者の動きを観察すると無料体験のみの利用で、展示室には興味を示さない場合が少なくないことがわかった。このことは、既存のイベントは“博物館らしいイベント”に相違ないが、“博物館における学び”に繋がっていない一過性のイベントという課題を浮き彫りにしている。また、建物の構造上、展示室のある2階へ誘導する工夫が不可欠であることも示している。

* 山形県立博物館 学芸員（民俗部門）

文化庁主催ミュージアム・エデュケーター研修修了生

○企画展示における教育普及活動については、「体験型展示」を目指し平成 29 年度から「観る」だけではなく「五感で親しむ」展示に、展示主担当者を中心に全職員で取り組む体制を整えつつあり、平成 29 年度の雅楽展における「聴く」活動や平成 30 年度のヤマガタダイカイギウ展における「触る」活動は、利用者の展示に対する興味関心や学びを十分に引き出している。これをモデルとし、小規模ながら部門ごとに実施していた体験イベントを年 4 回の「博物館まつり」に集約し、“博物館の展示を体感できる” アイディアを全職員で検討し、組織的かつ効率的な運営に取り組むことになった。

○年 4 回の「博物館まつり」を企画する段階で、必ず 1 つは利用者を展示室へ誘導できるようなイベントを盛り込むこととした。

（3）限られた予算と人員による運営

●企画展示における教育普及活動を除いた講座・イベントについては、予算的措置がほとんどなされていないため、実施できる講座・イベントの規模や広報活動が制限される。

○企画展示との関連性を十分に活用し、また、外部資金の活用等にも積極的に挑戦する。

●“博物館における学び”を提供するために相応の説明を要するイベントが多く、部門ごとの準備では十分な対応ができなかった。また、利用者の低年齢化が進み、職員張り付きによる指導が必要な幼児が増えており、運営面での課題となっていた。

○開催当日は少人数でも対応できるような企画の立案と事前準備を行う。具体的には、準備段階から学生ボランティアにも関わってもらい、準備を万全にすることで当日は職員のみでの対応でも可能な範囲のイベントを実施する。また、各「博物館まつり」では複数のイベントを準備するが、学芸課職員に対して事前に担当イベン

トを割り当て、グループ別に準備にあたることにした。各グループの責任者を Team MATSURI の構成員が務めることで、進捗状況を互いにチェックしながら準備・当日運営・撤収を組織的に行った。

3. 「博物館まつり」の実施

凡例：①コンセプト ②ターゲット設定
③企画内容（★は缶バッジ配布企画）
④成果と課題 ⑤利用者数とその内訳、分析

（1）春の博物館まつり 5月5日（土・祝）

①つくって遊ぼう！

②小学生以下の子どもとその保護者

③「自然の色とかたちのふしぎ（折り紙細工）」

「フライングシードを飛ばそう！」★

「新聞紙でこどもの日」

特別ゲスト：憑神シェイガー（大江町地域おこし

④事前準備の差が明確に表れた。「博物館まつり」は多くの利用者が見込まれるため、少人数による対応が可能となる企画立案・準備が不可欠であることを再認識した。また、利用者の混雑回避のため、館内放送の活用と床に動線を明示することを試み、適度な館内放送は有効であることがわかった。

⑤1,056 名【乳幼児 98 (9.3%) 小学生 189 (17.9%) 中学生 34 (3.2%) 高校生 15 (1.6%) 学生 15 (1.6%) 一般成人 703 (66.6%)】

※メインターゲットは小学生だったが、中学生～学生の全体に占める割合が 6.3%と年 4 回の中で一番多く、就学生の好奇心を引き出した企画といえる。

（2）夏の博物館まつり 8月11日（土・祝）

①ナイト ミュージアム

②小学生以下、一般など、イベントごとの対象年齢を設定した企画運営

③「女神ちゃんをさがせ（展示室探検クイズ）」★

「カエルの鳴き声と写真パネルの展示」

「くらやみたんけんたい（段ボール迷路）」

（夏まつり紹介ムービー上映）

特別ゲスト：憑神シェイガー（大江町地域おこし）

④普段は利用者に開放していない講堂・学習室で一週間前から準備を始め、当日の準備は1時間弱で可能な、展示室に特化した準備のみとした。前年度の反省を踏まえ、展示室探検からヒントを得るクイズラリーは採点作業を簡潔にし、カエルのパネル展示や動画の上映は多くの利用者に対し担当職員の配置を最小に抑える工夫として効果的であった。「女神ちゃんをさがせ」（展示室探検クイズ）のパンフレットは施設案内も兼ね、利用者の混雑回避にも役立った。

⑤840名【乳幼児 128（15.2%）小学生 244（29.0%）中学生 26（3.1%）高校生 6（0.7%）学生 4（0.5%）一般成人 432（51.4%）】

※利用者の約半数が小学生以下の子どもで、乳幼児の割合が年4回の中で最も多い。その一方で、高齢者の利用は最も少なく、祝日の夜という日時設定のため「子どもとその親」という組み合わせである。（夏以外は「孫とその祖父母」の組み合わせも多い。）

（3）秋の博物館まつり 11月3日（土・祝）

①もっと知りたい！日本遺産

②一般成人向けと子ども向けをバランスよく

③「特別講演会（紅一伝統の製法と習俗）」

「紅化粧体験とお守りづくり」

「林家舞楽と尾花沢雅楽の披露」

「紅花をたべてみよう！（呈茶と紅花羊羹）」

「紅花のミサンガづくり」

特別ゲスト：めがみ◎&はながたベニ◎★

④4 外部団体との協働活動であったが、イベントごとの事前調整や臨機応変な対応により、概ね円滑に運営できた。予想を上回る利用者があったが、館内放送や表示の工夫で一部の例外を除く混乱を回避した。例外とは、ゆるキャラの

人気を甘く見ていたこと、複数のイベントの開催時間をずらして利用者に配慮したつもりが、一部のイベントの時間にも嵌れない場合が生じ、利用者の期待に添えない実態もあった。広報活動では、近隣地域の回覧板による周知に初めて取り組み、小さな一歩ではあるものの手応えを得た。年一回は地域への情報発信を兼ねた広報活動を実施することで、地域住民に身近に感じてもらえる可能性がある。

⑤1,166名【乳幼児 124（10.6%）小学生 186（15.9%）中学生 8（0.7%）高校生 7（0.6%）学生 10（0.9%）一般成人 831（73.1%）】

※一般成人向けのイベントを意識して配置したため、子どもからお年寄りまで幅広い年代層にご利用いただいた。（春夏と比べて利用者の年齢ボリュームゾーンに明らかな変化が見られた。）

（4）冬の博物館まつり 1月14日（月・祝）

①お帰り！女神さま！

②一般成人を重視

③「『縄文の女神』帰館セレモニーと特別解説会」

「あなただけの女神（スケッチ・ぬり絵・缶バッジづくり）」★

「植物工芸教室（おしばのしおり・ワックスプレート・紅花のペーパーフラワー）」

特別ゲスト：めがみ◎

④「縄文の女神」関連書籍等の紹介コーナーを体験広場に設置し好評であったが、実施場所と動線を工夫し女神関連行事のパッケージ化を図る必要があった。植物工芸教室の利用者が予想を大きく上回り、運営と安全面に課題が残った。来年度以降は、無料開館による実施とコンセプトの設定が課題である。

⑤580名【乳幼児 63（10.9%）小学生 65（11.2%）中学生 6（1.0%）高校生 4（0.7%）大学生 0（0.0%）一般成人 442（76.2%）】

※小学校への広報活動も春・夏並みに行ったが、

「縄文の女神」がとりわけ高齢者に人気であることを再認識した。また、好天に恵まれ、霞城公園近辺の観光客の利用も多かった。

4. 今後の展望と課題

(凡例：○＝成果 ●＝課題)

①年4回の「博物館まつり」の実績により、以下の方針を念頭に置いた3種類の企画(イベント)を基本に企画立案を行う方向性を見出すことができた。1つ目は、実施中の展示に関するイベント、展示室へ誘導する役割を持つイベントであること。2つ目は、講堂や学習室を使用し、コンセプトに合致するイベントまたは博物館における独自の学びを提供するイベントであること。3つ目は、講堂や学習室を使用し、時間を気にせずに無料で気軽に取り組めるイベントであること。例年実施していた体験イベントは3つ目の比重が大きく、今回の博物館行事の改編はまさにその改善、“博物館ならではの学び”への誘いが一つの目的であった。しかし、無料開館日の利用者年齢層の分析から、幼児の利用数は年々増加傾向にあり、低年齢層を対象とするイベントを一つ盛り込むことこそが、利用者の動線を複数確保することに繋がることがわかった。

②部門ごとに運営してきたイベントに新たに開発したイベントを加え、複数のコンテンツを準備することができた。それらを上手く組み合わせることで、イベントのマンネリ化を利用者に感じさせないように工夫していきたい。

③各「博物館まつり」共通のコンテンツとして、各コンセプトに合わせてデザインしたオリジナル缶バッジを準備し、利用者の好評を得た。「博物館まつり」来館の記念品として希少価値が高く、さらにイベントチャレンジ型による配布にすることで、挑戦者の達成感と“博物館ならで

はの学び”に繋がる有力アイテムであることがわかった。一方で、ゆるキャラによる数量限定配布型はむしろ不満が出やすいこともわかった。

①今年度に限っては対外的要因により、各「博物館まつり」のコンセプトを上手く設定できた。来年度以降のコンセプト設定が難しく、春・秋・冬については現時点で未定である。

春⇒企画展に因んだイベントを準備し、展示を体感して学びに繋げる工夫をしたが、2019年は「やまはくセレクション展」(新規収蔵資料等を部門ごと数点展示)の期間中の開催が予定され、テーマ性のない展示であるが故に、展示に因んだイベントを考案することが困難である。

秋⇒今年度5月に日本遺産認定を受けた「山寺と紅花」の普及展示事業を、体験型展示を中心に据えて実施した。推進協議会の予算を有効活用し、日本遺産について理解を深める機会を多くの県民に提供できたことは評価できるが、博物館における日本遺産関連事業は今年度限りの事業であり、「博物館まつり」としては新たなテーマを一から設定する必要がある。

冬⇒普段は常設展示である国宝土偶「縄文の女神」が約半年間の貸し出し期間を終え、12月下旬に返却されたタイミングを捉え、「縄文の女神」に特化した複数のイベントを実施した。広報効果も抜群であったが、今年度同様、時機を捉えたテーマ設定ができる見込みが現時点では立っていない。

②施設・職員数に見合った規模で実施する必要がある。利用者が多いほど職員の目が行き届かない可能性が大きくなり、幼児の利用も少ないことから、安全面の担保が困難となる。

対応が可能な範囲で集客目標を設定し、イベントの内容・広報の範囲を検討する必要がある。

③教育資料館におけるイベント実施を検討するまでは至っていないが、今後の課題としたい。

山形県立博物館研究報告 第37号

平成31年 3月29日 発行

編集・発行 山形県立博物館

〒990-0826

山形県山形市霞城町1番8号(霞城公園内)

電話 023・645・1111

© 2019 Yamagata Prefectural Museum

Printed in Japan